

フィラスティン

2月20日発行（毎月20日発行）第2巻第4号 1980年1月19日 第三種郵便物認可

PLO Magazine: Filastin Biladi

ひらでい 特別号



中東・パレスチナ問題の情報誌 No. 14 January 1981

オリーブの樹は燃えた

—あるパレスチナ人の歩いた道— カわさき たかし



アブドルハミードPLO駐日代表の回想をもとに書かれたドキュメンタリイ小説 一挙掲載!!

オリーブの樹は燃えた

あるパレスチナ人の歩いた道 かわさき たかし

この小説はアブドルハミード P L O 駐日代表の回想をもとに書かれたドキュメンタリイ小説である。

目 次

はじめに 作者のことば	2
日本の読者の皆さんへ ファトヒ・アブドルハミード	4
第1章 故郷の町サファド	6
第2章 赤い金曜日	11
第3章 ユダヤ娘のハンヌ	17
第4章 ワルシャワを逃れて	20
第5章 ハッサンの国盗られ物語	24
第6章 神々の争い	31
第7章 ディール・ヤーシン村の虐殺	36
第8章 命は乾いた砂のよう	42
第9章 さらばサファド	49
第10章 このオレンジは食べてはいけない	55
第11章 バーラダ川の畔にて	58
第12章 ダマスカスとプラトン	62
第13章 敵はどこにいるか	68
第14章 難民の教師とその弟子	74
第15章 死者は帰れない	81
第16章 ガリラヤの湖	87
第17章 目には目、歯には歯を	93
第18章 矛盾の方程式	99
第19章 星に叫ぶ	102
終 章 帰 国	108

لَهْرَدِيَّةِ الْمُنْهَدِيَّةِ
الْمُنْهَدِيَّةِ لِلْمُنْهَدِيَّةِ
جَنْبَلَى
جَنْبَلَى ٩٨١/١١٢.

はじめに

かわ なま たかし

ぼくは、何でも「知らない」から始めるのが一番よい理解の仕方だとと思う。パレスチナの問題についても、ぼくは全く無知だった。では、なぜそれについて書いたのか。なぜなら、ぼくはそれを知らないかったからである。「」で思い出すのは、サンテクジュベリの、「星の王子さま」の中で狐が王子に向って語る「私を馴らしてちょうだい」Apprivoise-moi と言う言葉である。狐だけではない。問題もそれを自分の中で辛抱強く飼い馴らすことによって友だちになる。自分にとって固有な意味を持つようになる。とは言つても、ここで友だちというのは比喩的な意味で、実際は敵になるばあいだつてある。しかし、敵もまた友だち同様、自分にとつて固有な意味を持つのである。

物を書くという行為、読むという行為は、未知の問題を友だちにすることではないだらうか。そのことによつて、自分とはまるで関係のないよう見えてる遠い問題とかわり合い、その問題を介して未知の人間と友だちになつたり敵になつたりすることができるのだ。そこには人間の観念の持つ延長があるのである。しかし、問題を知ろうとする動機は色々あるだらう。石油というよつた現実的利害を動機とする人々もいるだらうし、自分が良心を持つていることを証しようとする人々もいるだらう。あるいは、全く偶然に問題にかかりを持つ人もいるだらう。偶然だつて馬鹿にはできない。だいたい、自分に固有な子供を生むといつことだつて、よくよくそのきつかけをたどつてみると偶然だらう。男と女の出会いからして。事物における必然を探し出すことが科学かも知れないが、あまり必然性ばかり追求すると、眞実からかえつて遠のく」とあるよつた。たとえば、マルサスの人口論の中の *Necessity, that impels all pervading law of nature*) 「必要性といふ、あの力強い、隅々までゆきわたつてゐる自然の法則」という一句を、岩波文庫訳は「かの万物を支配する自然法たる必然」と訳しているが、これでは、生存競争の原理を語るとしているマルサスの文句の必然性がなくなつてしまつ。Necessity は、必要性、もしくは思い切つて「日々の糧」とでも訳したいところだ。

ぼくが「オリーブの樹は燃えた」を書くよくなつた動機もきわめて偶然的である。むつとも「かの万

物を支配する自然法たる必然」を満たさねばならない動機も少しあつたが、ともかく話の発端は、もつ十数年も続いている月刊セミナー誌「公研」から何か連載を書けとのお話をあつたことである。そこで、編集部の藤島陽一氏とともに相談した結果、当時、石油危機とからまつて急に日本国内でも燃え上がつてきたバレスチナ問題を取り上げることになった。そして、藤島氏にお膳立てして頂いて、東京のP.L.O.駐日代表事務所にファトヒ・アブドルハミード代表を訪ね、六回にわたつてハミードさんの出パレスチナ記をお聞きすることになった。そのうち、革命家というよりは思索家肌の物静かで温和なハミードさんの顔が、ぼくの中でサファードに住んでいたハーリスというパレスチナ人の少年にふ化し、自己の道をたどり始めたのである。

そこで、お断りしておかねばならないことは、この物語はハミードさんのお話を素材にしてはいるが、もちろん、彼の人生そのままではないということである。ディテールは作者が想像を働かして織りなさねばならなかつたことはもとより、筋も、ハーリスが作者の中でみずからかつて歩き出して作った面も多い。従つて、ハミード氏がかつてハンヌというユダヤ少女に仄々とした気持を抱いていたことや、従つて、同氏が人種差別主義者では根つからないことや、サファードが攻撃されたとき幼な友だちが小学校の運動場で死んでいるのを見て、その傍に果然として時間も忘れて立ちつくしていただように、同氏が実際に感受性の強い、ヒューマンな人柄であることなどは、すべて眞実であるが、作中のハーリスの生き方に作者が関与したため、ハミード氏のあざかり知らぬ逸脱や、間違いが多分にあるかも知れないということである。そして、その責任はすべて作者にあるということである。

第一におことわりしておかねばならないことは、パレスチナ問題を理解するために諸先輩の書かれたいろいろな本の御厄介になつたということである。しかし、特に必要あると思われるばあいを除いては、参考文献を擧げる煩を避けた。本から得た数多の知識はハミードさんの話とぼくの想像力を補つ上でたいへん役に立つた。その点に感謝したい。

最後に、多忙な日程をさいて作者を快く迎え入れ、誠実すまへるくつに節度ある話をしてくれたハミードさん、その話を適確に、しかもハミードさんの表現のつくせない所をも巧みに補なつて通訳してくれださつたP.L.O.駐日代表事務所の関場理一氏、そして、作者に先行する熱意をもつて一年五ヶ月の間連載に協力してくれた「公研」の藤島陽一氏に心からお礼を申し上げた。また、その連載を熱心に読んでもうだされ「フィラステイン・びらーでい」誌に一挙掲載を勧めてくれた村上安氏にも厚くお礼を申し上げたい。この物語が多少とも読むに耐え得るとするならば、それはすべて以上の方々の善意のたまものである。(一九八〇年十一月十四日)

日本の読者の皆さんへ

ファトヒ・アブドルハミード

PLO（パレスチナ解放機構）駐日代表

自らを語ることは、自分の過去と通り過ぎてきた時代および社会からの告発を覺悟しなければならないという意味で、常に幾重にも挑戦的な意味をもつています。パレスチナ問題の真実に迫ろうとする誠実で謙虚な希望をもたれた、一人の日本の詩人の熱意にうながされて、私はこの挑戦を試みました。

過ぎ去った情景の中で、背景の彼方に遠のいた歳月は、いつも美しく輝やいて見えるものかもしれないません。しかし、今日の世界の他の諸国民の体験とあまりにも異なるパレスチナ人たちの苦難を、自らの生涯の一部を語ることによって、どのようにしたら日本の皆さんにお伝えできるのかについては、全くおぼつかない感じがつきまとい、内省的になればなるほど、たゞすもどかしさと不安とが交錯していました。

例えば、日本にきてから答えてく質問の一つは、趣味は何とかかれることでした。何らかの自由な時間を「趣味」という言葉で表現されるにふさわしい活動に投入する余裕が持てなかつたのは、私たちパレスチナ人たち一般の悲劇の一側面を反映したものだと断言するつもりはありませんが、私の人間的関心を知るために發せられる一見きわめて安易な問い合わせに、安易に答えられない自分に、何度もとまどいました。

誇張するつもりは全くありませんが、パレスチナたちが一瞬にして投げ出された世界の中で、いかにして自己自身を取りもどしていったかを語ることは苦渋にみちたものであり、幾重にも屈折したものであります。それらの経験を再構成して語ることによっては、その入りくんだ体験の重みや複雑さが、理解していくだけないのではないかという感じをぬぐい切れませんでした。

しかし、詩人のかわさき氏の真しさ態度によつて、私の抱いていた不安は少しずつほぐされ、私は一人の日本人の知識人との対話のつもりで、私の生涯の前半、主に幼年時代から青年前期の時代の体験をそのままの形で語りました。私の人生の体験をありのままに語つたのは、私たちパレスチナたちのたどつ

た苦難の実相を知つていただくためでした。その意味では、私が語つた生涯の歩みも私自身のものである以前に、パレスチナ人のものであるわけです。

自らを語ることに何よりも慎重であるべきとの方針を貫いてきたパレスチナ民族解放運動」（略称で「ファタハとして知られている）の一員として、またPLO駐日代表としての公的な立場にある私が、あえて自らを語つたのは、この体験が私自身のものであるよりは、どのパレスチナ人も体験した共通の体験であり、私自身の詩と真実ではなく、あくまでも、今日もなお苦難にさらされているパレスチナ人民全体の詩と真実であると断言できるからであります。それにも増して、そこで語られる体験のもつ異質性や複雑さを越えて、一人の人間の生き方として、また一つの民族の直面している問題として、人種や宗教の違いを超えた人間的な共感を必ずや持ち合えるものと確信したからにはなりません。

もちろん、私はあくまで素材の提供者にすぎません。「オリーブの樹は燃えた」という詩的な題名のもとに一つの文学作品として完成されたいまでは、主人公のハーリスは、もはや私自身でも、分身でもなく、ありふれた、ごく普通のパレスチナの少年であり青年であります。ドキュメンタリー小説として文学的な結晶にまで高められた作者のこ努力には、唯々、敬服しました。私は、むしろ、この作品のモデルや素材の提供者としてではなく、一人の読者として、この作品を味読したいと希望しています。

パレスチナ問題とは何かを語るには、私たちパレスチナ人民の歩んだ道を語る必要があります。まず、自分の体験を語ることから、その當みは開始されなければならないことを、すぐれたパレスチナ文学の先駆者たちが証明しています。私自身もジャーナリストとしての半生の体験を生かして、自らの体験をパレスチナ巨大な歩みの中に投影して長編小説を書きあげたいという欲求にかられています。新年とともに、その構想をあたため、三部作の一部をなす数章の執筆にとりかかっています。

今回、雑誌の特別号としてまとめるに際し、各章にタイトルを付し、加筆されたりして作品を完成された作者かわさきたかし氏のご努力に深く感謝申しあげます。パレスチナ問題の真実を究明し、人間的な連帶を強く求めようと努力されている日本の多くの皆さんに、この作品が読み広められてゆくことを願わずにはいられません。（一九八一年一月七日）

第一章 故郷の町サファード

ハーリスのふるさとは、パレスチナのサファードという町である。その町は、パレスチナでは最も高い、標高九五五メートルのカナン山のふもとに横たわっている。

ハーリスは、幼い頃、よく父に手を引かれ、山すそに広がる父のオリーブ畠を散歩した。山から涼しい風が吹き、暗緑色に茂るオリーブの木々が、白っぽい葉裏をかえしてざわめくとき、その一本一本がコーランの文句をささやいているようにも聞こえた。ハーリスは、うつとりして、キャラバンのらくだの背のような山嶺の上に、また、丸い実を鈴なりにしたオリーブの葉末に光る大粒の星々を見上げ、父に習ったコーランの一節をそつとつぶやいてみるのだった。

「アッラーは、大空に星座を設けた。それを見上げる人々のために美しく飾り、呪うべきサタンから星々を守つた」

あるとき、ハーリスは、アッラーのその一粒の宝石が青白い尾を引き、山あいに落下するのを見て、あごをわななかせ、父にたずねた。

「父さん、見た？ アッラーの星が落ちるのを。あれはどうしたの。どこに、あの星は落ちるの？」父は、足を止め、星の流れたエルサレムの空の方をじっと見つめて、静かな、憂いのこもつた声で語つてくれた。

「ハーリスよ、この世界には、人間や、けものたちだけでなく、サタンという、悪がしこく、強い種族も住んでいる。そいつは、しつぽをはやしているが、よく人間に似ている。いや、似ているだけではない。ときには、人間に化けていることもあるし、人間の体や、心の隅にひそんでいることもあります。そいつがときおり天界に登つていて、天使たちの会議をぬすみ聞きし、この人間世界にやってきて、天使たちの裏をかこうといろいろな悪事を働く。今、飛んだ流れ星は、天使がそのサタンを見つけて放つた火矢なのだと、昔の人は語っている」

ハーリスは、父の太い腕にすがりつき、大きな目を丸くして、周囲のたそがれを見回した。仄白い

花を散らしたオリーブの木陰に、たつた今、天界を火矢で追われたサタンがかくれていて、薄笑いを浮かべながら一人の方をうかがっているような気がしたからである。

父は、また、ハーリスを家の近くの広場に立つモスクへよくお祈りにつれていた。それは、赤っぽい壁の上に象牙色の円屋根を頂き、ねじり棒のような柱を左右に建てたイスラム教寺院で、その前には水をたたえた洗い場があった。そのタイルばかりの水槽の前で、ハーリスは父のまねをし、猫がやるように手を頭のうしろから回して、顔を洗つたり、左手で鼻に吸いこんだ水をかんだりする作法も、一とおりおぼえた。肌寒い夜明けの礼拝のときなど、おりおり、父が裸になつてしまがみこみ全身をくまなく洗つていることがあった。ハーリスも、ズボンを脱いでまねようとすると、

「おまえは、いい。もつと大人になつてからでいい」

父は、あわてて父が制した。それで、ハーリスは、父のくしゃみを気にしながら、何となくものたりない気持ちで脱ぎかけた服を身につけ、いつものように顔と手だけを洗つて、礼拝堂へ入つた。たいてい、二人は、だれよりも早くここへくるので、父のゆつくりと歌い上げるようなお祈りの文句は、坊主頭のハーリスの耳に、そしてその奥によくしみこんだ。おりからさしのぼる太陽が、メツカを向くミヒラーブという壁のくぼみにさしこんで、そのタイルのモザイク模様を金らんのようにまばゆく照らすとき、ハーリスは、アッラーの片鱗をかいま見るよう恍惚とした。

ハーリスが、父と共に朝となく夕べとなくモスクを訪れる楽しみは、そういう神聖な気持ちを味わうだけではなかった。モスクから家への帰路に、低い軒並みをつらねたバザールがある。血の涙をしたたらせた羊の頭や、臓物を店頭いっぱいにしている肉屋もあれば、色とりどりの布地を魔術の箱から次々に引っ張り出してぶら下げたような衣料品店もある。鳥のくちばしさながらの鋭い口をもつた金色の水差しや、いろいろな人間の顔に見える土瓶などを、あぶなつかしい積木細工のように積み上げている店もある。

父はよくハーリスをつれて、その一隅にあるカフェで一服をした。カフェといつても、店半分が菓子やパンをおいた食料品店で、残り半分のタイルの床に机と椅子が並べてある。そこの店主のユダヤ教徒であるアブラハムと父とは幼なじみで、父が店へ入ると、アブラハムも奥から出てきて、父と同じ卓をかこみ、トルココーヒーをいっしょにすりながら、世間話にふけるのだった。二人は、額に



深いしわを寄せ、浮かない顔で話しあることが多かつた。

「全く困ったものだ。お互いに、仲よくいつしょに住もうということならまだしも、最近は、力づくでもアラブ人を追い出して、建国しようとする奴らの勢力が強くなってきたからな。これでは、戦争は避けられないよ」

「全く困ったものだ。お互いに、仲よくいつしょに住もうということだろう。アブラヒム。わしだつて、世界の各地で迫害されて、ふるさとを求めて、ここへ逃げてくるユダヤ人の気持ちがわからないではない。しかし、こうその数がふえてきて、アラブの農民や、労働者が職を追われるとなると、これはただではすまないよ」

「そんな大人たちの話を、心配そうに聞いているハーリスの頭に、父は大きなのひらをのせ、

「うちの坊主にも菓子をやつてくれんかね、マダム」

とたのむのだった。すると、モスクの円屋根よりも太い腰まわりをしたユダヤ教徒のかみさんは、ぶあつい頬をゆるませて、

「さあさあ、何でも好きなものをお取り。ほんとにかわいい子だねえ。私たちにもこんな子がいたらねえ」

ともみ手をしながら、ハーリスのあとをついて回ったのである。そして、おこしでも、飴玉でも、尻ごみをするハーリスの手に、金貨を一枚落すような手つきで、一個おまけしてよこすのだった。

アブドウラ・ハーリスの家は、バザールを抜け、塗りあげた四角い家が立ち並ぶイスラム地区の埃っぽい道を通り過ぎたはずれにあつた。土堀でかこわれた広い庭があり、その中央に白亜の二階家が立つていて、玄関は石の階段で少しせり上っている。二階の上には丸い塔が伏せてあつて、そこに四角い窓がうがたれているので、幼いハーリスには、自分の家が小さなお城のように見えた。庭の周囲にはあんずとオレンジの木立が涼しげな陰をつくり、その陰のとどくかとどかないあたりに、ばらの花壇がかこわれてある。それが、毎年、色とりどりの花を競つて咲かせたのは、父のいかめしさに蜂蜜をまじえたような気立ての母が、叔母たちといつしょに、裏の井戸から桶でせつせと水を運んできては、注いでいたからである。

夏のある日のことだった。ハーリスは、同じ小学校にあがつたばかりの友だち、ユーセフとアンマ

ールと、「しょに住んでいる従兄弟たちと共にその庭でかくれんぼをしていた。ハーリスは、裏庭の物置小屋にとびこむと、桶の陰で息をひそめた。

「み一つけた」

遠くの方で、鬼になつたアンマールの声と弟のはしゃいだ笑い声がした。……ハーリスは、ますます息を殺して体をぢぢこめた。しばらくすると、今度は、吠えるようなどなり声とアンマールのけたたましい泣き声が聞こえた。ハーリスは、我を忘れて物置からとび出し、泣き声のする表庭の方へ駆けていった。顔を赤黒くしてどなつてているのは、三番目の叔父だ。

「ここは、おまえのような汚ない子のくる所じゃない。さあ、さつさと消え失せろ」

というなり、アンマールの頬を両手ではたき、その黒光りする膝頭をけとばした。アンマールは、足をすぐわれてうつぶせにたおれ、乾いた地面に斑点をつけ泣きつづけた。

ハーリスは、ばらの花壇をとびこえ、叔父の前に立ちはだかって、顔を真赤にして叫んだ。
「叔父さん、アンマールはぼくの親友です。汚ないからといって、なぜこの庭でいつしょに遊んではいけないの。ぼくたちは、アツラーの前では、皆、平等だと、マホメットは教えていたではありませんか」

叔父は、ハーリスの筋の通つた抗議を受けて、ふりあげたにぎりこぶしのやりばに困り、それを開いて、ハーリスの額を押しやつた。

「生意気いうな。アツラーの前で平等だというのは、どのイスラム教徒も皆同じだということじゃない。こいつのおやじは、盗みをしたじゃないか。盗人の子なんかといつしょに遊ぶんじゃない。さあ、さつさと追い出せ」

ハーリスは、たおれているアンマールの前に両手両足を広げて立ち、首を横にふつた。その両目に大粒の涙がふくれあがつた。それが虹色に光つたのは、花壇のばらの花が映つたからである。

「いやです。叔父さん、ぼくはどうしてもアンマールといつしょに遊ぶよ。盗みをしたのはアンマールじゃない。それに、アンマールのお父さんだって、罪をつぐなつたのだから、ぼくたちと同じイスラム教徒ではありませんか」

そのとき、アザーン（お祈りの呼びかけ）のよう、大声が背後にひびきわたつた。

「ハーリスが正しい。その子は、家の庭でいつしょに遊んでよろしい。サブリよ、おまえはそれで

もムフティー（イスラム教長老）だったのか。どんな教え方をしていたのか、わしが恥かしくなるくらいだ」

玄関の階段の上に、両肩を張り、濃い眉毛の下に驚のように光る目差しで叔父をにらんで突立つてるのは、ハーリスの父だった。叔父は、不服そうな顔をうなだれ、足早に自分の棟の方に去つて行った。

ハーリスは、そういう父を心から尊敬した。おまけに、彼は、父の両肩の間に、鳩の卵大のつるりとしたこぶのあることを知つていていた。それは、予言者のしるしで、マホメットにもそれがあったと、ユーセフのおじいさんがいつたことがある。

ある秋の日のことである。ハーリスは、ブーゲンビリアの花の垂れ下がる、ユダヤ地区の石塀につてあるきながら、かたわらの父を見上げていつた。

「父さん、父さんはなぜムフティーにならなかつたの。なつていたら、きっとえらい予言者になつたと思うな」

「なぜかね」

「だつて、ぼく、父さんの背中の両肩の間に鳩の卵みたいなこぶがあるのを知つていてるもん。それは予言者のしるしだつて、ユーセフのおじいさんがいつていたよ」

それを聞くと、日頃めつたにこりともしない父は、片手であごひげをつかみ、大口を開けて笑つた。それからすぐその口を閉じ、いつもの謹厳な顔にかえつて、言つた。

「それは、単なる伝説さ、ハーリス。マホメットがどんな顔をして、どんな体つきをして、どんな体つきをしていたか、だれも知つてはいなさい。それに、この背中のこぶは、こぶじゃなくて、弾の跡だ。父さんは、これを英軍から撃たれたのだ。それは、まだ、おまえが生まれるずっと前の話だ」

父は、そういうと、「そうだ、そのときのことは、おまえにも話しておこう」と前置きして、土塀の陰の切り石の上に腰をおろした。ハーリスも、そのかたわらにしゃがみこみ、生睡を乾いた喉に飲みこんで、父の横顔を見上げた。

父の深い目差しは、マッチ箱を雑然と並べたようなイスラム地区の上に頭を出したモスクと、その背後のカナン山に注がれた。

第一章 赤い金曜日

……それは、パレスチナが英國の委任統治下に入つてから六年目の一九二九年八月十五日のことだつた。エルサレムの「嘆きの壁」の前で、ユダヤ系青年の一団がシオニストの旗をかかげ、彼らの歌「ハティクバ」を歌つた。ユダヤ教徒によれば、その日は、昔、ヘロデ王の神殿がローマ軍に破壊された日である。だから、この日を記念して、ユダヤ国家建設の意志を発揚しようとしたのである。

彼らの中に、すでに九年前から発足した「ハガナ」という防衛組織も加わつていたことは確かだ。

一方、委任統治になつてから、二〇年代には八万人のユダヤ系移民を加え、パレスチナのユダヤ人口は、十五万六千人にふくれあがつてゐた。その間、地主に農地をユダヤ系移民に売られて畠を失なつたアラブ人農民や「ヒスタドルート」（ユダヤ労働総同盟）によつて工場から放逐されたアラブ労働者の数、つまり潜在的流民の数は日増しにふえていつた。

だから八月十五日のユダヤ青年の行動は、「ユダヤ教徒がイスラム教の聖地を奪おうとしている」という噂となつて、憎しみの焰を巻き上げながら、アラブ人たちの間に広がつた。町から、近隣の村々から、棍棒や短剣を手にしたアラブ人たちが集まつてきて、ユダヤ居住地に向かつた。聖地エルサレムの街路は、双方の数百人の流したサタンの赤いペンキによつて塗られた。

それから、三日後の午後のことである。平和だったサファードの町にあるハーリスの家の玄関の戸が、何者かによつて激しく叩かれた。

アブラヒムは、眉をひそめて戸口に立つているハーリスの父を見ると、その腰にすがりつくようないい声が聞こえた。「アブラヒムだ」という叫び声が、女の泣き声にまじつて聞こえた。ハーリスの父が、かんぬきをはずすと、額から血を流したカフェの主人と、そのおかみが、戸の中にころげこんできた。



「いつたいどうしたのだ、アブラヒムさん」

ハーリスの父は、エルサレムの「嘆きの壁」事件を風の噂に耳にしていたので、不吉な予感で眉間にいつそう暗くしてたずねた。

「イヤードさん、わしらの町でもとうとう起きたのだ。一番、わしらの恐れていったことが。今朝、わしと女房がシナゴーグ（ユダヤ教礼拝堂）へ向かう途中、赤い壁のモスクの角を曲ると、出会いがしらに一団のアラブ人たちと会った。てんてこ棟棒をにぎつたり、短剣を光らせていたので、わしはとつさに女房の手をひっぱって、反対方向の路地へ向かって逃げ出した。とたんに……」

ここで、アブラヒムは、ハーリスの母が運んできたコップのオレンジジュースを喉ばとけをぐりぐり動かして、息もつかせぬ飲みこんだ。黄色い汁が彼のあごひげをぬらして、流れた。

「とたんに『ユダヤの犬め』という罵声といつしょに、わしのこの禿げた後頭部に重たいものがゴツンとぶつかって、足がふらふらしたが、あとは無我夢中で、気がついたら、あんたの家の戸をたたいていたのだ。イヤードさん、お願ひだ。わしと女房をかくまってくれ」

アブラヒムは、あえぎながらそう語り終ると、血のついた両手を胸の前でにぎり合わせて、祈るかつこうをした。

それを見ると、ハーリスの父は、かたわらで心配そうに両肩を羽交いに抱いて立っているハーリスの母をかえりみて言つた。

「おまえは、この二人を二階のわしの部屋にあげて、アブラヒムのけがの手当をしてやれ。だれがきても、わしの部屋へはぜつたいに入れるんじゃないぞ。それから、サブリ……」

父親が居間の方をふりかえつてどなつたその声を、日焼けした額でまじかに受け、「あおつ」とサブリが返事して立つていた。

「おまえは、家にいる他の男連中を集めて、わしについてこい。シオニストとパレスチナ人との衝突が、この町でも起きたらしい。早くいって、気のはやつている奴らをとめないと、英軍の思うつぱだ」

そういうおわるとハーリスの父は、長い上衣の裾をひるがえして、石段をかけおりていった。あとを追つて、ココア色の埃を巻きあげながら、叔父たちや作男の一団が、オリーブやぶどう畠の間の乾いた道を地ひびきたて、走つていった。

イスラム街を過ぎ、日頃とくらべ息を殺しているようなスク（市場）に通りかかった頃、物と物のぶつかる音や、人間と人間のあいせめぐ叫び声が、赤い壁のモスクの方から、風のまに大きくなつたり小さくなつたりして聞こえてきた。モスクの向こうには、小学校をはさんでユダヤ街がある。物音は、その方向から聞こえてくる。ハーリスの父は、先刻から、そちらに向かって大きな虹の羽音のようなものがどんどんいくのに気づいていた。英軍と警官隊の自動車の唸りにちがいない。彼の足は、年齢のハーダルを越えて、宙をとんだ。まけじと叔父たちもつづいた。

赤い壁のモスクの広場に出ると、ユダヤ街の方から、アラブ人の群衆が、ちりぢりに逃げてきた。というよりも、ある者はあとずさりしながら拳を突きあげ、ある者は棒や、光る物を手にしてその合間を動き回り、じりじりと一つの塊りになつて、洗い場の周りに凝縮されてきたのである。広場の向こうのモスクの柱と町並みの間に、英軍のオープンカーと警官隊のトラックが、地面に爪音をたてて急停車し、手に手にピストルや、小銃をにぎつた連中がそこからこぼれ落ちて、散開した。

「英軍かれ、シオニストに味方するな」

群衆の中から、だれからともなく硫黄を焦がすような怒声があがり、石のつぶてがぱらぱらと抛物線をえがいて、路上に落ちた。

ハーリスの父は、これを見ると、叔父たちの手をかりて洗い場の石の角によじ登り、例のアザーンのよくな大音声を放つた。

「聞いてくれ、皆の衆。わしはイヤードだ。今、ここで戦うことは、奴らの思つてばだ。シオニストは英軍と組んで、何かといがかりをつけて、わしらを追い出そうとしているのだ。時を待て。象の年を忘れたか。象に乗ったアブラハムの軍勢は、カアバの神殿の前で戦わずして、滅んでいたではないか。一時の怒りにおぼれるな。おまえたちがアッラーを信じていいるかぎり……」

そういうかけたとき広場の向こうで白い火玉が一列に光つて数発の銃声が吠えた。そのとたんハーリスの父は、背中を思いきりなぐられたように感じて、体がゆつくりゆらめき、水しぶきが散り、目の前が赤く染まってゆくのを見た。彼の体はのめるように洗い場に落ち、そのあたりから血の波がひろがつていったのである。叔父たちは、洗い場の中にとびこんで、ハーリスの父の体を運び出した。父の背中には、白いけんこう骨の見える穴があき、そこからとめどなく血が吹き出していた。サブリが、ポケットからハンカチを取り出して、親指でその穴に詰め、そのまま押えつけていた。銃声にお

どろいた群衆は、モスクの中やスクの方へ散つていった。

「プリン・ヒム・ツージ・アーミー・ホスピタル」(奴を英軍病院へ連れていく)

ハーリスの父は、地底に沈んでもくような暗い意識の中で、そういう英軍将校の声を聞いた。彼は

目をつむつたまま、サブリに向かつてつぶやいた。

「いや、わしをユダヤ病院へ連れていけ。ツイラの所へ」

ツイラとは、日頃からハーリスの一家が親しくしているユダヤ系の看護婦のことである。一家のうちのだれかが病気のときはいつも頼つていつたし、またハーリスの家に誕生日などの祝いごとがあつたりすると、家に招いてごちそしたりする間柄だった。叔父たちは腕を組んで、てみこしきつくり、ハーリスの父をその上にのせると、言われたとおりユダヤ病院へ向かつてかけだした。

ハーリスの父の直感は正しかつた。その日の夕方、暴徒の首謀者とみなされた人々に対する逮捕令状が出た。そしてハーリスの父の入院している病院にも警官隊が自動車でやってきた。町の有力者であつた彼の病室の戸も、数人の警官のこぶしで荒々しくノックされた。しかし、幸い、そのとき中で点滴をしていたツイラが、戸の外に出て、大きな、むつちりした肩と太い腕で戸口をふさいだ。

「だめです。今、動かしたら死んでしまいます。ハンス先生も、弾の摘出手術をしたばかりで、絶対安静だといつていきました。嘘だと思つたら、先生の所へいつて聞いてごらんなさい」

象が怒つて後足立ちをしたようなツイラのけんまくに警官たちはたじたじとなつた。彼らは、互いに同士顔を見合わせ、相談をしていたが、その中の腕にへの字の金筋を張つたのが、ひげをひとひねりしてからいつた。

「よし。じゃあ、今日は帰るが、彼を逃すなよ。逮捕状が出ているのだから、動かせるようになつたら、またくるからな」

ツイラがうなずくと、警官たちは板張りの廊下を踏み鳴らして、引きあげていった。そのとたんツイラは、戸柱に額を寄せて、丸い胸をふくらませていた息を吐き出した。

ハーリスの父は、その後十日ほどして、病院から警察へ身柄を引き渡され、およそ一ヶ月間拘留された。ある日、彼は、鉄格子の外の青い空に数発の銃声を聞いた。首謀者と判定された三人のパレスチナ人が広場で銃殺されたのである。それが金曜日だったので、サファードのパレスチナ人たちはこれを「赤い金曜日」と呼んで、毎年のその日には、町中の方々のモスクで、銃殺された三人のため、熱い祈禱が捧げられたのである。

「この背中のこぶは、そのとき洗い場の上で受けた弾の跡だよ。幸い弾が心臓をはずれていたから、命びろいしたがな」

ハーリスの父は、語りおわると、太陽がカナン山の頂きにさしかかつたため、幅のせばまつた石屏の影から突き出た額の汗を掌でぬぐつた。

ハーリスは、父の話を聞きながら、自分の背中のけんこう骨の間がうずくのを感じた。喉が乾いて、生唾を飲みこんでも、ひつひついた喉からは、こわれた横笛のような変な音が出てくるのだった。

「ど、どうして、そんなにユダヤ教徒がふえてきたの。ど、どうして、英軍はユダヤ教徒の味方をするの？」

「父さんが生まれた頃、つまり一九世紀の八〇年頃、パレスチナに住んでいたユダヤ系住民は二万人くらいのもので、五〇万人のイスラム、キリスト教徒にくらべれば、物の数ではなかつた。その頃だよ。ロシアのハリコフから、初めて『ビールー』(ヤコブの家よ、いざ、いこう)というイザヤ書の中の文句の頭文字)と称する五百人くらいの青年たちが、ロシアで起きたユダヤ系住民の大虐殺を逃れて、この地へ入植してきたのは。

逃げてきたといふか、彼らはナロードニキというロシアの革命家たちの考え方の流れをくむ青年たちで、昔、先祖の迫られたパレスチナの荒野に、シャルル・フーリエ流の理想的な共同体を作ろうと夢見ていたようだ。その土地を買うお金は、フランスの銀行家のロスチャイルドというユダヤ人が出したそうだ。父さんを助けてくれたツイラさんの両親は、その頃来たユダヤ系ロシア人だつた。初めはそういうユダヤ系住民も、アブラヒムのように昔からいるユダヤ系住民も、われわれイスラム教徒も、仲よく暮らしていたものだ。

ところが、そのうちにヘルツエルやワイツマンのように、ここにユダヤ古来の民族国家を作ろうとするシオニストの勢力が強くなつてきた。そして彼らは、エジプトや、インドや、イラクの石油やらの権益を守ろうとする英國に働きかけ、英國の、フランスやロシアに対する砦となるユダヤの保護国をここに作るよう、たくみに話しかけたのだ……」

父の話は、太陽がカナン山から赤い壁のモスクのドームの上に移りかけても、なおつづけられた。ハーリスは、父の横顔を首をひねつて仰ぎ、その一つ一つの言葉にうなずいたので、首の付け根が痛くなつたほどだった。

第2章 赤い金曜日

むずかしいことはよくわからなかつたが、自分が生まれた一九三四年頃から、ドイツでヒットラーのひきいるナチスが政権をとり、その迫害を逃れてくるユダヤ系住民の数が、毎年何万という風にふえてきて、今では、パレスチナに住む人の三人に一人はユダヤ系住民だということだった。（注）

しかし「赤い金曜日」以後、サファードの町は避暑地としての静けさをとりもどした。一九三六年四月にヤーフアで起きたアラブ人の暴動も、ゼネストも、ここまでは波及してこず、まして、まだ幼かつたハーリスの白い砂漠のような脳裏にその影を宿すはずはなかつた。だから、少年となつたハーリスの心には、ユダヤ教徒に対するこれといった憎しみの念は、なかつた。小学校では、ユダヤ教徒ともキリスト教徒とも、仲良くサッカーをして遊んだ。むしろコーランを教えながら、実生活ではその教えにそむいて、女のあとばかり追い回すような教師がいることを不愉快に感たし、「アツラーが唯一である」ならば、どうして大昔から人間同士が戦い合い、殺し合わねばならないのか、わからぬい不思議の一つだつた。

そういうことを考え始めた時期のことだつたろう。オリーブの木の実が、葉末に紫色に熟れて甘酸っぱい香を山裾いっぱいに漂わす頃のことである。ポーランドから父母といつしょに逃げてきたユダヤ娘を、ハーリスが知つたのは、

注
一九三九年には、約六万人にすぎなかつたユダヤ人口が一九三九年には、パレスチナ人口一四二万二九五五人のうち、その三〇%にあたる四四五五七人に達していた。その発端となつたのは、「ユダヤ人のためのナショナル・ホーム（a national home for the Jewish people）」をここに作ることを一九一七年に約束した、英国外相バルフォア卿のいわゆるバルフォア宣言であったことは周知の事実である。当時、大国だつた日本もこれを支持した。

第二章 ユダヤ娘のハンヌ

ある日、ハーリスは、母親につれられて、ユダヤ病院のツイラのもとをおとづれた。一日間、激しい下痢がつづき腹痛が止まらなかつたのである。内科の診療室に入ると、医者とどつしりとしたツイラの間を、子鹿のようにびんしように動き回り、立ち働いている娘を見た。横つちよにかぶつた白い看護婦の帽子の脇からはみ出た金髪が、動くたびにそばかすのある頬でゆれるのである。その娘の緑色の瞳が、医者の前にある丸椅子に腰かけたハーリスのパンツの青ざめた横顔に注がれたとき、彼のそのあたりの頬がうつすら赤味をおびた。やがて、かたわらのベッドの上にあおむけになつたハーリスの腹を、医者の冷たい手が強く押して回つた。

「ハーリス、何か悪い物を食べたな。ハンヌ、洗滌をしてやつておくれ」

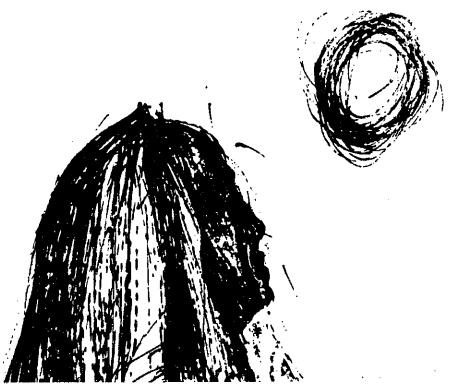
医者にハンヌと呼ばれたその娘は「イエス、ドクター」と答えると、窓脇の白い戸棚からゴムホースと深い金だらいを運んで来てベッドの下におき、ハーリスのパンツをはずして、ズボンを脱がした。それから、彼女の細いしなやかな指がハーリスのパンツの紐のあたりにかけられたとき、彼は「ノー、ノー」と叫んで、パンツを両手で必死にたぐりあげた。

「まあ、どうしたの。男の子でしよう」

ハンヌは、笑いを鼻にふくんだけ声でなだめるように言つて、ハーリスの両手をほどき、両膝をぐの字に起させた。ハーリスは両目をしぼつて、下唇をかんだ。ひやりとした冷たい物がお尻にさしこまれると、生あたたかい液が腹の中を回つて、蛙の鳴くような変な音を立てた。ハーリスの両目のすぐから涙の粒がたれ落ちた。痛かつたからではない。恥しかつたのである。今まで、ツイラからはこんな恥かしさを感じたことはなかつた。この恥かしさは、年と共に薄れていつたとはいえ、その後、長くハーリスの胸底にこそばゆくこびりついていた。

「もう、二度とくるものか」

ハーリスは、上衣のボタンをはめながら心中でつぶやいた。



そのくせ、一週後、彼は母親にことづかつたばらの花束とオリーブの瓶詰をかかえて、病院の門口でうろうろしていた。頬がほてつて、足の爪先が思う方向に進まないのである。

そのとき、病院の玄関のガラス戸が開いて、ハンヌが姿をあらわした。白衣でなく、黄色い花模様をあしらったワンピースを、細いひょうたん形にくびれた体にぴったり着ていた。そばかすのある頬がくぼみ、白い歯が、まばゆく光つた。それが自分に向かられた微笑であるとさとったとき、ハーリスは、もう立つていれないとと思うほど膝頭がふるえた。この前の恥しさも、じくじくとして胸に湧いた。白い足がワンピースの裾から五、六歩のびて、

「まあ、この前のハーリス君ね。どうしたの。もうすっかりよくなつて」と、ハンヌがアラビア語で話しかけてきた。

流浪の民は語学の天才である。近代生物学がいくら否定しても、獲得形質の遺伝を信じないわけにはいかない。パレスチナにいるユダヤ系住民は、土着のユダヤ教徒も、入植してきたユダヤ教徒も、九割までがアラビア語を話せたのである。

ハーリスは、歯が鳴子のように鳴つて、声が出ず、一瞬、風景が青ざめた。

「これ、母から……」

それだけささやくと、ばらの花束とオリーブの瓶詰を片手ずつさしだすのが、やつとだつた。クリーム色と真紅な花片が、ハンヌの鼻先でふるえた。

「まあ、これを私にくださるの」

ハンヌは、産毛みたいな金色の細い眉をつりあげ、大きな緑色の目で贈り物を受けとつた。ほんとうはツイラとハンヌに渡すよう、母にことづかつたのだが、ハーリスにはそれを言うゆとりがなかつた。ただ、こつくりと睡を飲みこんだ。

「ありがとう。何てきれいなばらでしょう。何て大粒なオリーブの実でしょう」

そう言つて、ハンヌは、瓶を日にかざし、赤い唇をした実のひしめく世界をのぞきこむように目を細めた。

「ワルシャワのお家の庭にも、毎年、こんなきれいなばらが咲いたわ。でも、こんな、トルコ玉みたいな大粒のオリーブの実を見たのは初めてよ。私も、母も、大好き」

そういうと、ハンヌは、急にハーリスに向つて顔をひるがえし、鼻にまでかかつた金髪を片手でくしけずりながらたずねた。

「ところで、あなたのお家はどこ。赤壁のモスクの方？ では、途中までいっしょに帰りましょう。私は、今日はもう非番なの。私の名前はハンヌ。よろしくね」

花束と瓶詰の他に白いハンドバッグも抱えていたハンヌは、小首でなでるようにえしゃくした。

「瓶は、途中までぼくがもちます」

ハーリスの喉から、つつかえていた声が、初めて微笑といつしょに出た。そしてオリーブの瓶を受けとつて、半歩さがつて、ハンヌのあとにしたがつた。

病院を出ると、ハンヌは町方をそれ、ぶどう畠のふちを流れる細い小川にそつた小道を踏んだ。山肌をなだらかにせりあがつてゆくぶどう畠は、一面、網におおわれていて、そのここかしこに、青い、まだ小粒のぶどうの房がぶらさがっていた。網を支えているかのよう、無数の掌形をした葉は、尾根のあたりにさしかかった夕日を浴びて、二人が歩くたび、所をかえ、オレンジ色に染まつた。

「平和。ああ、何てすばらしいのでしょうか。そして、人間は、こういう一瞬を味わうために、何て苦しまねばならないのでしょうか」

ハンヌは、花柄の服地をとがらして盛り上がる胸一杯に、青臭さと土の香りのいりまじつた空気を吸い、それを吐き出しながらぶやいた。

「私が、この平和の一滴を味わうために、どんなに苦しんだか、聞いてください？」

ハーリスは、瓶を胸にかかえたまま、やつとやわらいだ顔でうなずいた。

第3章 ユダヤ娘のハンヌ

第四章 ワルシャワを逃れて

「私が住んでいたのは、ワルシャワの北のはずれのゲットーよ。ゲットーって知っている？ ほら、ユダヤ人ばかり集めて、高い石塀でかこつた町のことよ。宗教改革のとき、マルチン・ルツターが封建諸侯に、『ユダヤ人のシナゴーグを焼き払い、家をこわし、ジブシーのように小屋に閉じこめ、みじめな虜囚の民であることを思い知らせたまえ』とすすめ、一六世紀には、ローマ法王も勅命を出して、ローマにゲットーを作ったそよ。つまり、ユダヤ人は大昔キリストを磔にさせたというので、プロテスタントからも、カトリックからも憎まれたわけね。

私の住んでいたワルシャワのゲットーも、初めは、人口十四万人くらいの、わりとおちついた平和な町だったわ。そこへ、ナチスは、ポーランド各地のユダヤ人を狩り集め、四十五万人もつめこんだの」

……その上、ゲットーの塀の周りや、唯一つの出入口は、ナチスの番兵に固められ、食べ物もろくに支給されず、みな飢えとチブスでばたばた死んでいくて、あくる年まで生き残ったのは、一割にも満たぬわずか四万人たらずだった。

ハンヌの弟も、このとき、道端に落ちていたトマトを拾つて食べたため、チブスにかかるて死んだ。ハンヌは、他にもトマトが落ちていたと人づてに耳にしているので、あのトマトは、菌をしこんだ毒餌ではなかつたかと、今でも疑つている。とにかくも残された道は、後の世のメシアを信じて、そのまま餓死か、病死を待つか、それとも命がけの逃亡を企てるか、二つに一つであつた。

ある冬の夜、ハンヌの家に、近所に住むモルデハイという青年がたずねてきた。飢えのため、頬は青白くこそげていたが、褐色の髪が斜めにかぶさる広い額の下の深い眼窩の奥には、ゲヘナの火かと思われるような異様な焰が燃えていた。モルデハイは、すすめられた椅子に腰かけると、ハンヌの父に向かつて静かに語り出した。

「私は、あなた方を前から信じていて、今日は、ある重大な秘密を打ち明け、ご相談したいの

です。ご存知のように、このままでは、我々ユダヤ人は全滅させられるでしょう。私も、死は覚悟しています。しかし、ユダヤ人、いや、人間を故なくして罰する者には、必ず報いがあることを知らしめるのが、主の御意志ではないでしょうか。そして、そういう者のなくなる日まで、その御意志を実行しつづけることが、ユダヤ人、いや、我々人間の務めではないでしょうか。私は、そう信じていますので、同志たちとひそかにゲットーを抜け出しても、武器を集め、秘密の抵抗組織をつくっています。あなたも、それに加わってはいただけませんか？」

ハンヌの父は、はげあがつた額に垂れている、一つかみのしつぽのような髪をむしるように片手でつかみ、苦しげにうなだれた。……それを見て、モルデハイは語調をゆるめて、自分に言い聞かせるように言った。

「とはいっても、あなたには、奥さんと娘さんがいます。だから、ここを脱出したいというのなら、ゲットーの外にある秘密救援機関と連絡をとつて、ここからの脱出に協力してあげます。どちらを選ぶのも、あなたの方の自由意志です」

ハンヌは、モルデハイと父の顔を交互にいらだたしげに眺めていた。もちろん彼女は、彼らといつしょに武器をとることを望んでいたのである。ハンヌの母は、夫の隣に腰かけ、毛糸の肩かけの中に幾重ものとがつた顎を埋め、火の氣のない寒さを、いや、神のない外界をすべて拒むように、固く肩をすばめっていた……。冬が凝固して、時間が止まつていていた。と、その時間を溶かすような目差しで、モルデハイは、ハンヌをかえりみていった。

「ハンヌ、君はまだ若い。お父さんとお母さんをつれて逃げなさい。そして、平和な土地で、たくさんのユダヤ人を生んでおくれ。そしてその中に男の子がいたら、その一人に、できたらぼくの名前をつけてくれたまえ」

そういわれたとき、ハンヌの長い金色のまつげの先に、大粒の涙がたまり、まばたくたび、それが机の上の燭台の焰にきらめいて、こぼれ落ちていった。

……いつか、シナゴーグで礼拝の帰り道、ぐうぜん肩を並べて帰つたことがある。そのとき、重苦しい空から、綿のように軽やかなぼたん雪が舞つてきた。すると、いきなり、モルデハイはハンヌの腕の付け根をとつて、くるりと回して胸を合わせ、ハンヌのまつげにはりついた雪をなめてつぶやいた。「甘い雪だ」と。ハンヌは、そのとき感じた瞼の暖かみを思い出したのである。



それから三日後の夜、ハンヌ一家は、モルデハイに言われたとおり、石堀の南東の角の内側に、シンオンの星印が二重に書いてある田じるしの前に立つた。星の下の堀の裾には、一端が鉤になつていて、金ばしごが寝かせてあつた。

ハンヌの父は、金側の懷中時計を月明りにすかして、目をこすりつけるようにして見つめていた。秒針がひくりと動いて、十時をさした。その瞬間である。堀の向うで、合図の犬の鳴き声が、宙に尾を引いて二度聞こえたのは、ハンヌの父はいそいで金ばしごを起こして堀に立て、自分が真先に大きな袋をかついでそれをよじ登つた。堀の上から姿が消えて、地ひびきがした。次に、ハンヌがまんまるに着ぶくれた重たい母親の尻を一段一段押し上げて、堀をまたがした。その下では、父が両手を広げて待つていた。二人の姿が重なつて、路上にころがつた、そのまま脇に、ハンヌもとびおりた。

三人が、向かいの家並みでもう一声鳴いた人影の方に向かつて、石畠の道路を横ぎつた、そのときである。石堀の角から、長靴の足音がひびいて「ハルト」とまれ)というドイツ語の呼びが聞こえたのは。

「おまえたちは、この人のあとにつづけ」

ハンヌの父は、二人を突きとばすように犬の鳴き声の主の方に押しやると、自分は路上におどり出て、石堀ぞいに兵士らと反対方向に向かつて走り出した。

「しつ、静かに」 犬の鳴き声の主は、ハンヌと母親の腕をひっぱって、二人を家の間の狭い路地にひっぱりこんだ。その前の石畠の路を、数人の兵士が長靴と銃剣を鳴らして、駆け抜けていった。鳴き声の主は、二人の袖を引いて、一步一步路地裏へしのびこんでいった。彼方で、数発の銃声が重なつて聞こえた。そして、男のしぼり出すようなうめきが。

ハンヌの母親が、嗚咽を両手で押えつけながら、その合間に狂つたような早口で、口走つた。

「彼は……我らの悩みを……悲しみを……になえり……我らの罪のため傷つけられ……御身の傷により、我らに安らぎをあたう。……われらみな羊のごとく、迷いて、おのがじしの道をゆけり」

ハンヌは、小川ぞいの道からオリーブ畑に入つて、そのなだかな斜面をくだりながら語りつづけた。背後の夕日が燃え上がり、向かいのぶどう畑が波立つ湖面のように輝いた。

「それが、私と父の会つた最後。それからモルデハイとも会つた最後なの。明くる年、ナチの二千

人の親衛隊がゲットーを絶滅させるために突入してきたけれど、予想もしてなかつたモルデハイたちのレジスタンスに出会い、三日間の作戦予定が三十三日間もかかつたという話だわ。ナチは、一軒一軒火を放ちながら進んでいったけど、皆、火の海の中で地下室や、下水道にもぐつて、最後の一発まで抵抗しつづけたんですつて」

そこまで語ると、ハンヌは、あわててハンドバッグの中からハンカチをとりだし、両目を押え、それから鼻を音高くひびかせて左右にかんだ。

オリーブの黒い樹林の合間に、白壁を余映に染めたハーリスの家が見えてきた。

「あれが、ぼくの家です。よかつたら、母の所に寄つていらっしゃいませんか」

ハーリスが、小さなお城のようだとかねてから誇らしく思つてゐる家を指さしていくと、ハンヌは赤くなつた目をなおも拭いながら、

「まあ、感じのいいお家だこと。でも、今日はえんりよするわ。お母さんによろしくね。今日は、どうもありがとう。あなたみたいな素直な人にいろいろお話してきて、心が軽くなつた気がするわ。またお会いして、いろいろお話ししましようね」

そういうと、ハーリスが差し出したオリーブの瓶詰を受けとり、「じゃあ、さようなら」ときびすを返した。そして斜面を登つて、オリーブの木立がしだいに重なりあつたあたりでふりかえり、まだ立ちつくしているハーリスに向かつて、ばらの花束を振つてみせた。

第五章 ハツサンの国盗られ物語

ハーリスは、ほんやりとして、家の門をくぐつた。ハンヌが故郷を追われた話を思い出すと、自分がどのように胸が痛んだ。しかし、その痛みには、彼女が残したばらの香りのような甘美さも入りまじっていたと同時に、ユダヤ教徒は先祖がキリストを磔にしたからといって、どうして子孫までが迫害を受けねばならないのか。特に、ハンヌやツイラのようないい人までが。他にもっと特別な理由があるのだろうか。……そういう疑問も奇妙にこんがらかって、ほんやりしていたのだ。すると、庭の中にたむろしていたどす黒い人群の中から、

「見いたぞ。見たぞ。いいとこ見たぞ」

という野卑な声がして、ふぞろいな笑い声が湧き起こつた。

ハーリスは立止まり、いぶかしげな面持で、笑い声の方を振りかえって見た。彼の家の農夫たちではなかつた。ペイルートにいるフセインという不在地主のぶどう畑で働いていた作男たちだつた。

フセインが、自分の土地と農民の共有地をユダヤ機関（ユダヤ国民基金）とパレスチナ創設資金に売り払つたがために、そこで働いていたアラブ農民が全員、土地を追われ、流民と化したのである。ハーリスの父は、そういう農夫たちを収容しきれるかぎり、自分の家に逗留させた。だから、最近、ハーリスの家の台所や、納屋や、空いている部屋には、難民のもつ特有な自棄的な影や臭いが、漂い、とぐろを巻き、うごめいていた。

「ところで、若旦那、あの金髪のべっぴんさんは、ひょっとすると、ユダヤの魔法使いじゃあ、ねえだかね」

毒のある笑いをふくんだ男の声が、ハーリスの胸に突き刺さつた。見ると、日焼けして、しわだらけの顔に、薄汚れたほうたいを斜めに巻いた、隣村のハツサンだつた。

ハーリスは両頬をほてらして、ハツサンにいつた。

「魔法使いなんかじゃないよ。あのひとはボーランドから逃げてきて、今、病院で見習い看護婦を

やつている人だ」

ハーリスの声には、怒りの語氣とうらはらに、踏まれた果実のような痛みがあつた。今ここにたむろしている人々も、逆にユダヤ人に追いたてられて来た人々だつたからである。

ハツサンは、ハーリスの気持ちはおかまいなしに、地べたにかいたあぐらの前に口をひねつて唾をとばし、大声でわめきつづけた。

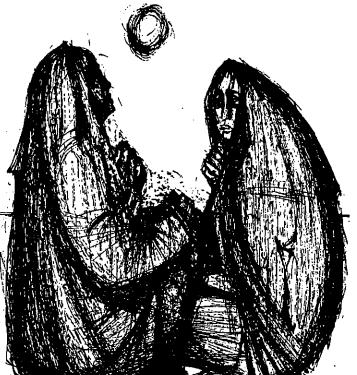
「どんでもねえ、若旦那。魔法使いじゃないユダヤ人なんているもんかね。あいつらは、悪知恵と金の魔力で、欲しいものは、何でも手に入れる奴らだ。このわしらを見てくんなさい。フセインの旦那、いや旦那なんか、あの裏切り者め、今度会つたら、これだ」

ハツサンは掌を手刀にして、垢で縞模様のついた自分の喉をかき切るまねをした。周りから賛同する笑い声が湧いて、たそがれを底からゆすぶつた。

「あの野郎、金の目つぶしをくらつて、わしらが働いていた土地を、みんな売つぱらつちまつただ。ある日、とつぜんユダヤ機関の奴らがやつてきて、ひと月以内にみんな立ちのけというだ。で、わしは言つてやつただ。わしらがこの土地からほっぽり出されたら、どうやつて食つてゆくだ。第一、この土地全部がフセインのものじゃあねえだぞ。わしらが昔から使つていた共有地というものがある。わしらは、じいさんのじいさんの、またそのずっとじいさんの代から、それを皆で使つていただとな。そしたらユダヤの畜生奴、こう言つて、けつかる。『つべこべほざくな。我々は、この村を共有地もろともフセインから買いとつたんだ。文句あるなら、フセインにいえ。ともかく一ヶ月以内に、家財道具をまとめて、さっさと立ちのけ。その方が身のためだ』こういつて、口を耳元まで裂いて、にたりと笑いやがつた」

……そこで、他のファラヒーンたち、すなわち小作農たちは、汗と涙を頬で茶色くときませながら感が爆発したものだつた。このとき結成された「アラブ最高委員会」によりゼネストが指令され、商店は戸をとざし、交通は止まり、大半が土地を追われた農民からなるゲリラは、電信線を切断したり、

それは着々と進むユダヤ人の国づくりと、再三にわたつて豹変する英國委任統治政府に対する不信感が爆発したものだつた。このとき結成された「アラブ最高委員会」によりゼネストが指令され、商店は戸をとざし、交通は止まり、大半が土地を追われた農民からなるゲリラは、電信線を切断したり、



ハイファへ通ずる油送管を爆破したりした。

もちろんユダヤ側も、この期をうかがっていた。英軍によつて武装され、みずからも密輸武器を準備していたイルグン・ツバイ・レウミやシユテルンなどの非合法軍事組織は、爆弾や銃火器を使つてアラブ人たちに報復した。

この「目には目を、歯には歯を」の血なま臭い紛争を解決しようとして、英國はうよ曲折の末、次のようなパレスチナ白書を発表した。

一、十年以内に独立したパレスチナ国家をつくる。

一、そこではアラブ人とユダヤ人のそれぞれの利益が確保されるよう双方が政治に参加する。

一、パレスチナのユダヤ人口を三分の一に止めるため、ユダヤ移民は一九三九年四月から五年間に七万五千人とし、それ以後はアラブ側の承認を要する。

一、ユダヤ人の土地購入は、地域により停止または制限される。

しかし、この提案は双方によつて拒否された。アラブ側は、英國がかつて提出した三〇年白書を完全に裏切つたマクドナルド書簡(注)を「ブラック・レター」として、生々しく記憶していくからであり、過半数のユダヤ国家を目標としていたユダヤ側は、これを承認しなかつた。現実のユダヤ移民の国づくりは白書を越えて完成しつつあつたからである。

のちにイスラエルの初代首相となつたベンギリオンは、国防軍の中核である「ハガナ」の幹部を室に集め、三角形の眉を激しく上下させながら、演説した。

「諸君、これまでわれわれは、法の精神にのつとつて行動してきた。しかし今後は、われわれの行動は、場合によつては法に反するだらう。いや、法の無力化を目的としていくだらう」

そういうおわると、ベンギリオンは、卓上のガラス鉢に盛られていたオレンジを一つつかんで、太い指でにぎりしめた。汁と肉が指の合間からはみ出て、卓上を濡らした。

ところが、そういう歴史の舞台裏を全く知らないハッサンは、大地は、アツラーが自分のために作つてくれたさつふじどであると固く信じ「信仰厚く、行い善き者は、小川の流れる庭をあたえられん」というコーランの一節を、毎朝、妻と五人の子供らといつしょに、あいかわらず大声で斎唱していた。ほんとうに彼の小屋は、かつて村人が共有地として羊を放牧していた草地のへりにあり、庭の一角を山際を伝つて流れる清流がよぎつていたのである。

ユダヤ機関から立ちのけと通告されてから、ひと月ほどたつたある朝のことだつた。ハッサンとその妻と五人の子供たちは、メツカの方向にむかつて、庭に大小さまざまの膝をつき、色とりどりの声色でお祈りを唱えていた。草地をへだてた雑木林には、ちょうど日がのぼり始め、小川を粉々の鏡に碎き、その光のかけらが七人の顔でまばゆく踊つていた。

「コーランを読むときは、呪うべきサタンから守つてくださいと、アツラーにお願いせよ。そうすれば……」

そう、ハッサンがだみ声で音頭をとつたとき、三才の末娘が、山肌の白っぽい道を指さして、

「パパ、アツラーが自動車でくるよ」

と、快活に叫んだ。見ると、土ほこりを巻き上げて近づいてくるのは、草色の小型トラックだつた。英軍二人と数人のユダヤ移民らしい男たちが乗つっていた。

「みんな、家に入つて、戸にしんぱりをかける」

ハッサンは、両手で追いやるように妻子を家に入れると、自分は引き返し、太い両腕をねじり合わせて組み、両股をひろげて庭の真中に突つ立つた。朝日が、彼のしわ深い顔に仁王様の形相を刻んだ。小型トラックは、小川をへだてた草地に止まり、小銃を肩にぶらさげ、お皿のような平らな鉄かぶとをかぶつた一人の英軍兵士と、カーキ色のそろつた開襟シャツを着た五、六人のユダヤ移民が次々に小川をとび越えて來た。そのとたん、ハッサンははた目にそれと見えるほど、胴ぶるいをした。

「われわれは委任統治政府として法的な義務を履行するために來た。フセインとケレン・ハエソド(パレスチナ創設ユダヤ機関)と取り交した正規の売買契約により、ハッサン一家は、即刻、立ちのかねばならない」

筆の穂を二つに割つたような口ひげを生やした英軍兵士の一人が、土地收用令状を右手で突き出し、薄い唇で早口にそいつた。英語のわからないハッサンがだまつていると、この前来た見おぼえのあるハエソドのユダヤ役人が、アラビア語に通訳した。ハッサンは、「うんにや、どくことはならぬえ。この土地は、アツラーのくださつたものだ。見てくれ。この広広とした草地を。これは、ここに住み、ここで働くおらたちの共有地だと昔から伝えられてきただ」と顔中の起伏をひきつらせ、血走つた眼を見開いてどなつた。すると鼻先が上唇にくつつき、その後垂れ下がつた先刻のユダヤ役人は、

「何をいうか。創世紀には、こう書いてある。……この日に、エホバ、アブラハムと契約をなして

いたまいるは、我、この地をエジプトの河より、かの大河、すなわちユーフラテス河までを汝の子孫にあたう、とな。このフセインの土地売買契約書は、ほんのその約束の一部にすぎないので」

そういうて、胸を張り、両手をひろげてたちはだかつた。するとユダヤ役人は、鼻先で草笛を鳴らすような変な音を出して、せせら笑い、

「エホバは、おらたちには関係ねえだ。おらたちの神様は、アッラー様だ。アッラーが、この土地をわしらにくださつたもので、フセインのものでも、おまえらユダヤ移民のものでもねえ」

そういうて、胸を張り、両手をひろげてたちはだかつた。するとユダヤ役人は、鼻先で草笛を鳴らすような変な音を出して、せせら笑い、

「ほんとうの神様はエホバか、それともアッラーかは、歴史が、いや、力がきめることだ。それ、始めろ」

そう言つて、背後にひかえていた四人のユダヤ移民をふりかえり片手でかかれの合図をした。そのとたんに、頬と腕の筋肉のひきしまつた、見るからに屈強のユダヤ青年たちが、手に手にハンマーや斧をにぎり、それをハツサンの家の土色の壁に向つて、はつしと打ちおろした。たちまち壁に人の出入りできそうな穴があいて、そこからハツサンの妻子の泣き声が吹き出し、末娘や男の子らの姿の一部があらわれた。

はじめは、ぼうぜんと立ちつくしていたハツサンは、それを見ると髪をさかだてて納屋にとびこみ、草刈りの大鎌を持ち出してきてユダヤ役人に向かつてふりあげた。とたん、ハツサンは頭部を銃の台尻のようなものでなぐられて、氣を失なつた……。

目を開けると、子供の頃父親に連れられていつたハイファで見た地中海のように青い空がひろがっていた。そして、その底には、刺の一杯ある貝殻のような太陽が輝いていた。ふたたび瞼を閉じると、明るい朱の世界の中で、激痛が白い大蛇のようになつた。思わずうなり声をあげ、顔をしかめた。どこに、何で、今、自分がこうしているのかわからなかつた。

「パパ、だいじょうぶ。だいじょうぶね」

子供たちの涙声と、ひやりとした感触で、朱の世界が青くなつた。そして輪になつてのぞきこんでいる妻と子供たちの顔が彼を取り巻いていた。額にのせられた布切れから、水滴が鼻筋を伝い、口元

に落ちた。ハツサンは、がくぜんとして半身をね起こした。妻と子供の肩の間から、まだ土煙の舞い上がるつて瓦礫の山と、半分削られて空洞となつた家の残骸がかいま見えた。

「……最初のラッパが鳴りわたると、アッラーのみ心にかなうもの以外は、すべて氣を失う」

ハツサンの脳裡を、コーランの「最後の審判」の一節がよぎつた。

「いや、おらあ、アッラーの教えにそむくようなことは、何もしちゃいねえ。最後の審判は、これ

からやつてくるにちがいねえ」

そういうて、その日ハツサンは、目の周りに真黒なくまを作つて、家の中の家財道具を運び出して荷車に積み、家族を引きつれ、ふるさとを流離したのである。その頃はもう傾きかけた夕日が、細くうねる小川の中をさりげない目差しで、山ぎわまで送つて来た……。

第二次大戦の終結と共に、老いたる獅子、英國は、パレスチナの委任統治を放棄し、問題の解決は、米国が主導権をにぎつている国連委員会へ移管された。

その頃、一九四五年頃のユダヤ教徒はパレスチナ全耕地約八百万坪の五・六%を所有しているにすぎなかつた。残りのパレスチナ人は、四八%を所有し、残りの四六%が、牧草地をふくむ公共用地だつた。しかるに一九四七年十一月の国連分割案は、この公有地を分割して、人口の三分の一、土地の約六%しか占めていなかつたユダヤ教徒に全土の三分の二しかも肥沃なベルト地帯をあたえ、残りの山地や砂漠などをその他のパレスチナ人に分与したのである。この分割案の採択がエルサレムに伝えられた夜、街頭で手をつなぎ、輪をつくつて、ユダヤダンスに歡喜するユダヤ民衆を見て、ベングリオンは「馬鹿な奴らだ。戦争を踊つて迎えられるとしても思つてはいるのか」とつぶやいたといふ。ハツサンが、

「どうだい、若旦那、それでもユダヤ人は魔法使いじゃないというだかね」

と、地べたにあぐらをかいて、ハーリスに毒づいたのは、それより少し前の英國委任統治時代の最後の頃だったのである。

ハーリスは、突立つたまま、丸い目を悲しい湖のようにうるませて、うなずいた。うなずいたのは、ハツサンの言い分に同意したわけではない。口でも頭でも言いあらわせない、人それぞれの背負つてゐる運命の重たさにひとりでにうなだれたのである。

第5章 ハツサンの国盗られ物語

る。母方の叔父で、ハーリスの大好きな背の高いアミタイ叔父さんが、布にくるんだ細長い物を小脇にかかえて突立っていた。焦茶のひげを左右にはねた口元は笑っていたが、目つきは金色の鷺の目のようになっていた。

「あつ、アミタイ叔父さん」ハーリスが喜びの声をあげると、叔父は空いている方の片手でハーリスの肩を抱き、居間の方に向かつて、いつしょに歩みをうつしながらいった。

「ハーリス、あんまりふさぐなよ。うしろでだいたい聞いていたけれど、ハッサンの怒るのは、むりもないさ。ユダヤ人だって、われわれだって同じ人間だ。しかしながら、いつ、どうして、同じ人間としていつしょに生きていいか、こいつはむずかしい問題だ。……それにしてもハーリス。あのハンヌというユダヤ娘はべっぴんだな。隅におけないぞ」

といつて、アミタイ叔父さんは、ハーリスの額を、小石のようなたこのある掌で、ぐいと押したのである。

注 マクドナルド書簡 一九二九年の「嘆きの壁事件」を重くみた英國は調査団を送り「三〇年白書」を発表した。これは従来のシオニズム支持の路線を改め、土地購入活動、移民を制限するといつものである。

アラブはこの白書を歓迎したが、これを英政府の裏切りと考えたワイツマン（シオニズムの指導者）初代イスラエル大統領はマクドナルド英首相に激しく抗議し、これを全て撤回する回答を得た。これがマクドナルド書簡である。この逆転でアラブは激怒し英政府への不信は高まつた。

第六章 神々の争い

マホメットは、ユダヤ教典から深く学んでコーランを作った。それは、コーランの中にアダムの失乐园の話も出てくることからも明らかだし、回教徒の断食も金曜日の集団礼拝も、もとはといえばユダヤ教から出たものである。だからマホメットは、キリスト教徒とユダヤ教徒と共に「教典の民」と呼び、人頭税さえ払えば、生命と財産と信仰の自由を保証するという、比較的寛容な政策をとった。

アミタイ叔父さんも、ユダヤ教徒の子らと額をこづき合わして育つた。有名なアラブの女性コマンド、ライラ・ハレドも、ハイファで過した自分の幼年時代を次のように回想している。

「私の家族は、近所のユダヤ教徒たちと仲良くやっていました。私たちは、スタントン通りに住んでいましたが、それはハイファの『五番街』ともいいうべきユダヤ地区のハダルから、さほど遠くありませんでした。私はユダヤ教徒の子供たちも知っていました。一番仲のよかつたタマラもユダヤ教徒でしたが、私たちの間には、なんのわけへどもありませんでした。私にはアラブとユダヤの区別さえわがりませんでした」（注1）

だからアミタイ叔父さんが、ハーリスの額を押して、ハンヌのことを冷やかしたのも、ごく自然な行為だったのである。

一方、ハーリスは、胸の中の果実がしだいに熟してくるのを感じるようになつた。たとえば、オリーブ畑の小高い所に腰かけて、向かいのカナン山をぼんやりとながめている。すると果実は、ひとりでにささやき出すのである。

カナンよ、おまえはなぜ黙っている
ぼくの孤独のように青ざめ
ぼくの秘密のように目ざめ
おまえは見守っている



筋を知らぬ役者たちを哀れむように
袖に一つ落ちたオリーブの運命を悲しむように

そうハーリスが心中でつぶやき、その最後の一節を口にもらしたとき、びんをかすつて、膝元にオリーブの実が一つころがつた。びっくりしてふりかえると、五、六間はなれた木の枝に片手でつかまり、ハンヌが立っていた。

「ごめんなさい、ハーリス。でも、何だか一人で、さびしそうにすわっているのですもの」ハンヌが、白い歯並みを光らせて、いたずらっぽく笑いながら降りて来た。

「やあ、ハンヌ、今日は」

ハーリスは、夢を見るような思いで頬を染めてはね起き、両手で尻をはらい、その手で目をこすつた。

「いつたい、哲学者みたいに何を考えていたの」

ハンヌの間に、ハーリスはどうまぎして、少しどもりながら、

「いや、べ、べつだん。た、ただその、人間はひ、ひとりだということを考えていたのです」

と答え、柔らかい土の上に、ハンヌと一步間をおいて、ふたたび腰をおろした。ハンヌは、草色のスカートからはみ出た白い膝小僧をしばるように両手でかかえ、紫がかった山の岩肌や、山裾の青いぶどう畑や、そのあちこちに点在する土色の煉瓦づくりの墳墓のような集落を視野の中に収めながら、つぶやいた。

「そうね、人間は皆ひとりよ。そして、そのひとりひとりをまとめるために、神様がきつといらつしゃるのね。でも、困ったことは、神々も、ひとりひとりだということ。いえ、人間たちよりも、もつとひとりひとりだということだわ。今までの戦争がすべて神の名においておこなわれて來たことでも、明らかだわ」

「なぜでしょうか。なぜ、人間同士、血を流して争わねばならないのでしょうか」

ハーリスは、この頃、胸の中の果実を包む固い殻のようにかぶさつて疑問を口に出して、ハンヌの横顔をのぞいた。

ハンヌは金色のまつげをまたたかせ、顔中を波だたせて、いった。

「さあ、なぜかしら。私ね、この頃、少し疑問に思つてゐる。確かに異民族同士の戦いは、異なる神の名において戦われているけれど、実際は、力のある人間が、神様を口実にしているのではないからしら。たとえばハーリス、私とあなたはなぜ戦わねばならないの。私はこの前あなたにお話ししたり、ユダヤ人なるがゆえに、ポーランドから命からがら逃げて來た亡命者でしよう。それがなぜ、またパレスチナ人を追い出さねばならないの。初めの頃、ここに入植してきたユダヤ人は、あなた方同様、私たちにとつても聖地であるこのエルサレムに自分たちのふるさとをもちたいという、さきやかな、でもひたすらな願いをもつてゐたことは確かだわ。そして、私たちユダヤ人も、あなた方パレスチナ人もお互いにちつとも憎んでなどはいなかつたわね。それが、いろいろな国のいろいろな力のある人たちの思惑のからみ合いで、権力意志とでもいう、新しい神の代理人が生まれて、それが民衆を引きずつてゆくような気がするの。ちょっとむづかしいかしら」

ハンヌは、ここで言葉を切つて、ハーリスの真剣に見開かれた瞳をのぞいた。ハーリスは、睡をのみこむようになっていた。

「ええ、ちよつと。でも、人間が神でない力に引きずられて争つてゐるということは、わかるような気がします。そして、その争いにまきこまれまいとする人間は、孤独であり、自分の意志によらずに死なねばならないこともあるということを」

「ハーリス、あなたは頭がいいのね。つまり、あなたも、私も、孤独なのだわ。私、この頃いやな予感がするの。二つの孤独が反対の方向に流されていきそうな」

ハンヌの歌うようなわびしげな口調を耳にしたとき、ハーリスの瞳の中で、風景が急に丸くふくれた。ハンヌといつか、いやきつと近い将来会えなくなる、と考えただけで、悲しみが喉元にこみあげてきたのである。それをかくそうとして、膝元の黄色い野花をむしると、その皿のような平たい花に、ハーリスの目から球形の風景が落ちて宿つた。

「きれいな花。それを私にくださる？ 二つの孤独が出会つた形見に」

ハンヌはそうささやくと、その青い茎をハーリスの手からそつと一本指で受けて、自分のけし色のかーディガンの胸のふくらみに差した。

ちょうどその頃のことだつたろう。ベングリオンが、いつさいの国際信託委任統治をも蹴つて、全面的独立国家を成立させようと決意し、一九四七年八月、テルアビブで開かれたマパイ党委員会（注2）で、次のように演説したのは。

「イシューヴ（パレスチナのユダヤ人居居住地）が今後も存続すると確信できるか。私は、その経済的存在をいっているのではなく、その存在そのものを問うているのだ。……われわれ自身が生きのびるためだけではない。ユダヤ民族全体、救済と解放の事業、世界のユダヤのすべての生き残りの希望と未来がかかっているのである。みずからに問い合わせねばならない。脅威に耐えることができるかと。……われわれは少数である。しかし、道徳面、知性でかなりの長所をもつており、これは、破局が迫った時に第一に重要なものとなる。……この重大な時にあたつて、われわれの第一の関心は、防衛問題でなければならない。いつさいが、それに左右されるからだ。これこそ、シオニズムの原則そのものであると私は考える」（注3）

ベングリオンがこのとき描いていた防衛すべき国家とは何か。翌年、全国行政部が独立宣言を検討したとき、国家は、国連決議に規定された国境の内部に宣言すべきであると主張する一派に対しても、彼は言い放つた。

「アメリカの独立宣言は、地域的な境界線には言及していない。われわれも国境問題に触れるよう義務づけられてはいない。独立を宣言する国家は、その国境を規定する必要はない。国境がどのようなものか知らないのだから何も言うべきではない。われわれは国連決議を受諾した。しかし、アラブはしなかつた。彼らは戦いを挑む準備をしている。もしわわれが彼らを破り、西部ガリラヤを、エルサレム街道の両側の地域を奪取したら、この地域は、國家の一部となるだろう」（注4）

こうして「国境を規定しない国家」というベングリオンの主張は、この行政部で、五対四という一票差で可決された。ユダヤ機関と全国委員会は、すでに一九四七年未までに十七才から二十二才までの青年を召集していた。徴兵事務所が全土に開かれ、最初に十七才から十九才までの若者が徴兵された。海外に住む十七才から二十五才の青年に対しても、現住国でシオニストの事務所に登録し、いつでも帰国できるよう準備しておくことを呼びかけた。

このとき、ベングリオンの自伝によれば、シオニスト執行部から軍備購入費としてあたえられた三百万ドルで、いわゆる建国前にもちこめた武器は、航空機二〇機、キャタピラ車五一台、大砲一

六門、各種機関銃九三六丁、ライフル六一四〇丁、ピストル五〇〇丁と、それからハガナが地下潜行中に入手したものや、現地で秘密生産していたものだった。

一方、一九四七年、国連総会が「一一・二九決議」を採択した頃、アラブ高等委員会は、三日間のストライキを呼びかけた。パレスチナは、宣戦布告なき戦乱の巷と化した。先ほど引用したライラ・ハレドが住んでいたハイファは、一九四八年二月二十一日にハガナに攻撃された。当時四才だったライラは、階段の陰にかくれ、路上で爆発した爆弾のため、アラブ人がユダヤ人かわからない男の腹が裂けて、血がほとばしり出るのを見て、体の震えがとまらなかつたのを覚えている、と追憶している。それでも彼女は、自分の育つた家を捨てるのがいやだつた。お母さんが小さな車に、子供たちとわずかな身の回り品を積みこんでいるうちに、一人でかくれてしまつた。お姉さんたちに、なつめやしおの箱の陰にかくれている所を見つかつて「いつしょにこないとユダヤ人に殺されちゃうよ」と狂気のようにどなられながら、髪の毛をひっぱって、じゃが芋袋のようにひきずり出されたのを覚えている。それで一家は、一人だけ残るお父さんと涙まじりのしおっぱいお別れのキスをして、出発したのである。ライラは語っている。

「アラブ民族運動は、もはや力つきていました。それはいまや幽霊のようで、組織は混乱し、單なる感情的な暴徒と化していました。あちこちで暴動が発生しました。アラブがユダヤを殺し、ユダヤはアラブを殺しました。しかしユダヤ側のばいは団結し、統制がとれていました。彼らは組織的に動員され、目的意識もはつきりしていました」（注5）

注1 ライラ・ハレド著「我が愛はパレスチナへ」昭和五十一年・番町書房刊

注2 イスラエル労働党。一九三〇年結成。

注3 ベングリオン回想録「ユダヤ人はなぜ国を創つたか」昭和四十八年・サイマル出版会刊

注4 上掲書

注5 ライラ・ハレド著上掲書

第七章 ディール・ヤーサン村の虐殺

一九四八年三月末、ベンギリオンはハガナ最高司令部に対し、アラブによつて封鎖されていたエルサレム街道の奪回を命令した。エルサレムこそは、シオニズムの精神的支柱であり、ベンギリオンの言葉によれば、そこにいる「十万人のユダヤ人は、飢えと銃弾による一掃」の危険性にさらされているからである。

しかし最高司令部は、情勢全般を検討した結果、この作戦にだけハガナの軍事力をさくことはできないと反論した。ベンギリオンは、三月三十日夜、全司令官をテルアビブに招集し、エルサレム奪回の精神的政治的意義を、鉄槌のような拳で机を叩きながら説明した。司令官たちは、この奪取のためのナッシュン作戦に各部隊の半分ずつをさいて、参加させることに同意した。

同夜、武器を満載したチェコスロヴァキア船が、第二次大戦中に殺された六百万ユダヤ系住民の供養塔のよう、あるいは社会主義的政商の幽霊船のように港に到着し、エルサレム街道奪回の任に着いた一万五千人に武器を支給したのである。

それから十日後の四月十日のことである。現在、首相となつて、エジプトのサダト大統領と和平会談をおこなつてゐるメナヘム・ベギン輩下のイルグンが、エルサレム西郊にあるディール・ヤーサン村を襲い、ナイフ、手榴弾、自動小銃、ピストルで二五四人の女こどもを虐殺したのは。事件の発生直後、イスラエル軍のあらゆる妨害を排除して、当地に決死的に急行した、国際赤十字社のパレスチナ派遣団団長のジャック・ド・レニエが現場の地獄図を生々しく伝えてゐる。（注）

レニエを出迎えたイルグンの分隊指揮官は上品な細面で、礼儀正しく彼に敬礼した。しかし、そのひつこんだ眼窩の奥には、深い古い井戸の底にある水のような冷たさがあつた。

国際赤十字のパレスチナ派遣団団長であるジャック・ド・レニエは、この礼儀正しいイルグン分隊長に向かい、自分がディール・ヤーサン村にやつてきた主旨を手短かに説明した。

「われわれの目的は、ごぞんじのとおりどちらの敵味方でもなく双方の負傷者および非戦闘員の人

命を救助することにあります。これは貴国もジュネーブ協定に調印したので、先刻ご承知のはずです。私は今日、アラブ側から、このディール・ヤーサン村で、非戦闘員の大量殺傷がおこなわれたとの通告を受けました。したがつて、ジュネーブ協定の公的任務により、負傷者を救助し、死体を引き取るためにやつてきたのです」

これを聞くと、分遣隊長の灰色の冥府の川の色をした目が、とつぜん稻妻の光を浴びたように光り、首をはげしく左右にふつて叫んだ。

「ノン・ノン。ここはすべて、ベギン氏を最高指導者とするイルグンの支配下にあり、たとえユダヤ人代表機関たりとも、口をさしはさむことはできません。これは戦闘行為であり、ここは戦場です。即刻、お引き取りなさるのがお身のためでしょう」

そういうと、おびやかそうとしたのか、それとも習慣になつてゐるのか、右手の指を開いて手首をひんまげながら、右腰のピストル・ケースの上をなでるような手つきをした。

レニエの瞳も、厚い頬も、かえつて火にかざされたように燃え上がつた。

「たとえ私の一身に何が起ころうとも、国際的な、人道的な義務を果すのが、赤十字員の責務であることをもう一度くり返したい。それに、エルサレムの国際赤十字社の命により、今日、私がここに派遣されてきていることも」

「人の間にぬきさしならない緊張が、目に見えない壁となつて突き立つた。それを破るのは、どちらかの行動しかなかつたろう。レニエは、体ごとその壁にぶつかる決意をした。

そのとき、若い分遣隊長のかたわらに、大きな体を「衣裳箇笥」のように固くこわばらせて突立っていた士官が、隊長の方を向き、両手でぶきように手糸をたぐるようなしぐさをしながら、ヘブライ語で早口に何かをささやいた末、泣きべそまじりの笑顔をつくつた。分遣隊長は、硬い表情をそっぽに向け、腰の右手をあげて、戦闘帽のひさしをぐいとあみだにあげ、

「よし、いきたまえ。しかし、何がおきても、ぼくは知らん。責任は二人でとりたまえ」と言いすて、まだ砲声の聞こえるエルサレム街道の方に向かつて、足早に立ち去つた。

算筒のような大きな士官は、そのままくずれるのではないかと思うような深い溜息をもらすと、丸い大きな手を腰のあたりでかくすようにして、汗ばんだレニエの手をぎりしめ、ドイツ語で言つた。「フェアシュテーエン・ジー。（分かりますか）ぼくは、今次大戦中ドイツの強制収容所に入れられ



ていて、国際赤十字のおかげで三回も生命を救われた。だから君たちはぼくの命の恩人だし、兄弟以上のものだ。何とかしていつかお札をしたいと思っていたが、運命なんて皮肉なもんだなあ。こんなとき、こんな場面で……」

士官は、すまなげにうつむいて、先に立つてのそのそと歩き出した。レニエも、昔自分がやられたことをやらねばならなかつたこの男、というよりも人間悲劇の皮肉さに、首をぶりながらかたわらにしたがつた。

道々、士官は口ごもりながら説明した。この村は、アラブ人だけが四百人ほど住んでいた平和な村で、近隣のユダヤ人も、何の暴力ざたもなく、仲良く暮らしていたのである。ところが、三月末、ベンゲリオンによつてエルサレム街道の奪回作戦が発令されたのち、イルグン独自の作戦行動だと思想が、四月十日に、この村の占領命令が、この士官の属する百名ほどの分遣隊に発せられたのである。彼の分遣隊は、今から二十四時間前にこの村にやってきて、ラウドスピーカーで、全員出て来て降伏するように命じた。そして投降しないばあいは、一時間十五分後に攻撃を開始すると通告したのである……。

土練瓦の上にしつくいを塗つた家々の集落は、墳墓のように静まりかえつていた。まるで、村全体が聞き耳をたてているかのようだつた。村の辻、民家の庭に立つて高いあんずの木が、ときおり白い花びらを空に漂わし、花の中から蜜蜂が羽音を立てて飛びたつた。やがて、その辻や土塀の陰から、男女や子供の群が包みをかかえ、背をこごめ、墓盗人のようにこそこそとあらわれ、イルグンの兵士たちの銃の台尻で、エルサレム街道の方へ小突かれながら、追いやられていつた。五、六十人ほどもこうして出てきただろう、村はふたたび無気味に沈黙した。長い、長い数十分だつた。なぜなら、それが、残つた村民たちの全人生だつたのだから……。

「いや、何、大したことは何も起きちゃいない。ただ、数人の死者が出ただけだ。もし負傷者を見つけたら収容していい。だが、カイネ・フェアヴァンデテ・アブゾルート（負傷者は一人もいない）アブゾルート（絶対に）」

団体の大きな士官は、例の毛糸をたぐるように両手を互いに回しながら、弁解がましくそう言つた。

「カイネ・フェアヴァンデテ・アブゾルート」この最後の言葉を聞き、自分でもくり返したとき、レ

ニエは血が凍つて、鳥肌が立つのをおぼえた。

それから、レニエは夢中でエルサレム街道へ駆けもどり、待機させていた赤十字マーク付の救急車とトラック一台を呼び、自分も救急車に乗りこんだ。ユダヤ教徒の運転手も医師も、死人のように青ざめていたが、レニエの指示にしたがつて、車を村に乗り入れた。

あんずの白い花びらが流れる村の辻には、イルグンの兵士たちが、ヘルメットをかぶり、国民服を着て、たむろしていた。どれも二十才になるかならぬかのうら若い男女で、頬は、任務を果したあと満足感と、それと人間の原始的な狩猟本能が満たされたためか、燃えるようにほてつていて。手にピストルや自動小銃、手榴弾、幅広の短剣をぶらさげていたが、その短剣はどれも血に濡れていた。そして、その中の美しい少女の一人が、レニエに対して、血のしたたる短剣を「まるでトロフィーを見せびらかすように」日にかざして見せたのである。その目は、夕映えのように誇らしげにさえ輝いていた。

レニエは、芯が痛くなるほど怒りのこもつた目差しで、その美しい少女をにらみすえ、それから、彼らのたむろしている近くの一軒の民家の戸口に足を踏み入れようとした。とたんに、十人ぐらいの兵士たちが、自動小銃を突きつけてレニエを取り囲んだ。レニエは、かつて味わつたことのない噴怒が頭の中で炸裂するのをおぼえ、片肘で銃口をはらいのけて、家の中へ押し入つた。

入口の部屋は暗かつたが、ひっくりかえされ、へし折られた家具の他は、何もなかつた。その間を縫つて、次の寝室らしい部屋に足を踏み入れたとたん、レニエは、ぼうぜんとして立ちすくんだ。膝頭が立つたまま折れそうにふるえた。

乱雑に引っぱり出された夜具や、家財道具をひつかぶるよにして、血まみれの死者が、ここかしこにころがり、ひんまがつてたおれていた。床や壁に人間の部分や肉片がひつかかっていた。手榴弾と自動小銃による掃討がおこなわれたことは確かである。レニエは、死者たちとその部分にけつまずかないよう用心しながら、次の部屋にとびこむと、死者の群は、同じように恐怖の瞬間に塑造していた。

「カイネ・ニヒト・アブゾルート」

レニエは、思わず例の大柄の将校の言葉を吐き出して、きびすをかえしかけた。そのとき、彼は、細い長い溜息のようなものを、どこかで聞いたような気がした。気のせいだろうと思つた。そのまま、

引き返そうとした。しかし、ある不思議な磁力のようなものが彼の足を釘づけた。

それから彼は、床に散らばっている屍にいちいち手をふれてみた。胸や、鼻にも手をあてがつてみた。そして部屋の片隅のシーツの下からはみ出ている、半分先のない小さな足のふくらはぎにふれたとき、レニエは先程の磁力にふれたように手がぴりぴりとするのを感じた。かすかなぬきもりが、そこに残つていたのである。シーツをひきはがすと、十才ぐらいの少女があおむけにたおれていた。唇はすでに土氣色をしていたが、少し上向いたかわいらしい鼻からは、かすかな息が流れ出ていた。レニエは、そつと少女を抱きあげ、高貴な古代陶器をささげるようにして、戸口に向かつた。

戸口では、イルグンの士官が立ちふさがつて、この高貴な発見物の搬出をばらもうとした。レニエは、少女を抱いている片肘での士官を押しのけた。先刻の簞笥のような団体の士官が、彼と少女を守つて、救急車まで送りとどけた。レニエは、救急車に少女を病院まで送りとどけたら、またすぐにもどつてくるように指示し、自分は村にもどつて一軒一軒点検して回つた。いざこも同じ「カイネ・ニヒト」であった。薪の山の陰にかくれて二十四時間息をひそめていた老婆と、もう一人の婦人を除いては。

こうして、無抵抗のまま、つまりハーリス流の表現によれば「自分の意志によらず死んでいった」村民の数は、二百五十四人であった。そして、この二百五十四人の屍は、ていねいに埋葬するようとにレニエが要求したにもかかわらず、「一日後にイルグンに代つて進駐したハガナ（国防軍）の手によつて、山積みされたまま放置されたのである。これが、六百万人の同胞をガス部屋で殺された同じ民族の所業であると信じることは、むずかしい。

レニエが、悪夢のような任務をおえて、エルサレムの事務所にもどると、平服に着がえて、りつぱな紳士にかえつたイルグン分遣隊の隊長とその副官が、彼を待ちあぐねていた。そして彼らは、紳士にふさわしい微笑と物腰で、うやうやしく一枚の文書を机上におき、これにご署名をお願いしたいと申し出た。そこには、レニエがディール・ヤーシン村で国際赤十字社の任務を遂行するにあたり、分遣隊がいちょうに迎え入れ、あらゆる便宜を提供したこと、レニエ氏はこれらの援助に対し感謝している旨、したためてあつた。レニエは、文書を机上にほうり出して、人差指を立てて「ノン」と激しく空を切つた。すると彼の口から出かかった言葉を阻止するようにして、分遣隊長は灰色の冷たい瞳で言った。

「もし、ご自身の生命をだいじとお考えになるならば、これに署名されることが最良の方法であると考え、あなたご自身のためにおすすめいたします」

そして、万年筆を取り出すためか、それとも他のものか、彼は背広の襟の左の内側に片手を差し入れた。これを見て、レニエの口から、薄笑いとうらはらに溶岩のような言葉があふれ出た。

「人間には、生命の助かるためには何でもする人間と、そうでない人間がいることはごぞんじでしょう。あいにく、私には自分が自分で書いたものにしか署名しない習慣があります。そして、この文書とは正に全く反対の内容の文書が、私の手で書かれ、署名されてジュネーヴにすでに送られているということをつけ加えておきましょう、ご参考までに。それと、今後も、こういう赤十字の意志に反する行動をとられるのかどうか、お聞きしておきたい」

レニエのこの言葉を聞くと、二人のイルグンの紳士は、窓外で揺れるプラタナスの緑のためか、顔色を蒼白にして、返事もせずに出ていった。

ディール・ヤーシンにつづいて、チベリアス、ハイファ、エルサレム新市のアラブ地区などが、ハガナ、イルグン・ツヴァイ・レウミなどのイスラエルの軍事組織によつて、次々に攻撃された。

注 板垣雄三編「アラブの解放」昭和五〇年・平凡社刊参照、以下の場景は上掲書にある国際赤十字のパレスチナ派遣団長、ジャック・ド・レニエ氏の手記を客観的に描写したものである。

第八章 命は乾いた砂のよう

ハーリスの住んでいたサファードの町が初めて攻撃されたのは、五月八日の明け方だった。東の空が青み始めた頃、トイレに立とうとしたハーリスは、窓の外の暗い闇の中を赤いほうきのような光る物が斜めに飛んでくるのを見た。そして、ヒューッという音が耳をこすったかと思うと、赤壁のモスクの方で破裂音と物がくずれ落ちる音がした。寝ぼけ眼をこすりながら、流れ星かなと思った。と思うまもなく、同じ音が耳をこすり、鼓膜をたたいた。ハーリスは床の上にはね起きた。そして、はだしのまま床にとびおりると、廊下に出て、父の寝室の戸を拳でたたいた。戸は、内側から開いて、すでに平服に着かえた肩幅の広い頑丈な父が立っていて、ハーリスの右腕の付け根を痛いほどにつかまえて、言つた。

「ハーリス、ユダヤ・シオニスト軍のロケット弾だ。すぐに服を着て、靴をはき、ベッドの下にもぐつていろ」

その父の口早な、しかし落ち着いた声を消して、第三、第四の矢の音が次々に聞こえ、地ひびきを立てた。それから、もはや一種類ではなく、様々な音階で、悪魔が楽しげに口笛を吹くような音がひつきりなしに聞こえ、様々な破裂音があちこちでした。

ぼろに包んだ小銃を小脇にかかえたアミタイ叔父さんが、廊下を走ってきて、ハーリスの父の前で、「一応、ヨルダン軍の防衛線につきます」

と叫ぶと、父が深くうなずくのを見るまもあらず、階段を駆け降りていった。サファードの町には、ヨルダン軍の兵士たちが、アラブ防衛軍として進駐してきていたのである。それに、アミタイ叔父さんは、義勇兵として参加しにおもむいたのである。ハーリスは、アミタイ叔父さんが、今まで細長い物を抱えて、ときおり夜、出入りしていた訳が今やつとわかつたと思った。つまり、いつ起きるかわからないイスラエルとの戦争に準備していたにちがいない。そういえば、暁の空を叩くようにして、こちらから大砲を放つ音も、赤壁のモスクのあたりで散発的に聞こえ始め、そちらに面した窓がときおりオレンジ色に光つた。

いつのまに寝入っていたのか、あくる朝ハーリスがはればつたい目を開けると、砲声はやんでいて、窓のカーテンの隙間から琥珀色の柔かい光が、部屋を斜めに仕切つてさしこんでいた。ハーリスは、その光の濃さでいつもより少し寝坊したなと思った。彼はベッドをすべり落ちるようにして抜け出るといそいで洋服に着かえ、裏庭へ出て、井戸の水を金だらいに汲んで顔を洗い、口をすすぐだ。いつもより入念に目と耳を洗つたのは、昨夜の思い出を悪夢のように洗い落したかったからである。それから野生の芝生の上にすわつて、お祈りをしようとひざまずくと、いつもの朝のお祈りの文句をさえぎるようにして、コーランの一節が浮かんだ。

「災厄とは何か。災厄とは何かを汝は知りたいか。その日、人は蛾のようにちらばり、山々は羊のすき毛の塊のようになるであろう」(コーラン一〇一一)

そういえば、芝草の宙で煙のようにうずまいでうごきまわる羽虫の彼方に、カナン山は春霞でくすみ、今にも蜃氣楼となつて漂い出そうとするかのように心もとなげであった。

ハーリスはお祈りをあげると、あちこちに不安気にたむろして、茶をすすつたりパンをほうばつている流浪農民の間を縫つて居間に入った。

「お早うございます」

中央の肘かけ椅子にすわっている父や、そのまわりの大人たちにあいさつをし、

「昨日の夜は……」

と口を開きかけたとたん、父は太い眉を寄せ、人差し指を固く結んだ唇にあてがつて、「しーつ」とハーリスを制止した。茶簞笥の上のラジオが、くせのあるアラビア語で何かをしゃべつていた。皆、それに聞き入つてゐたのである。

「サファードのアラブ人の市民諸君、あと二時間のゆうよをあたえる。ただちに町を退去するか、投降して、我々の指定するアラブ人地域に集合せよ。ディール・ヤーシンの二の舞をくり返さぬよう、我々は誠意をもつて諸君に勧告する。ハガナ第〇旅団司令官より」

この同じ放送は、ほとんど十分おきにくり返された。その合間に、また別の陰にこもつた声がまじつた。

「ディール・ヤーシンの悲劇だけではない。各地から進入したアラブ軍団の中には、チフス、コレ



ラなどの疫病が発生しつつあり、やがて諸君の町にもまんえんするであろう。ディール・ヤーシンか、コレラか、いずれにしろ、できるだけ早く町を退去することが、諸君の生存する最も賢明な道である。

イルグン・ツバイ・レウミ分遣隊隊長

いつも感情を面にあらわさないハーリスの父が、脇を向いて唾を吐くような口つきをしてからいつた。

「おどかして立ちのかせるつもりだ。この五月十四日に、英國はパレスチナの委任統治から手を引く。英國は新たに国連による委任統治を分担することを拒否しているので、一時的な混乱が起るだろう。その間に、シオニストは一挙にパレスチナからパレスチナ人を追い出して、ユダヤ国家を建設するつもりでいるのだ。脅かしにのつてはならん。ここはヨルダン軍とアミタイなどの義勇軍が守っている。わしらは彼らを信頼して、浮足だつちやならない」

そう、母や叔父たちに向かつて説く父の語調には、いつもとちがつて、どこかで栓が抜けているような弱々しさがあった。なぜなら、父は、味方はパレスチナ防衛のために進攻してきているエジプト、シリア、レバノン、ランス・ヨルダン、イラク、サウジアラビアなどの正規軍にムスリム同志会旅団、アラブ解放軍などの不正規軍を加えてせいぜい二万五千人以下であるのに対し、シオニスト軍は五万五千の正規軍を有し、装備訓練ともにすぐれていることを、アミタイから聞いて知っていたからである。

いや、それよりもさらに心配なのは、このサファードの町の防衛についているランス・ヨルダン軍の動向である。そもそも、ランス・ヨルダン国は、かつてのメツカの太守の子、アブドゥーラが、ユダヤ・ナショナル・ホームの建設を認める代償に、英國からパレスチナのヨルダン川以東に建国を認められた国である。アブドゥーラ国王は、ヨルダン川東岸のみならず、西岸とレバノン、シリアをも統合した大シリア王国を建設することに野心を燃やしていた。そのため、シオニストとひそかに話し合いもしているという噂がある。そのヨルダンに、果してサファードの町をシオニスト軍から本気で守る気持ちがあるだろうか。

そう自問したとき、ハーリスの父の声に穴があき、眉根がかげたのであつた。その気色は、そつと立ち上がりて薬罐の湯を注ぎたしにいつた母の額のほつれ毛や、しわにも影となつて映つているのが、ハーリスにも感じられた。

「ハーリス、今日は学校を休んで家にいなさい。いや、家をはなれてはいかんよ」
その父の声に「はい、お父さん」と、ハーリスはいつものように素直にうなずいた。それでいてハーリスは、朝食の卓につきながら、自分の心の底に今までなかつたものがわだかまつているのを感じた。それは、自分は父の言葉を守れないのではないか、したがつて今の返事は嘘になるのではないかという恐れである。ハンヌとはもう会えないだろうか、今、いつたいどうしているだろうか、アンマールやユーセフなど赤壁のモスクに近い密集地域に住んでいる幼なじみの友だちは、どうなつただろうか。それをぜひ確かめたいという気持ちが、朝から強く胸の中へうずいていたからである。

平たく押しつぶした丸パンと紅茶の朝食をすませると、ハーリスは二階の自室にもどり、勉強机の引き出しから、自分の一番だいじにしている折りたたみナイフを取り出して、ポケットに入れた。父がかつてダマスカスへ行つたとき買つてくれたナイフである。金属の鞘には、金地に赤、緑、紺などが、アラベスク模様に彫りこんでいる美しいもので、ハーリスの一番たいせつな宝物である。それを持つていると、何となく自分を守ってくれるような安心感があつた。彼は、そつと階段を降りて居間のそばをしのび足で通り抜け、裏口を出てオリーブ林の中に入った。ふりむくと、家人の人はだれも気づいたようすはなかつた。

オリーブ畑をすぎると、ぶどう畠が山すそに広がつていて、ぶどうの葉が山から吹きおろす風に、葉裏をひるがえし、不安気に歌つていた。

さわさわさわ 命はさわに生まれても
命は 乾いた砂のよう さらさらさらと

こぼれてゆく。

人のえにしは 花のよう はらはらはらと風に散る
さわさわさらさわ

ハーリスの耳には、ぶどうの樹々が歌つているのが確かに聞こえた。そのメロディーは、自分の胸からも泉のようにこみあげてくるのだった。そうだ、この道は、一番初めにハンヌといつしょに家路

をたどつた道だ。この道をいけば、ハンヌの働いてる病院へいきつくことができる。一目ハンヌにあつて、さよならをいいたい。ハーリスの足は、ひとりでに駆け出していた。

とつぜん、道の行手に眩しい光が炸裂し、ちぢれ毛をした煙が、土砂といつしょに高く、八方に散つた。気がつくと爆風で、ハーリスの体は道端にころがつていた。ハーリスは起き上がりつて、また駆け出そうとした。そのとき、背後から飛んできた真黒な大きな弾丸のような物につかまれて、いつしょに道端の溝の中に投げ落された。

「ハーリス、なぜこんな所へくる。ここはもう戦場だ。早く家に帰れ」

自分を背後から羽交いじめにした大きな体が叫んだ。それは、アミタイ叔父さんの声だった。叔父

さんの顔をふりむく暇もあらず、第二、第三の焰が、道路上やぶどう畑の中へ爆発し、土砂やちぎれたぶどうの枝葉が舞い落ちてきた。アミタイ叔父さんは、泥でくまだらけになつた顔で、ものすごい形相をつくり、ハーリスの胸ぐらをとつてどなつた。

「いいか、溝の中を走つて、真直ぐに家に帰れ」

そう言うか言わぬうちに、アミタイ叔父さんは、ハーリスの肩を家路の方へ向かつて突きとばした。ハーリスは、よろけながら五、六歩前のめりに走つた所でふりむくと、道端に落ちた小銃をひろつて、ぶどう畑の中にとびこんでゆく叔父さんのうしろ姿が見えた。よくうかがうと、ぶどう畑のこかしこに、散開しているランス・ヨルダン兵の姿や、銃身がかいま見えた。ハーリスは、銃声や炸裂音を背後に、叔父さんに言われたとおり、溝の中を走つて家に向かつた。今朝、ハガナが放送してから、もう二時間もたつていたのだ。すなわち、戦闘が再開されたのである。

ハーリスは、息せききつてオリーブ畑の中を走つていた。何故か知らないが、泣きたいような感動が胸一杯にふくらんでいた。少し小高い丘を登つっていた。そうだ、最初にハンヌと別れたのもこの丘だ。母からことづかつて手渡したバラの花束を、ハンヌがさよならがわりに振つてみせたのもこの丘だ。そこに立つと、自分の家と反対側に赤壁のモスクが見えた。しかし、それは昨日のモスクではなかつた。一本の柱が中途でへし折れ、象牙色の円屋根に丸い穴をうがたれた傷つけるモスクだつた。

ハーリスは、急にアンマールやユーセフの身の上が心配になつてきた。今日のハーリスは、いつもハーリスとはちがつて、すべて大人のいいつけを守らないハーリスだ。彼は、丘から白壁の我が家の方に足を向けず、傷ついた赤壁のモスクの方に向かつて、オリーブの幹々につかまりながら、爪先

立つて斜面をくだつていつた。あとから考えると、傷ついた赤壁のモスクが、彼を手びきしたような気がする。これから三十年間も、いや、もつともつと、ひよつとすると一生会えないかも知れないふるさとの町に別れを告げるようなど。それから……。

それから、ハーリスは、モスクへの近道であるオリーブ畑の麓にある、自分の卒業した小学校の校庭をよぎろうと裏門をくぐつた。校舎の裾を曲つて、校庭へ出ると、校庭の真中に、黒い穴があいているのが見えた。その周囲には、三、四人の人影も横たわつて、のんきそうに昼寝をしていた。ざん壌を掘つてゐる人たちだな、きっと。疲れて一休みしているのだ。そう思つて、ハーリスは穴の方へ歩いていつた。穴のまわりは黒ずんで、きな臭かつた。ざん壌を掘る人々は、死んだように静かに昼寝をしていた。ハーリスは、彼らを目覚ませないようになび足で、そのかたわらを通りすぎようとした。そのとき、彼の足は、その一人につかまれたように釘づけになつた。

昼寝をしている一人は、ユーセフだつたのだ。白蠟のような青ざめた顔に両目を見開き、笑つているように口を開け真白な歯を見せていた。

「ユーセフ」

ハーリスは、大声で叫んだ。しかし、ユーセフは、いびつな笑いを浮かべながら黙つていた。目は、日頃のかしこいユーセフに似ず、白痴のように、うつろに空を見上げていた。碎かれた右の胸のあたりから血はすつかり流れ出てしまつたらしく、周りの地面が死海のような形に赤黒く染まつていた。

「ユーセフ」

ハーリスは、ふたたび叫ぼうとしたが、それは声にならなかつた。こめかみや下瞼のあたりが、ぐつとふくれあがつてきて、涙があふれそうになるのだが、それが流れないままふくらんでいるのである。

これが、ハーリスが人間の屍を見た最初だつた。しかも、それは彼の親友の悲惨なむくろだつた。ハーリスはぼうぜんとして、それを突つ立つたまま眺めていた。どのくらいそうやつて眺めていたのか、おぼえがなかつた。何を考えていたのかも、おぼえがなかつた。風が吹いていることはわかつた。ユーセフの栗色の髪が、むき出た眼をくすぐつていたから。



第九章 さらばサファード

それは、人間のなだれだつた。無数の足音の土砂に、悲鳴や怒号のまじつた恐怖のなだれだつた。それは刻々にふくらみ、速度をまして、ハーリスの家に迫つてきた。

「イルグンが来るぞ。みんな逃げるよ。殺されるぞ」

ハーリスや、父や、アミタイ叔父さんたちの集まつている居間にも、そんな叫びの切れ端がとびこんできた。それを裏づけるかのようになだれを追いかけ、銃声が町の方から聞こえてきた。と、ハーリスの家の屋根をかんなで削るかのように、低い、鋭い金属性の音がして、一瞬、窓が目をつむつた。

「シオニスト機の襲撃だ」

窓をかすめ去つた灰色の大きな影のあとを目で追いながら、アミタイ叔父さんがかすれ声で叫んだ。その瞬間、居間の壁を叩くかと思われるような身近な銃声が連続的に空を縫つて放たれ、人のなだれの中に悲鳴の穴をうがつた。

ハーリスの父が肘かけ椅子から真直ぐに立つた。

「カナン山の麓の谷を通つて、ひとまず、レバノンのビントユベイルに逃れる他はない。みんな、わしから離れるな。はぐれたらビントユベイルに行け」

叱咤するような口調でそういうと、父は、かたわらにいたハーリスの手を頑丈な大きな手でつかんで、戸口に向かつた。アミタイ叔父さんも、壁にたてかけてあつた小銃を手にとつて、あとにつづいた。ハーリスの母は、とつさに卓上にあつた平べつたい丸パンとドロップの入つてゐる瓶をエプロンにくるんで外に出た。

庭の中央には、父とアミタイ叔父さんが突立つて、両手をラッパにして口にあてがい、白壁の家がこだまするような音声で、一族全員の名をかたはしから呼んでいた。家の玄関から、裏庭の方から、窓から、人々が次々に飛び出して、父の周りに集まつてきた。父は、それぞれの家族の長たちの名を呼び、みな集まつているのを確かめると、

風が歌つてゐるのが聞こえた。ハーリスは、ポケットにしのばせていた自分の折りたたみナイフを取り出し、地べたに広げたユーセフの右の掌にのせ、指を閉じて、にぎらせようとした。しかし、鉤形に曲がつた指はにぎろうとせず、ナイフのアラベスク模様は、ユーセフの掌の中で美しく輝いた。ハーリスはもう一度思いなおして、そのナイフを開き、柄の部分をユーセフの掌の中へとせた。なぜそうしたのかわからない。人間には、なぜかわからずにしながら、のちになつてそれが意味をもつていることに気づくことがよくあるものだ。」

ハーリスが、校門を出ると、傷ついた赤壁のモスクの前の広場を、数台のトラックに分乗したトルンス・ヨルダン軍の兵士たちが、陽気に軍歌を歌いながら通り過ぎていった。彼らは、ちょうど演習から帰るように楽しげで、さあ、これから一風呂浴びて夕飯が食える、とでもいたげな安堵感をただよわして、どこかへ去つていった。

それから、ハーリスは、砲声の静まつた町や山を何度もふりかえりながら、家へ帰つた。居間にいると、日頃やさしい母が、両拳をふりあげながら馳せ寄つてきて、

「ハーリス。どこへいつたんだい。みんな、探してたんだよ」

と涙声で叫ぶなり、ハーリスの片頬を平手で打つた。ハーリスは、うつむきながら、

「母さん、ユーセフが小学校の校庭で死んでいた。砲弾でとばされて」

そう呟やくと、今までふくれあがつたまま止まつていていた涙が、急に両眼からあふれ出た。テーブルの中央の肘かけ椅子にすわっていたハーリスの父が、何かを飲みこむようにゆっくりうなずいた。母は、両拳で口をおさえながら、その合間から「かわいそうに」と言葉にならない嗚咽をもらした。

そのとき、居間の戸をけ破るようにして、アミタイ叔父さんがとびこんできた。叔父さんは、右手につかんだ銃身をふるわせながら、真黒な顔で叫んだ。

「もうだめだ。ヨルダン兵がうらぎつた」　そのとき、なだれのようなひびきが、町の方から聞こえてきた。

「みんな、よつと聞け。ひとまずここを引きはらつてビントユベイルに行く。各自、自分の家族をしつかり把握して、わしのあとについてこい」

大輪の花を気づかわしげにふるわせていた。

やがて、ハーリスの一家も、人間のなだれに巻きこまれていた。ハーリスは、ともすればおくれがちな母をときおりふりかえりながら、無我夢中で父の背を追つた。

カナン山の上の蒼ざめた空には、薄く、細い月がかかつていて、空気はまだすきとおつていて明るかつた。その中を興奮でうわづつたような爆音をあげて、シオニスト機が飛来し、谷間の道を蟻の列のようにわたる人群に機銃弾を浴びせて頭上を滑空すると、向いの山の頂きで身をひるがえし、ふたたび爪を立てて、逃げゆく人々に襲いかかつてくるのだった。そのつどハーリスは、父にならつて道端に身を投げ伏した。幸い弾はハーリスたちの近くに降つてこなかつた。しかし、機影が頭上をかすめ去つたのち、背後で女のふりしぶるような悲鳴が聞こえた。

「ああ、どうしよう。これはナワールじゃない。ナ、ワール」

ハーリスは、両手を突いて上半身を起しながら背後をかれりみた。一人の若い女が両膝を地に突き、白い柔らかそうなものを両手で目の前にさしあげながら、泣きわめいていた。女の手にしているものは枕だった。女はそれを地面に投げ捨てると、よろめきながら立ち上がり、いきなり今来た道を逆にとつて走り出した。

「ナ、ワールー」

「ザキア、いくな、もどれ」

女の夫らしい若い男がそのあとを追つて走つた。そのとき、また一機、急に錐もみを打つて舞い落ちてきて、地上に火薬を浴びせた。それきり、女の姿も、そのあとを追う男の姿も、ハーリスの視野から消えた。

……ここで、筆者が顔を出すのを許していただきたい。筆者は、枕を赤ん坊とまちがえて抱いて逃げてきたこの若い女の話を、アーヴィング・ミード氏から聞いたとき、ふと疑いをもつたからである。どんな場合でも、母親が枕を我が子とまちがえてひつかみ、しかもそういう長い道のりを気づかずに走りつづけることがあるだろうか。それは枕ではなくて、赤ん坊の着物か、おくみのようなもので

その空家を占拠したユダヤ移民の老母によつて育て上げられ根つからのイスラエル軍兵士になつていたという話もその一つである。

これらの話から結論されるこの一つは、一九四八年のパレスチナ戦争において、アラブ側がいかに無防備であつたか、そしてイスラエル側の占領作戦がいかに組織的であり、急迫をきわめていたかということである。イルグンの指導者であつたベギン首相は「すべてのユダヤ兵は、バターを突き通すナイフのようにハイファを通つて前進を続けた。アラブ人は、ディール・ヤーシンと叫んであわてふためいて逃走し始めた」と誇らしげに語つている……。

サファードからレバノンの国境まで、地図の直線距離にすれば三十キロメートルに満たない。しかし、それは谷をわたり、山を越えての曲がりくねつた道である。おまけに暗くなつて山路を登り始めた頃、五月にしては冷たい雨が降り出して、着のみ着のままで逃げてきたハーリスたちの肌を刺した。ハーリスは、バターのように滑る道を疲労と飢えにむしばまれながらもうろく歩きつづけた。母親が、ときたま皆に一粒ずつわけてくれるドロップの甘味が、ともすればかきくもる意識を目ざませてくれた。背後の谷間の闇では、シオニスト軍の砲声が嘲笑うように尾を引いてこだました。休む間もなく、人間のなだれは、勢いを弱めながらも、北へ北へとはつていつた。

ハーリスらの一行が山を登りつめたとき、夜來の雨は嘘のように上がり、東の空が白んできた。霧が眼下を流れ、その破れた合間に麓の草地と村がかいま見えた。

「あれがレバノンだ。もうじきだぞおつ」

アミタイ叔父さんが、右手にもつた銃でそれをさしながら叫んだ。ハーリスの父も、血走った眼を見開いて、うなずいた。

「みんな、もうじきだ。もうひとしんばうすれば、隣のアラブ人の国へ着くのだ」

濡れた山道を幼ない子や、女や、老人をまじえてくだるのは、バターをナイフで突きさすように容易ではない。ハーリスは、自分が杖になつたような気持ちで、肥つた母の手をとり、一步一歩くぼみを見つけては、そこに足を踏んばつて歩いた。それでも、母の体が斜めにころがつて、この健気な杖をはじきとばしたことが、二度三度あつた。しかしハーリスは、泥まみれの真黒な顔の中に大きな眼を輝かして、流れゆく霧の間の村を見おろした。ちょうど今越してきた山の背後から、オレンジ色の光の縞がさしこんで、その村を黄泉路をたどつたあとにあらわれた凧土のように美しく照らし出した山をくだる人間の泥ねいは、一段と加速された。

村道をよぎる国境線には、レバノン兵が一個小隊ほど道の両側に立ち並び、パレスチナからの難民たちを出迎えていた。ハーリスたちの一行が、足を引きずりながらたどりつくと、先頭の兵士の一人がアラビア語でどなつた。

「武器をもつてゐる者は、武器をここにおいてゆけ。そうしないと、国境は通れないぞ」

それを聞くと、アミタイ叔父さんは、銃口を背後に垂らして、小銃を小脇にはさみ、その兵士の前に進み出て、不満気にいつた。

「なぜです。我々は、自分たちを守るためにシオニストと戦つてきた。そして、これからも戦わねばならないのです」

そういつたとたん、いきなり、その兵士は一步踏み出して、拳固の背でアミタイ叔父さんの頬げたを横なぐりになぐりつけた。

「つべこべいわす、いわれたとおりにしる。ここは、パレスチナじゃないのだ」

ハーリスのかたわらに立つてゐた父が、そういつて、さとすようにうなずいた。アミタイ叔父さんは、泣きそうな顔で下唇を噛み、小銃を兵士の足元に投げ捨てた。以後、このときの叔父さんの顔と、小学校の校庭に倒れたままうつるな瞳で空を見上げていたユーセフの顔とが、ハーリスの脳裏に妙にこびりついて離れない。映像も言葉と同じく、ひとたび人間の中に住みつくと、いつのまにかその人生を引つぱつたり、押したりする不思議な力をおびるようだ。

「アミタイ、銃をおけ。ここはパレスチナじゃないのだ」

ハーリスのかたわらに立つてゐた父が、そういつて、さとすようにうなずいた。アミタイ叔父さんは、泣きそうな顔で下唇を噛み、小銃を兵士の足元に投げ捨てた。以後、このときの叔父さんの顔と、小学校の校庭に倒れたままうつるな瞳で空を見上げていたユーセフの顔とが、ハーリスの脳裏に妙にこびりついて離れない。映像も言葉と同じく、ひとたび人間の中に住みつくと、いつのまにかその人生を引つぱつたり、押したりする不思議な力をおびるようだ。

「アミタイ、銃をおけ。ここはパレスチナじゃないのだ」

それから、一通りの手続きをすますと、難民たちは、レバノンの兵士らに先導されて、そこから十四、五分もあるいたビントユベイルの郊外の民家に分宿させられた。ハーリスの一家は、ある農家の庭にある土壁にかこわれた平土間の納屋におちついた。

みな疲れきつた体を重ね合わすようにして眠ろうとしたが、寝入つたのは叔父たちの家族の幼い子供たちだけで、大人たちは疲労でかえつて頭の芯が妙に興奮していて、寝つかれなかつた。それにこれから先どうやって生きていくかの不安がその芯にまとわりついていたし、それに腹の皮をちぎるような空腹感が彼らを苦しめていた。ハーリスの母がエプロンにくるんでもつてきた丸パンは、とうに細かくちぎられて、子供たちに分け与えられていた。半大人のハーリスは、他の子供たちより大きなか分け前をもらつたが、それは彼の腹の中でまたたく間に溶けてしまつた。

「まず何か食い物と飲み物を買ってこねばならん」

戸口に向い合つた壁を背にあぐらをかいていたハーリスの父が、そうつぶやいて、上着や、ズボンのポケットを両手でしきりと探り回したが、出てきたのは、濡れてしわくちゃになつた一ポンド紙幣だけだつた。これには気丈な父もさすがに失望の色を浮かべ、鼻からため息をもらした。あのふだん冷静な父が財布をもつてくるのを忘れるなんて。かたわらに片肘ついて寝ころがり、薄目で父の顔をうかがつてたハーリスもおどろいて、両手を土間に突き、半身を起こした。あのお城のような白壁の家や、広々としたオリーブ畠を一瞬にして失つたばかりか、今、父の身につけている全財産がこれだけとは。ハーリスは、父のあぐらの前におかれたその一枚の紙幣に、あらためて自分たちの運命の軽さと、失つたものの重さを思い知らされたのである。ハーリスの一家だけではない。この時、生國を追われた約七十五万のパレスチナ人は、国土の面積の七八パーセント、柑橘類の果樹の半分、全建物のおよそ四分の一、およそ一万の商店や会社をイスラエルに奪われたのである。国土の二〇パーセントにあたるパレスチナの西岸は、ヨルダンによつて併合された。

ハーリスの叔父たちは、てんでにふところや物入れを探つて、あり金を残らずハーリスの父の前にある一ポンド紙幣の上に積んだ。父は、その一枚一枚のしわを掌でのしながら重ねなおし、かなり分厚くなつた札束を人差し指と親指で手前にひねくりながら数え始めた。

そのとき、戸口が開いて、まばゆい朝の光を背に、ずんぐりした人間の像が立つた。

「ほんとうに難儀でしたのう。しかし、みなさん、ぶじで何よりじゃつた。アラーの神がお助けく



第十章 このオレンジは食べてはいけない

代金を払わねば決して他人の施物を受けようとしない、ハーリスの父の誇り高さは、同じ頃、故郷のハイファを追われ、レバノンのスールにたどりついたライラ・ハレドの追憶の中にも出会えることができる。

当時まだ四才を少し過ぎたばかりのライラは、母親と三人の姉といつしょにスールの一隅にあてがわれた家の狭い一室で肩を寄せ合って眠り、UNRWA（国連難民救済事業機関）の渡す食糧配給カードで飢えをしのいでいた。国を奪われた人々に対し、まるで乞食に施しをするような態度で食糧を分かち与える心ない国連の職員も中にはいたらしい。ときに口惜し涙を流しながら帰つてくるライラの姉たちを見て、母親はその施物を床に叩きつけんばかりに激怒したそうである。

そういうある日のことである。ライラは、おびえて泣きべそをかく幼な友だちの手をぎりしめ、黒豹のように光る目を開き、薄い唇を固く縫い合わして、近くの森の中へ入つていった。生きた肌のよにはずむ地面を踏む小さなサンダルは湿気に濡れ、落ちている小枝や草の葉がちくちくと素足を刺した。しかし、ライラは魅せられたように木立を縫いながら突き進んだ。その奥に、いつか絵本で読んだことのあるお菓子の家か、あるいは今住んでいる汚ない小さな家よりも、もつと大きく美しい家、その頃はそういう言葉を知らなかつたが、未来という家が大きなアーチの扉を開けて待つているような気がしたのである。そういうふうに甘酸っぱい芳香も木立の合間に漂い流れてくれるのではないか。

「サルワ、ほらとてもよい匂いがするでしょう。きっと、森の向こうにお菓子の家があるのよ」

ライラは、粘土を三本指でつまみあげたような愛らしい鼻をふくらましてそういった。

「ほんとう？」

サルワは肩をしゃくりあげながら、小鼻をひくひくと動かしてみた。嘘ではなかつた。芳香は、いつ濃くなつてきたし、森の木立は明るくなつて、その隙間に青い空と金色の玉がちらつき始めたの

ださつたのじゃ。いや、きっとまた家にもどれる日がくるでしょう。アラーの神がこんな不正義を黙つて見ておられるはずがない。さあさ、何もありませぬが、パンとジュースだけでもたっぷり召し上がってください。おい、ほんやり突立つておらんで、早くみなさんにそれをさしあげんかい」

背後をふりむいたとき、光を浴びてあらわれたその横顔は、最前一行を出迎えてくれた農家のあるじだつた。あるじが土間の中に入ると、つづいておかみらしい女が光の中に姿をあらわし、小屋の中に思わず小鼻をふくらますような芳香をもちこんだ。女は、胸に焼きたての丸パンを重ねて支え、もう一方の手に黄色いオレンジジュースの入つたガラス瓶をぶらさげていた。女が、自分の顔のように丸く、狐色に焦げたパンをくばろうとしたとき、ハーリスの父が、土間の札束を拾いあげて、すくと立つた。

「ご親切は、まことにありがたい。しかしその前に、どうか、これを受け取つていただきたい。わしらは、シオニストに國を奪われましたが、まだ乞食になつたのではありません。さあ、どうか、この中からパンの代金を取つてください」

これを聞いて、農家のあるじは、両手を胸のあたりで広げて身をそらし、むつとした声で言つた。

「何をおつしやる。イスラム教徒はみな相身互いじゃ。それ、コーランにもあるではありませんか。災いなるかな、貧しき者に施さ……」

「いや、わしらはまだその貧しき者ではありませんのです。ほれ、このとおりまだ金をもつておりますので。ぜひ代金を取つていただかねば……」

ハーリスの父と農家のあるじのこのいつ果てるとも知れぬ論争にまじつて、ひき蛙の鳴くような声があちこちで聞こえ始めた。ハーリスも、そのかなり大きなのが一匹自分の腹の中にいるのを感じた。

である。ライラはサルワの腕をひっぱつて小走りに駆け出した。森を抜けると、緑の葉が日の光を浴びて、静かな海のようにさざ波立っていた。金色の粒は、その海一面に浮き沈みしていた。

「あつ、オレンジよ、オレンジの林よ」

それまでうらみがましげに泣き声をもらしていたサルワが、ライラの手をふりきつて走り出し、下枝になつてゐるオレンジを両手でつかんでぶらさがつた。そして大きな実を頭上に捧げて尻餅を突いた。ライラもそれを見て、しゃくりあげるように笑いながら、オレンジの実に飛びつき、尻から落ちた。

その日、ライラは早く母や姉たちを喜ばしたいと、芳香で熟れた体をまりのようにはずませて家へとんで帰つた。しかし、案に相違して、母はライラの黄色く染まつた顔と、その裾をまくつたスカートの中で輝いてゐるオレンジの実を不審気に見くらべて、たずねた。

「ライラ、そのオレンジはどこからもつてきたの」

「森の向うにたくさんなつていたの。お星様みたいにたくさん」

それを聞くと、母親は悲しげな目をして首を横に振つた。

「いけません、ライラ。それを元の所にもどしていらっしゃい」

「なぜ、ママ、どうしてこのオレンジを食べちゃいけないの」

ライラは自分の気持がはぐらかされたことにむつとして、小さな唇をとがらしてたずねた。顔をかくすように戸口の方に歩みかけた母親は、立ち止まるときりむきざま涙のふくれあがつた目でライラをにらみ、きびしい口調で叱りつけた。

「ライラ、そのオレンジは私たちのものではないんだよ。おまえはもうパレスチナにいるんじゃない。いいかい、ライラ、これからは私たちのものじゃないオレンジを取つて食べちゃいけませんよ」

ハーリスの父も、かたくなと思えるほどに施物をこばみつけた。施物だけではない。ペイロードに住む昔の友人が、定住の地を提供しようと車をビントユベイルにさし向けてハーリスの一家を招いたのに、父は首を縦に振らなかつた。その友人の性格に好ましからぬ所があるというのだが、その理由らしかつた。また、ヨルダンのアンマンに住む富裕な親類からも自動車三台がさし向けられた。その車に乗りさえすれば、これから的一家の安定した生活はまずまちがいなかつたろう。しかし、父はおわしは、それに対して異存をはさむつもりは毛頭ない。ハーリス、おまえもだ」

父は瞼をそこで開いて、ハーリスをかえりみた。ここ数日来目立つて血脉の浮き上がつたその大きな目は、「ハーリスよ、アンマンにいて無事に学校を続けなさい」と語りかけているようでもあり、またその裏には別れを惜しむような微妙な光がゆれていた。ハーリスは何のためらいもなく答えた。

「お父さん、ぼくはお父さんといつしょにシリアへいきます」

こうして、ハーリスの大家族は、初めておのがじし別々の方向に向かつて歩き出すことになつたのである。ハーリスの一家と、アミタイ叔父やその他の二家族は、シリアの難民キャンプへ向かうことになつた。ヨルダンの親類が差し向けた車に乗る家族の人々は、皆身につけていた指輪や腕輪や耳飾りなどをはずして、ハーリスの母の掌にのせ、頬と頬、鼻と鼻をお互いにこすり合わして、別れを惜しんだ。三台の車が出発するとき、そのエンジンの音にまじつて、いつせいにすすり泣きや、ラップのように鼻を噛む音が聞こえた。ハーリスの父は、道の真中に立つて、砂塵をあげ遠ざかつてゆく三台の黒塗りの自動車に向かい、筋張つた腕を何度も持ち上げて振つた。ハーリスが拳で目の下をこすつていると、肩にずしりとした手がかかつて、

「ハーリス、さあ、いこう。祖国への道に向かつてな」

と、アミタイ叔父さんの力強い声がびんのあたりにひびいた。

第10章 このオレンジは食べてはいけない

第十一章 バーラダ川の畔にて

ハーリスの一家とアミタイ叔父たちは、それから数日後、シリアのダマスカス近郊を流れるバーラダ川の畔にある難民キャンプへ移住した。季節が夏に向かっていたので、所々かぎざきの青空が見えるテント生活も、それほど苦にはならなかつた。かえつて、夜にそのかぎざきからのぞく星が、これまでより一層神秘的に見え始めた。それは、太古から民族の興亡の歴史を見つめてきた、醒めた宇宙の瞳のように思えた。このチグリス・ユーフラテスの畔では、皆、昔からそうだつたよ、砂漠の海を浮き草のように、皆、漂い流れてきたのだよ、と語つてゐるようでもあつた。

星を浮かべて流れるバーラダ川も、広くはないが、貴婦人のかむるチャドルのように美しかつた。ハーリスは、よく川岸の茂みの陰に腰をおろして、夜目に透きとおつて見える川を眺めた。月が流れの面に姿を浮かべ、それから川底までさしこんで、底にある石の群やたなびく水草の茎まで映し出している。だが奏でているのだろうか、テント村のはずれの方から一弦のレバブの音が、蛇使いの音楽のようにあやしくあわただしく、かと思うとすり泣くようにかほそくひびいてくる。その旋律を破るように子供の泣き声もまじり、大人のののしり声も聞こえてくる。

君は きっと涙をこらえているね。

こらえるのは 君がなさい。

でも 恋は 王様もおさえられない。

恋せよと 王様も命じられない。

ああ、この胸の恋の痛み、

でも、こらえているから

だれも知らない。

君は きっと涙をこらえているね。

こらえるのは 君がなさい。

でも 恋は 王様もおさえられない。

恋せよと 王様も命じられない。

ああ、この胸の恋の痛み、

でも、こらえているから

だれも知らない。

アラブ人の好きなアブ・フィラースの歌を、女の声がしづらり出すようにうねうねと歌つてゐる。ハーリスは、今は敵国人となつたハンヌのことをひそかに思つた。十世紀の武将アブ・フィラースも、敵国の娘か、恋してはならない王の寵姫を恋してゐたのかも知れない。

……茂みの彼方の草を踏む音がして、人の体を投げるひびきが伝わつた。一人ではない。

「ねえ、ガーネムの話のつづきをしてよ」

「何だい、知つてゐるくせに。まあいや。そのかわりきつと話すとおりにするんだぜ。それで、ガーネムは、ダマスカス近郊の墓地の棺の中に麻薬をかがされて眠つてゐた美女を家へ連れてかえつたんだ」

「それから

「それからこうさ」

唇を鳴らして吸い合う音と女のくすぐつたげな笑い声が聞こえた。

「それから、ガーネムは娘の足下に身を投げ出して、そのきれいな足に唇を押しあてたんだ。その足は、バターみたいにとろけるばかりだつた。ああ、バターが食べたい……」

ふたたび、女の悲鳴に近い声が聞こえた。ハーリスは、膝を立てたかかとが地面から浮き上がるかと思われるほどにふるえ始めた。彼は膝小僧を両手でしつかり抱きしめ、わななく顎をうずめた。

「だれだい。そこにかくれているのは」

怒氣をふくんだ声が茂みを通つて聞こえた。

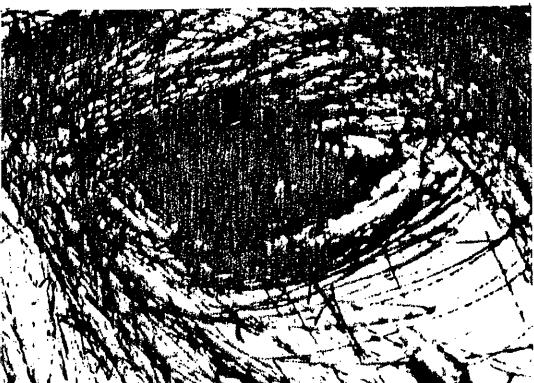
「ア、アブドゥーラ・ハ、ハーリスです」

ハーリスは歯を鳴らしてやつと答えた。

「ハーリスか。なぜそんな所にいるんだ」

聞きおぼえのある声が返つた。ハーリスは、声の主に頭の中で突きあつたとき、川面の月が一瞬消えたかのように思つた。それは、サファードの中學でよくコーランを重々しい口調で読んでくれた先生の声だつたからである。先生は、ちぎれて落ちそうなほど大きな腹を抱えた奥さんをつれて、同じキャンプ村に逃れてきていた。先程聞こえた女の声は、奥さんよりずっと若々しい、鈴の振れるような声である。

「まあ、いいさ。ハーリス。何も彼も変わつてしまつたのだ。おまえの家がおんぼろのテントに変



わつてしまつたようにな」

茂みの陰の声はそういうつて、みぞおちをしゃくるようなわざとらしい笑い声を放つた。

こうして、難民キャンプの生活は、サファードではかいま見せなかつた人間生活の褶曲を胃の腑を開くようにハーリスの前に展開して見せた。しかも、それはいつも饑餓の黄色いランプに照らされた。子供たちは泣いた。大人たちはいらだつてののしり合つた。そして、絶望感と飢えに生活はむしばまれ、腐り始めていつたのである。

キャンプの周囲に住むシリアの村人たちは親切だつた。畠でとれる野菜や果物などをおりおり運んでくれるのだが、ここでもハーリスの父は、代金を払わずには決して受け取ろうとはしなかつた。そればかりか、シリア政府がトラックで運んでくる食糧や、国連機関の配給するミルクや小麦までも頑なに拒絶した。ハーリスも母もアミタイ叔父も、そのいこじきにあきれて、ときには父の横顔をうらめしげににらんだり、ときには口を尖らして不平を鳴らしたりしたが、父は何としてもこけた頬を縦に振ろうとはしなかつた。独立独歩で生き抜いて、サファードにおける名門を築きあげた誇りが、父に施物を受けることをがえんじさせなかつたのだろう。それにまた、苦境にあつて一度人の情にすがると、一番たいせつな独立心をむしばまれてしまうという信念が父にはあつて、自分の頸につつかえ棒を立てて、やせがまんをしていたのだろうと、後になつてハーリスは考えるのだ。ともあれ、その頃のハーリスは、腹をバンドでくびれるほどに締めつけて、中に棲息しているひき蛙を抑えつけていたのである。

いつの頃か、ハーリスの父は、毎日未明のうちにテントを抜け出して、夜おそく帰つてくる日がつづいた。テントの床に敷かれた麻袋の上に倒れるように転がつて寝入つてしまふ父に、母が毎日何をしに出かけるのかとたずねても、父は答えるのもめんどくさいとばかりひときわ高く鼻の奥をとどろかすのだった。

ある夕、父はテントの中に帰つてくるなり、肩から重そうな袋を落して、「ハーリス、中をあけてごらん」と不機嫌そうな顔で言つた。ハーリスは、その袋の中に魔法のようにスク（市場）の匂いがこもつてゐるのを感じた。袋の紐をほどくと、案の定、少女の頬のように初毛を光らした桃が五、六個転がり出た。そのあとから、布袋頭のような西瓜が顔を出した。パナナの葉に包まれた羊の肉も入つていた。ハーリスは宝の山を見つけたアラジンのように恍惚としてその袋をながめた。

「さあ、ぼんやり見てないで、アッラーに感謝しておあがり。これは、父さんが働いて稼いだものだ。今、父さんはダマスカスの友だちの仕立屋で働いているのだ。こう見えても若い頃、父さんはベイルートで腕っこきの仕立て職人だったのだぞ」

そういうと父は、破顔してめつたに見せたことのない笑いを高々とテントの天井に吹きあげた。

第11章 バーラダ川の畔にて

第十一章 ダマスカスとプラトン

独立心の強いハーリスの父は、友人の店で一生懸命働いて得た稼ぎと、家族中の金目の物を売り払つて得た資金で、ダマスカスのスク（市場）のはずれにある一軒の店を借り、布地屋兼仕立屋を開業した。それにともない、ハーリスの一家は、難民キャンプからダマスカスの市内へと引き移つた。ダマスカスは、世界最古の町の一つである。ユダヤ人とアラブ人の共通の祖であるアブラハムは、兄弟のロトがバビロニア人に捕われたと知り、よく訓練された家の子三百十八人をひきいて、敵をダマスカスの北、ホバまで追い、すべての財貨と兄弟のロト、およびその女たちと民を奪い返したと、創世記第十四章に記されている。これは紀元前およそ十六世紀の頃と推定されているが、ダマスカスは、すでにその頃、都市としての景観をそなえていたといふ。

紀元後一世紀になると、この町は新約聖書にも登場する。すなわち、タルト人サウロが悔悟して、キリスト教徒パウロとなつたのもこの地であつた。イエスの死後、エルサレムでキリスト教徒の迫害が起こり、使徒ステパノが石で打ち殺された日も、サウロは一軒一軒の家に押し入り、男女を引きずり出して牢屋につなぎ、教会を荒し回つた。サウロはそれにあきたらず、ダマスカスの信徒たちも根こそぎにしようと同市のシナゴーグまでの添状をもらつた。これをたずさえて、ダマスカスの近くまで来たとき、とつぜん天から光の輪が射して、サウロを捕えた。彼は、その強烈な光に目がくらみ、地に倒れたが、そのとき「サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するか」という声が天から降り、彼の心胆を寒からしめた。

「あなたはどなたですか」と、歯の根も合わずたずねると、

「私は、おまえが迫害しているイエスである」と答えが返つたが、だれもその姿を見た者はない。こうして失明したサウロが、三日後イエスの弟子アナニアスに救われて、熱烈なキリスト教徒となる筋である。

紀元後五七〇年頃に生まれたマホメットも、十一歳の頃から叔父に連れられて隊商を組み、シリア

を旅した。そこで、十字架の使用さえ拒む偶像排除のネストリア派キリスト教の宣教師の影響を受けたことも知られている。さらに二十五歳のときに、富豪の未亡人ハディージヤによつて、シリアへおもむく隊商の長に選ばれ、彼地で多大の利益を得て帰り、ハディージヤと結婚するが、商人モハメットの足跡がダマスカスに印されたと考えるのは、ごく自然だろう。その没後、四代目のカリフとなつたアリーを倒して、ムアーウィアが建てたウマイア王朝の首都はダマスカスにおかれた。

十世紀の頃成立した「千夜一夜物語」に出てくるダマスカスは、「木々と流れる水とに満ちた感嘆すべき都」だつたらしい。物語第二十三夜の中で、次のような詩によつて称えられている。

夜は、情濃き翼にてダマスを包み、朝は、茂る木々の葉陰をさしのべる。

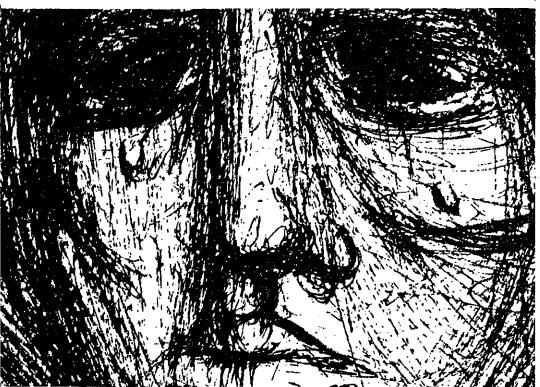
木々の葉に宿る朝露は真珠か。そよ風の間にゆれゆれ、雪と降る真珠。

茂みに奇しき自然のなりわいあり。鳥は朝の書を読めば、清水は開かれた白い巻物。そよ風が

鳥の言葉を写せば、白雲は水したたらせ、文字を書く。

ハーリスが難民キャンプの傍で泳いだバーラダ川は、アンティ・レバノン山脈のはざまを西から東へ下り、ダマスカス市内を南北に分けて流れている。南岸には、ところどころ寺院の丸屋根を残す他、雑然と広がる灰褐色の人家にまじり、白大理石のコリント式列柱を整然と立てるウマイア・モスク、池の緑濃きオスマントルコ時代のアゼン宮殿、十二世紀に十字軍からエルサレムを奪還した英雄アラジンの墓がある。その町のストレイトと呼ぶローマ時代の目抜き通りの一隅に「聖アナニアスの家」があるが、その石子積みの入口をくぐつて地下に降りると、盲となつたパウロが使徒アナニアスの手に触れられて、目からうろこのような物が落ち、洗礼を受けた礼拝堂がある。荒削りの石をアーチ形に組み上げた質素な地下礼拝堂だが、仄赤いろうそくの火に浮かぶその薄暗い石肌が、回復した瞬間のパウロの視野を生々しく感じさせている。

このストレイトに近いウマイア・モスクのはずれに、ハーリスの一家が移つたハミディア・バザールがある。千夜一夜物語の頃から伝わる市場で、黄土色の二階家が軒を争つてといつよりは、一本の長屋がもう一本の長屋と五、六メートル幅の通路をへだてて向い合い、その石畳の通路の上をアーチ形の屋根がおおついている。だから浅草の仲店や道頓堀の名店街を思い浮かべれば、およその見当はつくのだが、鉄格子のはまつた短冊形の窓を一枚おきにうがつた二階の壁や、軒下一杯に吊るされた品



物の雑然としたたたずまいに、かえつて生活のかげりとにぎわいを象眼したような古い歴史を感じさせる。

ハーリスの一家は、当初、この鉄格子のはまつた薄暗い二階に雑居していたが、長い間の生活には耐えられず、市の北に横たわるアンタイ・レバノン山脈の山裾に向ってはい上がつていく労働者街の一隅に一戸を借りた。そこから、父と叔父たちはスクに通い、ハーリスはシリア大学の近くに立つ高校へ通学し始めた。

ハーリスは、算数得意としたが、マアツリー先生の教える心理学も、特に好きな科目の一つだった。先生は、焦茶色のりつぱな口ひげと、所々金色に光るこわそな顎ひげをたくわえているが、特徴的なのは、その茂みに真直に立つ鼻梁と、その上に頭柱のように張り出した眉の線だった。眼は、そこに巣をかけた鷹のように鋭いが、ときには雛の目のようにやさしく、ほんやりしていた。ある日のこと、先生は生徒たちに宿題を課した。

「プラトンは、人間にとつて慣習をもたないことが最も良い慣習であるとのべているが、これについて諸君はどう考えるか、作文を書いて来たまえ」というのだった。

ハーリスは、家に帰つて、二階窓ぎわの古机に向つてすわり、もうすでにだいぶ瞼み跡のあるペンの頭をくわえながら窓外眺めた。溶岩におおわれた薄紫色の山がこんもりと獸の背のように横たわるその山裾には、同じかつこうの四角い二階家が白い小石のようにちらばつてゐる。

……人間は、いつからか、この山の裾野に家を建てて住んでいる。なぜそうしたかといえば、慣習によつてである。そして、自分の家の立つ山の裾野も、永遠の昔からそこにあつたように感じている。しかし、山だってそこに生成したものである。それが時間を経るに従つて、そこに在ることが地球の慣習となつたのだ。ただ、慣習が、時間の长短に応じて溶岩のように固いか、家の壁のようにもろいかの差があるにすぎない。そうだ、すべての存在は、慣習にすぎないのだ。人間自体がそうなのだ：

ハーリスは、そう結論を下してから、それを自分のこれまでの生活に照らし合わせてみた。自分の生活中で、あの山のように頑強にそびえていたと思うもの、それは、アッラーとコーランへの信仰である。しかし、自分はどうしてアッラーを信じたかといえば、論理によつてではない。毎日礼拝をして、コーランを唱えることによつてである。なぜと考える以前から朝暗いうちに起きて、父に連れられ

れて赤壁のモスクへ行き、顔と手足を洗つてミヒラーブに向い、コーランの文句を唱えた。つまり、慣習だったのである。こう考えたとき、ハーリスは、

「人間は、慣習の産物である。したがつて、慣習を否定することは、人間を否定することであり、自己をも否定することである」

と、先の減つたペンにインクを浸して、虫喰い跡のようなアラビア文字を走らせた。

マアツリー先生は、それから一月後の心理学の時間に皆から集めておいた作文の束を教卓におき、その前にすわつて、頬の中央でぜんまいのように巻いている口ひげの先を左手の指でよじりながら、やおごそかな声で呼んだ。

「アブドウーラ・ハーリス君。君は、この作文を自分で書いたのだね」

「はい、先生、自分で書きました」

ハーリスは、少し侮辱されたような気がして、頬に一瞬、朱の網を走らせた。

「ふむ。自分で書いたとしても、何かを読んだろう。そして、一部はそれを写しはしなかつたかね」

「いいえ、先生、何も読みませんでした」

ハーリスの頬は赤く燃え上がつた。しかし、それは侮辱感から誇りに転化した感情が、熟れたざくろのようにつやつやと輝いたのである。マアツリー先生のひげを逃れた部分の頬もそれに染まつたかのようになつた。

「ふん、それはすばらしい。諸君、諸君はバスラという町を地理で習つたろう。ユーフラテス川がペルシア湾に注ぐ少し手前の川岸にある町だ。七世紀、ウマイア朝のカリフ、オマールの時代に我々の先祖たちが建設した。船乗りシンドバッドも、七回の航海をすべてこの港から出港したことになつてゐる。九世紀の頃、この町にジャーヒズという哲学者がいた。諸君もわかるだろうが、これは出自金という仇名で、本名はアブー・オスマーン・アムル・イブン・バハルという。家が貧乏だったから、少年の頃バスラの町で魚売りをしていたが、恐るべき天才児で、ムウタジラ派の神学思想とアリストテレス哲学を学び、自分独自の哲学を構築した。ハーリス君、君が書いたことと、その論法が、このジャーヒズにそつくりなのだ。いやいや、君が出自金だと云う訳では決してない」

マアツリー先生が、あわてて首を振つてこう付け加えたので、クラス中の生徒が、やせた頬の上に落つこちそうに大きな目玉をのせたハーリスを振り返つて、にぎやかに笑つた。

第12章 ダマスカスとプラトン

「君の書いたのを読んで見よう。……我々が善を習得するのは、慣習と練習によつてである。善の基礎をなすものは慣習であつて、我々は無意識にそれをくり返しているうちに習得するのであり、また、音楽家が音楽を習うようにそれを練習するのである。しかし、この他に、我々を善に駆り立てるものの中には、何か自然的なもの、つまり欲求がなければならない。しかし、欲求は我々を同時にまた悪へと駆り立てる。それをどちらに駆り立てるかを判断するのが理性である。しかし、理性は何によつて善悪を判断するのか。やはり、慣習によつてではなかろうか……ふーむ」

マアツリー先生は、そこまで読むと、唸り声をあげ、顎ひげごとハーリスの作文にのめりこんでいた。

「我が校に、初めてムウタジラ派の」とく自分の思考で独立して、自由に考える生徒が生まれたのだ。しかも、それはシリア人の中にではなく、国を追われたパレスチナ人の中にだ」

先生は、そうつぶやくと、一瞬、離のようなやさしい目でハーリスを眺め、念のため別な課題を彼にだけ与え、次週までに書いてくるように言つた。そのとき、おきぎりにされて退屈し、消しゴムの屑を投げ合つたり、隣の頬を指でつつかい棒したりして騒然としてきたクラスの窓ガラスに、雨滴がぽつぽつ貼りつき、達者な筆致でアラビア文字を書き始めた。そよ風が鳥の言葉を写せば、白雲は水したたらせ、文字を書く……」

「人間とその生活は、慣習の産物である」という結論を引き出したのは、マアツリー先生の、いや、もしほんとうにプラトンがそう言つたとすれば、プラトンの仕掛けた知的戯であつたかも知れない。プラトンによれば、人間とは、一筋の光が差しこんでいる地下牢に子供の頃から首と足を鎖につながれて生きている囚人だつた。彼らには、地下牢の前を入口に向つて斜めに登つていく道の壁しか見えない。その壁には、囚人たちの背後にある炬火の明りで、色々な物を運んでゆく人間たちの影が、人形芝居の人形のように映つてゐる。その影が「我々自身」なのだつた。したがつて、我々が眞のイヤを見るためには、肉体の鎖を断ち切つて、我々自身を自由にしなければならないのである。ハーリスによるプラトンの命題の否定は、巧妙にこの結論に彼を追いこんだのであつた。

ハーリスは、しだいにスフィンクスのようになつていつた。彼は、慣習的なものをいつさい否定し始めていた。というよりは、それは祖国という地盤を失うことによつてみずから崩れつつあつたのだが。

かつてあれほど熱心に読み、かつ唱えていたコーラン。その中における神、国家、社会における人と人の関係、自分……。しかし、ハーリスがいかに否定しようとも、否定できないものが二つ残つた。それは、どんな苦境にあっても独立を守り抜いていく、そしてコーランを仰々しくは人には説かないが、その一句一句を彫像のようく刻みこんでいる父の姿だつた。それから……」

ハーリスがシリアで高校二年生となつた頃、すなわち、一九四九年の九月には、約七十三万人のパレスチナ難民が、レバノン、シリア、ガザ、ヨルダン、イラク、エジプトに散らばつていたが、シリアには七万五千人、ヨルダン川の西岸には二十八万人が、テントや泥づくりの家につめこまれていた。特に、ヨルダン川西岸の難民たちは、眼下にふるさとの町や、村や、畑を見下ろしていた。彼らの多くは、何度もかつての自分の家や畑にもどろうとしたが、これを無償で没収したイスラエルの兵士たちに、そのつど情け容赦ない銃弾の雨を浴びせられ、命からがら逃げ帰つてくるのだつた。こうして難民キャンプで、飢えながら希望のない亡国の生活を送つてゐる同胞と、自分も追われた故郷の町サファードを思い出すとき、懷疑にけわしくなつたハーリスの頬を一筋の涙が伝わるのだつた。

第12章 ダマスカスとプラトン

第十二章 敵はどこにいるか

ある夏の日の午後のことである。ハーリスは、肝炎にかかつてダマスカス市内の某病院に入院した。マアツリー先生を見舞つたおり、見たくないものを見てしまつた。先生の病室を探して、埃っぽい廊下を右にいき左に曲りしているうちに、あやまつて小児科の大部屋にまぎれこんでしまつたのである。そこに二列に並んでいる白塗りの鉄枠の小さなベッドの一つに、異様なものがつまんで捨てられた。それには、ひからびて、骨の上に皮をかぶつているだけの幼児である。最初は死んでいるのかと思つたが、しぶうちわの骨のように肋骨のあらわれた胸がかすかに上下しているし、大きく一杯に見開いた目は、死の拒絶するような光とはちがう潤みをおびている。そして、ベッドのかたわらのスタンドに逆さに吊るされている大きな丸瓶の口からゴム管のがびて、黒い細長い蛇のようにその子の体を這い、小さな鼻孔にむりやりにしのびこんでいるのだった。

手足は胎児のように折り曲げられて、がらのようである。それよりも鳥に似ているのは、ハーリスの立つている通路に向つてむき出された臀部のありさまだつた。尻の両側の肉が全くこそげ落ちていいために、人間に特有なやさしい谷間が消え、羽毛をむしられた鳥の尾部そつくりの形をしている。そして、その下に、しわでひつたるんだ色あせた女の子の裂け目があつた。

釘づけされたハーリスの背後から、大柄な白衣の看護婦がスタンドに近寄り、瓶の口のぐあいを調べてから、ハーリスの方を向いて、両手を腰にあてがい、濃い眉をひそめてつぶやいた。

「よく見ておきなさい。

難民キャンプの子だよ。母親が栄養失調だから、この子もこんなになつちやつた」

看護婦はそういうと、ハーリスの方に身を乗り出してその耳元で両手をラッパにし、こするような声でささやいた。

「何も知らないでいるけどね。この子の母親は三日前にキャンプで死んでいたんだ。病氣の上、他

に稼ぎ手がないもんだからね。国連の配給食糧なんか、一ヵ月分が三日で失くなつてしまふ。いいかい、國だけは失くさないでおくれよ」

いつのまにか太い胸声に返つた看護婦は、鼻先に人差し指を立て、二度三度その先を振つて見せた。ハーリスは、うつむいて逃げるようその部屋を出た。廊下の窓から、入り口を受けてあわび貝の裏のようにつやをおびた雲が見えた。それを見上げたとき、彼の目の縁から、光る水玉が周囲の青空に散つた。ハーリスは、悲しみというよりは、深い森を抜け出たような感動をおぼえた。

マアツリー先生の病室は、小児科病棟の廊下の突きあたりを右に折れた、またその突きあたりにあつた。浅葱色のペンキを塗つたドアをノックすると、先生獨得の余韻のある低い返事が聞こえた。ドアをそつと開けると、小さい個室の真中におかれたベッドの上に、青い縞柄のパジャマを着た先生があぐらをかいてすわつていた。左手は読みかけの部厚い書物を白いカバーをかけた毛布の上に伏せ、右手は膝に片肘突いて指先でひげの尖端をつまんでいる。そのしぐさは、ちょうど自分が左手をびんに伸ばして頭をかく、それと同じ種類のものではないかと、ふとハーリスは思った。

「いよいよ、ハーリスか。よく来てくれたな」

先生は、頬の空地を仄赤く染めて、「まあ、すわれ」と枕元の壁ぎわにある木の椅子を剛いあごひげの先で差した。ハーリスは「はい」と返事して、椅子の背の両脇をもつて運び、尻の形にくり抜いてあるシートのくぼみに腰を下ろした。

「先生、体のお加減はいかがですか」

と、ハーリスがいくぶん黒味がかつた産毛のようなものの光る口元をぎこちなく動かしてたずねると、「うーむ、万病は魂の病いであるとプラトンは言つたが、わしもその口かも知れない」

マアツリー先生はそう言つて、ふたたび、ひげの先に手を伸ばした。

「心理学の先生でも、魂を痛むことがあるのですか、先生」

ハーリスが目玉をくるりと回して反問すると、先生はベッドの脇の壁に真四角にうがたれた窓の外に目を転じて、次のように答えた。

「あるとも、いや、おおありだ。わしの考えでは、心理学者は自分の魂だけでなく、他人の魂をも病まねばならないのだ。ハーリス君、わしは、君たちパレスチナ難民を見ていて心が痛む。いや、それ以上に、そういう同胞の苦海を見ていて、団結してこれを救うことのできないアラブの魂の分裂と



その葛藤に胸を痛めざるをえないのだ。もつとも、わしの学説によると、分裂と凝集のくり返しは事物の一般的法則であり、偏執狂と分裂症は裏表なのだが……」

と前置きして、マアツリー先生がハーリスに対してもう一時間半にわたつてふるつた熱弁に、若干著者の私見をまじえて語ると、次のようなことになる。

先生によれば、パレスチナ戦争における敗北の真の原因是、パレスチナを救うために進攻したアラブ諸国の軍隊に統一と連帶が全く欠けていたことであり、それは、アラブ諸国の近代化がおくれ、各國が自分の利益しか考えない封建的領主たちに支配されているためである。たとえば、パレスチナにおいても、フセイニー家とナシャーシビー家の二つの名家があつて、あの村は何家の系統という風に両家が家父長的に全土を支配していた。フセイニー家は反英反シオニストであり、後年のPLO議長ヤセル・アラファトはこの系統に属する。一方、ナシャーシビー家はむしろ対英協調派であり、反シオニストの色彩も薄く、隣国のトランスクルダーン国王、アブドウラとも仲が良かつた。アブドウラは、かねてからパレスチナを支配下におく野心を抱いており、パレスチナ戦争が始まって、ハーリスの故郷サファードの町がイスラエル軍によって攻撃されている最中、再三にわたりベンギリオンに密使を送り、ゴルダ・メイア女史との会談を申し入れている。そして、サファードが陥落した日に、ゴルダ女史はベンギリオンの下に帰つて、次のように報告した。

「私はアブドウラと友好的に話し合いました。我々が相互に満足のいく協定をつくるということに彼も異存ありません。ユダヤ地区に自治権を認めた統一国家を作り、一年後にアブドウラがアラブ地区を引き継ぐというのが、彼の案です」（注1）

この頃、名目上のパレスチナ政府の主席となつたフセイニーの指揮下にガザから進攻したエジプト軍は、テルアビブの南方三十キロのアシュドドでイスラエル軍に反撃され、ファルーガの三角地帯で重圏に陥っていた。そこからわずか数キロの地点に陣を張つていたアブドウラの正規軍であるアラブ軍団が、これを見て見ぬ振りしたのはいうまでもない。

このとき、塹壕の中にいたナセル少佐は、硝煙に黒ずんだ手負いの獅子のような形相で、仲間の青年将校たちに激しい怒りをぶちまけた。

「我々は全く準備せぬ戦いの中に飛びこみ、砲撃され、包囲されてしまった。我々は、砲火の下、武器も弾薬もなく、祖国にはびこる野望と陰謀と利己主義との犠牲にさらされている」（注2）と、こ

う語るナセルの肌色の軍服はほうたいの下から滲み出る血に汚れ、仲間の自由将校団の多くも傷ついたり、ぼろ切れのようすに塹壕の内外に投げ出されていた。これでは、まるでファルーカーの厄介ばかりではないか。この弾の出ない銃を見ろ、あのえんこした装甲車を見ろ、これは玩具の軍隊ではないか。これが、カイロの宫廷でファルーカーが好色の玩具を集め、私腹をこやしてきた見返りなのだ。

「ここで、今我々がさらされている事態、それは、エジプトの日常性の反映に他ならない。真に戦

火を交えるべきはここではなく、我々の祖国においてなのだ」

このナセル少佐の言葉は、ひとりエジプト軍人の戦場における感慨ではなかつた。同じくパレスチナ戦争に参加した、のちのレバノン共和国大統領、シェハブ大佐、イラクで王制を倒し、共和国の首相となつたカセム大佐らのひとしく味わさせられた屈辱感であり、危機意識だつた。

なお、ナセル少佐の名譽のためにつけ加えておくと、イスラエル軍はこのアシュドドでやつとのことでエジプト軍の北進を食い止めたと、ベンギリオン首相が回想していることである。

「我々はアシュード攻撃に主力を集中した。攻撃は失敗したが、エジプト軍の北方進撃は食いつることはできた。エジプト軍はアシュード周辺に塹壕を掘り、その後背地域を掃討した。六月七日、彼らはニツアニム・キブツを攻撃した。このキブツは百四十人が防衛していたが、その半分は居住者で、残りはジバチ旅団第三大隊だつた。所持する武器といえば、軽火器とブレン機関銃四丁、臼砲一門にすぎなかつた。これに対するエジプト軍は、歩兵一大隊、戦車隊一小隊、装甲車一小隊、二十五ポンド砲兵中隊、それに対戦車砲隊を投入した。敵の爆撃は、六月六日の夜いつぱい続けられた」（注3）そして、キブツは占領された。まだこの時点では、イスラエルも苦しかつたのである。しかも語りづけたが、急にその一方の手でひ腹を抱えこむように押えて身をかがめ、沈黙した。それ

第13章 敵はどこにいるか

「我々が敗北した主な原因は、ユダヤ移民社会が科学的であり、団結していたにもかかわらず、アラブ世界が退廃しておくれていたからだと、わしは思う。そこで、我々はアラブ世界の科学的技術的ネッサンスを行わねばならないという結論に達した。そこでだ、ハーリス君、君は、もはやわしの単なる生徒ではなく、友人の一人として考へてもらいたいんだが、わしは友人たちといつしよにやがて一定の明確な綱領をもつアラブ民族主義運動（ANM）を発足させることに決めたのだ」マアツリー先生は、ここまで宙に飛んでいる蚊をつかまえるようなしなぎさを両手で交互にまじえながら語りづけたが、急にその一方の手でひ腹を抱えこむように押えて身をかがめ、沈黙した。それ

から、そのままの姿勢で上目づかいに獲物を探す目つきでハーリスの大きな瞳の中をのぞきこんだ。しかし、その中は、朝霧の去つた荒野のように平静で先生の探している獲物の影はどこにも見あたらなかつた。

「先生、ぼくは、いつぞやの作文で人間は慣習の産物であると書きました。そして、慣習を否定することは人間性を否定することだと主張しました。しかし、現にぼくらパレスチナ人の慣習は否定されつたり、人間性もまた否定されつたりします。そこで、他者によつて否定されるのでなく、みずから慣習を否定していくたとき、その否定する主体としての自分は何者か、そして否定し切れないものとして何が残るかを確認したいのです。ぼくは、コーランを含むいっさいの宗教を否定しました。ぼくがパレスチナ人である、いや、アラブ人であるということさえ否定しました。そのとき、ぼくに残されたのは、純粋な個我としての人間です。ぼくはそれでもつて現実の中を生きていこうと思いました。しかしそのとき、まだ否定しなければならないたいせつなものが横たわっていることに気づきました。それは、純粋な個我を支えている日常性です。つまり、ぼくは父の働きによつて生き、慣習によつて高等学校へ通わされているのです。この日常性を否定しなければ純粋な個我というのは幻影にすぎないと気づいたのです。そこで先生、ぼくは高校をやめて、働くことに決心しました」

ハーリスが膝の上で両手を羽交いに組み、熱い潤みを目の縁にためて、ここ数カ月間、考え抜いて

きたことを話すと、マアツリー先生は脇腹を押えてかがみこんだまま頭を上下にうねらして合槌を打つた。白いカーテンが吹き上り、木の葉を薫じた風を開け放たれた窓から室内に運んだ。

「高校をやめるといつたつて、あと半年で卒業じゃないか。君の家族にもうその話をしたのかね」「はい、話しました。母を含め、親類の大方は、おまえは気が狂つたのだろうと大反対しました。おまえの成績なら、まちがいなく大学へいける。そしていい所に就職すれば将来は保証されるのに何を今さらと、あきれられたり、ののしられたりしました。しかし、父とアミタイ叔父は反対しませんでした。父は、おまえの意志にしたがつて生きろ、仕事も自分のやりたい仕事をやってよい。それがほんとうに良心にしたがつての行動なら、アッラーのお導きであると申しました。有名なナショナリストであつたアミタイ叔父は、ハーリスの将来を保証するといつたつて、だれが彼の精神の満足、即ち幸福を保証してやれるのだ。彼自身の精神しかないではないか、といつて私をかばつてくれました」

マアツリー先生は、腹底から感嘆の唸り声をあげた。

「えらい。君のお父さんはえらいよ。父親たる者、だれだつて、君の父上のように俺に対したいと思う。それでいてできないのは、自分自身の生き方が真に独立していなかつたからだ。つまり、自身の中に甘さがあつて、それが息子の独立を妨げる結果になつてしまふのだ。……ただねえ、わしには、君に対して一つ忠告がある。自分を真に独立させていくために自分自身がまず働いてみる。その上に、自分の思想を構築していくことはたいへん、けつこうだ。しかし、その上でもう一度学問がしたいと思うときがきたら、ぜひこだわらずに学校へ帰つてきたまえ。いや、その前に友人としてぼくの所にたずねて来てくれたまえ」

「わかりました。マアツリー先生」

ベッドの上と椅子の膝から自然に二本の手が伸びて、宙でしつかりと握り合つた。茶色の剛い毛の生えた手は、きやしゃな手を包むように握りしめ、自らの力で小刻みに震え、みづめ合つた二人の目に光るもののが滲み出た。先生のそれがやや大きく見えたのは、窓外のモスクの金色の円屋根がそこに映つていたためかも知れない。

注1 「ベングリオン回想録」

注2 ブノアメシャン著 犬田口義郎訳「オリエントの嵐」昭和筑摩書房

注3 上掲「ベングリオン回想録」

第13章 敵はどこにいるか

第十四章 難民の教師とその弟子

ハーリスは、マアツリー先生の口利きで、ダマスカス市内の小学校に代用教員としての職を得た。彼は、教壇で校長先生から担任の生徒たちに紹介されたとき、両肩の間に首が埋まつて見えるほど固くなっていた。そんな新任の先生を見て、

「やあ、エジプトの木彫人形みてえにコチコチだ」

と頭の頂から出る声を放つた者がいる。教室に笑いが広がつたが、声を放つた者はその笑いの波間に没し去つている。だいたい悪童というものは、魔術のようなものを身につけていて、口の裾を薄く開き、腹話術のように先生に気づかれないでまぜつ返したり、先生が黒板に向つて何か書き出した瞬間に机の中から菓子パンやすもをすばやく取り出して一噛りし、口を開かさないでそれを舌の上でとろかしたりするくらいはぞうさない。先生の方もさるもので、声音で茶化した奴を認知したり、黒板に向つたと見せて、ばね仕掛けのようにふり返り、大口を開けて一噛りした瞬間の生徒を険悪な形相でにらみつけたりする。なかには、ふり向きざまチョークをつぶてのように投げて、犯人の額や鼻を打つことを楽しみにしている先生もいる。

校長先生も若い頃からいたずらの犯人を発見するのにすこぶるかけていた。で、たちまちにして「エジプト人形」と巧みに形容した生徒を見つけ、わざとあらぬ方を眺めながらへっぴり腰のがに股でゆっくりと机の間を歩いてゆくと、いきなり犯人の耳をつかんで釣り上げた。

「こりや、ユーセフ、貴様だな、けしからんことをぬかしおつたのは、口を開かさんでも、貴様の声には糸がついていて、わしの耳にびんびんとひびくんじゃ」

耳を釣り上げられたユーセフは、校長の利き腕をつかんで痛みを緩和しながら、大きさに口をひんまげて泣き声をあげた。

「いてててて。先生、ごめんよ。おら何もいわねえのに、口がすべったんだ。校長先生、マホメット様、アラーの神様、お許しください」

ハーリスは、その名前を聞き、その顔を見たときはつとした。名前のみか、額や頬に泥を塗りつけ、目玉をひんむいているその表情までが、サファードの小学校の校庭で爆死していた親友のユーセフにそつくりだつたからである。直感で、その子が故郷を逃れてきたパレスチナ人の子にちがいないと思つた。彼はひかれるように数歩近寄ると、仁王様のようになつていたずら子僧を釣り上げている校長に向つていた。

「校長先生、どうかお許しください。ユーセフは今日から私の担任です。これからは、私が気をつけますから、どうかかんべんしてやつてください」

校長は、ハーリスとユーセフの顔を交互に一べつしてから、つかんでいた耳をひとひねりして放した。

「いいかい。ハーリス君。この子は君と同じパレスチナの子じやが、だからといって甘やかしてはならんよ。人間はどんな境遇にあっても決して甘やかしてはならん。善を教えこむのは厳しい習練によつてのみ可能じや、ということをしつかり頭に入れておいてくれたまえ」

「はい、わかりました。校長先生」

ハーリスはそう答えるのとくらはらに、赤く熟れた耳を片手でしきりとさすつて少年の瞳をやさしい目差しで眺めた。そのいたずらっぽい瞳の中に、彼は望郷のかぎりを見る思いがした。

その時間は算数の授業だつた。そのクラスでは初めての割り算を教えたが、ハーリスが問題を出すと、そのつどだれよりも早くユーセフがいせいよく手をあげて答を出した。これには、クラス中の生徒たちが皆あつけにとられたような顔をして、ユーセフの方をふりむくので、ハーリスは、彼が日頃とだいぶできが違うのだということをすぐに察した。できの悪い子供というものには、どこか薄ぼんやりした仕方のなさそうな表情があつて、それとなくわかるのだが、この日のユーセフは、さびしい町の夕暮れの街路燈のように光芒を放つて、皆の注目を浴びたのである。割り切れる数はいわずもがな、43割る6というような割り切れない数でも、暗算でさつと手を上げる。ただ答え方が、

「そいつは7こずつで、1こあまりだ。でも結局は、あまることはねえな」

といふぐあいに少し風変りだった。

ハーリスは、こはつけなくてよい、と注意したのち、

「ユーセフ、君はずいぶん算数ができるね」



と賞めてやると、少年は肘を突き出して、手の甲で鼻をこすりあげながらいった。

「違うんだ。先生、おれはただその割り算だけ得意なんだ」

「ほう、なぜ割り算だけ得意なんだ」

「だって、割り算はよつちゅうやつてきたもの。わからねえかなあ、先生、そのお、おれたちは

割り算ばかりして生きてきたんだ」

少年は、今度はもう一方の手で鼻を反対方向にこすりあげてから、やや気取った表情を作った。そのとたん、ハーリスは、暗室の窓が開いて窓外の風景をかいだみる思いがした。

「君は、兄弟何人いる？」

「八人だ。もつとも、そのうち一番ちいせえのはチベリアスから逃げてくるとき死んじまい、一番上の兄貴はつい最近姿をくらましちやつたけどよう」

ユーセフはそう答えて、長いまつげを垂れた。ハーリスの脳裏にUNRWA（国連救済機関）の前にバケツや、空罐をぶら下げて行列に立つ人群や、狭い部屋の中で食物を分ける母親の手許を食い入るよう見つめる子供たちの風景が映つた。当時のUNRWAの避難民に支出する年間一人あたりの経費は、約三十ドル（一万八千円）程度だった。これを三百六十五で割ると四十九円とあまり少々であるが、結局あることはない。

クラスの中には、ユーセフだけでなく、他にパレスチナ人の子が三人いた。しかし、校長にいわれるまでもなく、ハーリスは、純粹な個我を足場として生きていこうとする自分の新しい立場からも、これらとシリア人の生徒たちとの間に区別を設けないようにした。もとはといえば、シリアも、パレスチナも、レバノンも、ヨルダンも、一九二〇年に成立した大シリア王国の一部で、その住民の大多数が同じアラビア語を話し、コーランを奉じているのだから、お互いの間にそれほどの違和感があるわけではない。しかし、たとえ西欧先進諸国の植民地経営の結果分裂させられたとはいえ、それぞれの国における支配者たちの間に一種の繩張り意識というものがあることは否めない。特に、自分が霸権をにぎつて統一を実現しようとする意欲をそれぞれが抱いており、マアツリー先生の興そうとしているアラブ民族主義運動（ANM）もこれを乗り越えようとする動きなのであった。しかし、クラスにおけるかぎりは、やはり霸権は腕力の強い者とか、勉強のできる者とかが自然ににぎつていくもので、差別される者は、腕っぷしも大したことない上にどこか冴えない雲を顔に浮かべている子供たち

である。

ハーリスが教え始めてから三月ほどもたつたある夏の日の午後のこと、頭と育ちの良さでクラスの一方の霸権をにぎつて、ハーリーンが、放課後、生徒たちが姿を見せなくなつた頃を見はからつて、職員室にたずねてきた。

「や、ハーリーン、何だね。ちょっと浮かない顔をしているじゃないか」

ハーリスは、両手を下げ、上目づかいで首をかしげて立つて机から上半身を振りむけた。ハーリーンは、そばかすのむらがる鼻筋にしわを寄せ、神妙な風情で口を開いた。

「先生、実はたいへんいいくことなのですがクラスの中で起きてはならないことが起きました」

「ほう、起きてはならないことは、いつたい何が起きたのかね」

ハーリスが、ハーリーンのもつて回つた言い方にさそわれて、つい舌のもつれるような反問をする

と、ハーリーンは顔をしかめてささやいた。

「恐しいことです。先生、イスラム教徒に起きてはならないことが起きたのです。つまり、その、盗難事件が発生したのです」

「何つ、盗難事件？」思わず頭をくり出したハーリスに、ハーリーンが語つたところはこうである。

彼は十日ほど前、母親に買ってもらった白いズック靴の上ばきを学校にもつてきてはきおろした。その日の放課後、工作の宿題を返されて荷が重くなつたので、上ばきを机に入れて帰つたら、明くる朝来てみるともうなかつたのである。おかげで、母親からまた新しい靴を買ってもらうために忍ぶべからざる侮辱的言辞を浴びねばならなかつた。ところが、昨日ユーセフが全く同じ清新いズックの靴をはいて登校した。そこで本来なら彼と遊ぶ意志をもたないのであるが、正義のためにあえてユーセフの得意とするレスリングごっこをし、片足にタックルして相手の股間に頭を差し入れ、その瞬間にズック靴を脱がしてその底を見た。そうしたら、やつぱりあつたというのである。

「何があつたのだね、ハーリーン」と、ハーリスがたずねると、

「その靴がぼくの物であるという証拠です。ぼくは、その靴底の内側にぼくの頭文字をインクで書いておきました。それが黒く塗りつぶされて、証拠いんめつしてある跡を確かめたのです。そういう

第14章 難民の教師とその弟子

しているうちに、ぼくはユーセフにバンドをつかまれて宙づりにされた上、大地にしかと叩きつけられて、あやうく鼻をつぶされそうでした

こういつて、ハールーンは高い鼻頭を五本の指でいたわるようにつまんだ。

明くる朝、第一時間目の授業の初め、ハーリスはよく女子大の先生がやるような何も見ない目でクラス全体の頭の上をどこおらずに眺め回したうえ、口を切った。

「皆さん、今日は少し不愉快なことから授業を始めなければなりません。実は、十日ほど前にハーリーンが新しい靴を机の中に入れて帰ったところ、明くる朝来てみたら、それがなくなっていたというのです。だれか心当たりのある者はいないかね。もちろん、ハールーンの思い違いということもある。どこか他の所で落したのかも知れない。いずれにしろ見かけたり、拾つたりした者がいたら、正直に申し出て欲しい」

さわづいていたクラスが一瞬しんとした。中には、前後左右を探照燈のように見回して、おれじやないぞと示威運動をしている者もいる。ユーセフはパンを一囁りしようとしたところを見つかったように大口を開けて、ハーリスの方を見つめていた。そのうち、ハールーンの家来格にあたるアハマッドが「はい」とおごそかな声で発言を求めて立ち上がった。

「ぼくはこういうこといいたくないけどよ、でも、コーランに嘘をつくものは、舌をちん切ると書いてあるそうだから、いうけどよ、先生、ひょっとするとユーセフがはいている白い靴がハールーングのだとおれは思う」

というなり、アハマッドはくずおれるように着席して、肩の先で大きな吐息をした。ユーセフは大口を開けたまま首をねじつて、アハマッドの方を眺めている。

「ユーセフの靴が、ハールーンの靴だとどうしてわかったかね」

ハーリスが証人尋問をすると、

「それはよ、ユーセフの靴底にハールーンの頭文字を消した黒いしみがあるからです」

と、アハマッドは、コーランにいう「礼拝のときたいぎそこに腰を上げる者」のようにおずおず立ち上がり、狂った汽笛のように吠え出した。

「この靴はおれのものだ。おれが、バラダ川の護岸工事で毎夜石を運び、それで買ったんだ」

ユーセフはそこまでいうと、急に口を食いしばり、顔をひんまげて、嗚咽をこらえていた……。立ち上がり、狂った汽笛のように吠え出した。

「この靴はおれのものだ。おれが、バラダ川の護岸工事で毎夜石を運び、それで買ったんだ」

ユーセフはそこで君はよく授業中居眠りをしていたのだね」

「うるせえ、そんなこたあ、どうでもいい。重要なのは、この靴はおれのものだということだ。パレスチナがおれの故郷であるように、この靴はおれのものだ」

この言葉を聞いたとき、ハーリスは、自分の個我の胸底からも同じ汽笛のようなものが吹き上がつてくるのを感じた。そして、それを押さえようとしてしばらく絶句した。

「わかつた、ユーセフ。その靴がパレスチナのように確かに君のものなら、どんな目に遇つても、その靴をはいている。その靴を決して脱ぐんじゃないぞ。諸君、自分の力で獲得したものこそ、真に自分のものだ。靴も、そしてパレスチナも」

といったとき、不覚にも、ハーリスの視野がかきくもり、クラス全員の上にかぶさつていたにかわがぐにやぐにやと溶け出して、顔と顔がかきまざり、運動し始めた。

その日の夕暮れ、ハーリスが帰宅して居間の戸を開けると、砂漠の熱風のようなものが、顔に吹きかかつた。父と母と叔父たちがテーブルをかこんですわつていた。ただ一人、アミタイ叔父さんだけが突立つていて、小さい紙切れを目前にかかげ、空いている方の掌を泳がせながら詩を朗誦していた。

「アブドウーラの血が、
腐つたぶどうのような裏切りの色が、
どうを叩いたのは、パレスチナの息子。」

第14章 難民の教師とその弟子

アブドウーラの血が、
腐つたぶどうのような裏切りの色が、
どうを叩いたのは、パレスチナの息子。



弾丸は はればれした青年のコーランだつた。

『正義の者はかしこにて飲むだろう
密封されていた芳醇なぶどう酒を』

その前日、一九五一年七月二十三日、イスラエルとの密約の下にエルサレム旧市とヨルダン川西岸を併合したヨルダン国王アブドゥーラは、エルサレムにあるアルクサ寺院で金曜日の礼拝を終えたとき、柱の陰にかくれていたパレスチナ人の青年のピストルに倒れたのだつた。

第十五章 死者は帰れない

ユーセフが教室に姿を見せなくなつてから、はや一週間になる。白いズック靴の盗難事件で学校にいやけがさして、それで来なくなつたとも思えない。なぜなら、あの事件後も、ユーセフはそれこそ彼が泣きながら形容したように「パレスチナがおれの故郷であるようにおれの物である」白いズック靴をいばつて学校にはいてきていたし、ハールーンの方も、明確な証拠もないのにユーセフを疑つたことをすまなく思う気持があつて、今度は証拠を発見するためのトリックではなく、ユーセフに好意を示すためにレスリングを申し込んでは叩きつけられていたからである。

といつても、わざと負けていたのではない。母親の庇護の下で青白き秀才に育てられた彼と、護岸工事でモッコをかつぐユーセフとの間には、大きな石ころほどの体力の差があつたのである。ハールーンの方には、そういう物理的な力そのものを賛美する気持があつたし、ユーセフの方には、ショーウィンドの中の人形がとつぜん手のとどく所にあらわれたような面映ゆい感があつた。そのせいか、たまに足を取られてひっくり返されることがあつても、顔を真赤にして喜ぶハールーンを見ると、まんざらでもない気がするのだった。

そういうわけで、ユーセフが学校に姿を見せなくなつて、真先に心配したのはハールーンだつた。
「先生、ユーセフはどうしたのでしょうか。また働いているのでしょうか。それとも病氣でもして

いるのでしょうか」

とハールーンにいわれて、ハーリス先生もうなずいた。

「ぼくも心配していたところだ。今度、放課後、二人でユーセフの家をたずねてみよう」

そいつている矢先、ハーリスはある夕べ、ウマイヤ・モスクに近いバーラダ川の畔でばつたりユーセフにぐくわした。初めは別人かと思つた。なぜなら、洗いざらしたシャツの襟元のボタンを伊達に二つはずして、そこから顎をひねるように突き出しているいつものユーセフとちがい、その日の彼は、両胸にポケットのある草色の開襟服をきちんとまとつて眼を弾丸のように光させていたからであ

「ユーセフではないか」

「あつ、先生」

おどろいたようにそういつてから、白い歯を見せた顔はやっぱりユーセフだった。人なつっこい片えくぼが夕映えを浴びた頬に三日月形の陰を宿した。

「どうしたんだい、ユーセフ。ちつとも学校へ姿をあらわさないじやないか」

ハーリスがたしなめると、ユーセフは困ったように顔をゆがませ、頭をかいた。

「すいません、先生」

「いや、あやまる必要はないんだ。怒っているのではないんだから。ただどうして学校へこないのか説明してくれたまえ。まあ、そこにはわろう」

ハーリスは、赤や黄や紫色の光の破片を一杯にモザイクしている川の岸辺を顎でさして、あゆみかけた。ユーセフも上体だけハーリスの方に移しながら、とうわくして叫んだ。

「先生、おれ、今、悪いけどゆづくり話している暇ないんだ。おれ、今働いていて、おくれると罰くらうんだ。明日きっと学校へいつて話すよ」

そういうなり、ユーセフは、早足競争をやるように前のめりになつて、川岸づたいに去つていつた。しかし、明くる日も、その明くる日も、ユーセフは学校に姿をあらわさなかつた。ハーリスは裏切られたという気がして多少腹立たしさをおぼえながら、これには少しばかり仔細がありそうだと思いなおし、その日の放課後、ハールーンをともなつてユーセフの家をたずねた。学校に登録されている住所をたよりに、ウマイヤ・スク（市場）のはずれにある古い白煉瓦造りの密集した民家を一軒一軒のぞいてあるいたが、それらしい家は見当らなかつた。四つ辻で石蹴りをしているはだしの子供たちに向つて、

「だれか、ユーセフの家を知らないかい。パレスチナから来たユーセフの」と、ハーリスが声をかけると、縞柄の裾長いアツバツを膝まで垂らした坊主頭が、石をにぎつてふりあげていた手をおろし、あいている方の手の指を鼻の標的に突つこんでありむいた。

「隊長かい。隊長の家なら、あすこの、ほら、一番はじつこの家のそなまた向うのとりでだ」と答えて、鼻の中を一えぐりした指を抜いて、掌をさし出した。

「この乞食野郎」

脇に立つていたもう一人の坊主頭が、はだしの爪先で、その手を軽く蹴上げた。

それは、なるほど砦と呼ばれるのにふさわしい趣きの家だつた。つまり敵の砲火にさらされたように屋根が落ち、壁が崩れている煉瓦造りの廃屋だつたからである。ハーリスがハールーンと戸の立つていな玄関口をくぐると、頭の上には、野草を頂きのところどころに生やした壁に囲まれている四角い空と、その中に浮く綿雲があつた。ハーリスは、ふといちまつの虚脱感におそわれて一瞬ぼんやりしたが、壁の一隅にうがたれた戸に垂れている毛布の陰からけたたましい子供の泣き声が聞こえて、すぐ在我に立ち返つた。

「今日は」

ハーリスは、その戸がわりの毛布に向つて声を放つたが、返事がない。二度三度さらに呼びかけると、

「何だえ、せつかく子供が寝かけているのに」

という不機嫌そうな女の声が返つて、毛布の戸が裾から斜めにめくり上がり、白いチャドルを頭布にした渋茶色の女の顔がのぞいた。それは、暗がりの中におかれた置物のようにぼんやりしていて年かつこうの見当のつきがたい顔だつた。

「私は、ユーセフ君の学校のクラス担任をしているハーリスですが、ユーセフ君のお宅は……」

とハーリスが問い合わせたところで女は痛みをこらえるようなしわを顔の中にうごめかし、

「ああ、先生ですか。私はユーセフの母でございますが、また、あの子が何ぞ……」

といいながら毛布を背後に送つて、姿をあらわした。その胸にはちぢれた髪をおかっぱにした女の子らしいのが、親指を根元までしゃぶつて抱かれていた。

「いや、べつだん何をしたわけでもないのですが、ただ、ユーセフ君がこの頃ずつと学校に来ないものですから、どうしたのだろうと思つて、ここにいるハールーンといつしょに様子を見に来たのです」

ハーリスがそう用件を告げると、背後に神妙な顔をして立つていたハールーンも、合槌を打つて微笑を浮かべた。

第15章 死者は帰れない

「何もかも狂つてしまつたでござえます。先生、ユーセフの頭までが狂つてしまつたでござえます」と顔のしわから泣き声をしぶり出して、胸にかかえた女の子の濡れた頬に自分の頬をすり寄せながら語り出した。

それによると、ユーセフの一家は、チベリアスを逃げ出すときに、一家の長である大工のハツサンと別れ別れになってしまった。ハツサンは、中途から思い出して、生命の次にたいせつな大工道具を取りに家に引き返したまま消息を絶つたのである。一家は、ハツサンの身の上を案じつつ、同郷の人と浮草のようにもたれ合いながらダマスカスの難民キャンプに流れついた。以後これまで、母一人に七人の子株のついた大家族の生活を支えてきたのが、十七歳になる長男と十五歳になる次女の二人で、長男はダマスカスの大工に職人としてやどつてもらい、次女は食堂で給仕として働いて、一家の糊口をすすいできた。今住んでいる家は、長男のナイエフが仕事の途次、廃屋となっているのを見つけてきたもので、市内に仕事が多いことから、屋根の残つていた部分を何とか修復して、ここに移り住んだものである。

ナイエフは、背丈は人一倍すぐれ、顔立ちも父親似で、よく張った黒い眉の下にトルコ玉のように青い大きな目を光らせたなかなかの男前であるが、気立ては少しも荒いところがなく、一口目には、「父つあんはどうしているかな。生きているのか死んでいるのか、何とかしてつきとめにやあ。生きているものなら、ぜひ連れてきて、一しょに大工をやって暮らしたい」と語っていたそうである。大工の仕事は昼間しかやらないはずなのに毎夜おそらく帰つて来たのは、仕事の都合だらうぐらいに深く氣にも止めていなかつたが、後から考えてみると、いろいろな手づるを求めて、父親の消息をたずねていたのかも知れない。

今から二月ほど前のことである。ナイエフは、ある朝、母親にいくらかまとまつた金を渡し、「母ちゃん、しばらくの間、ちょっと遠くへ仕事しに出かけてくるからな。レバノンの方だから、ひよつとすると父つあんの消息もわかるかも知れないよ」

といつて、悲しいとも嬉しいともとれる謎めいた微笑を頬に浮かべ、その頬を甘えるように母親の頬にすり寄せてから出かけていった。それ以後、半月たつても一月たつても、何の音沙汰もない。母親は、思い立つと急に胸底が浮き上がるような不安を覚える。ことによると、今の当てのない根無し草の境遇にがまんできなくなつたせつかちな男たちのやつている「フェダーライン」(自分を犠牲にするくゆらしていた。そして母親がその前に立つてあいさつをすると椅子に腰かけたまま、二本の煙の管を吹き出して、

「やあ、これはナイエフのおつ母さん。息子はどうしたんだね。少しの間、暇をくれといったときり、煙のように消えちまつたじやないか。アラジンみたいに宝の山でも見つけて、大工仕事がいやになつたかね」

と、多少とがめるような口調のまじつた大声で叩くようにどなつた。とたんに、母親は、その場にしゃがみこみとなるほど膝頭がふるえ出すのをおぼえた。

それから三週間ほどして、ナイエフは帰つてきた。昼頃、母親が砦の中の居間にあぐらをかき、前においた厚板の上の練り粉を両腕を突っぱり掌の底でしごいていると、表に車の止まる軋みが聞こえ、「ここだ、ここだ」という男の声が彼女の耳に入つた。とつさに床から立ち上がり、両手を前掛けで拭き、戸口の毛布を払いのけ、青空を天井に頂く控えの間にすると、玄関口に黒っぽい背広を着た一人の若者が立つていた。若者の顔は、射すくめるような母親の視線を浴びると、空のように青ざめた。

「ナイエフのお母さんですね」

それだけかすれ声で言いおわると、頭をうなだれた。

「ナイエフ君をお連れしました」

日が雲間に没したらしく、急に室内が暗くなつて、薄ら寒くなつた。母親は起きている事の意味を知りながら、知ることをわざと拒むようにぼんやりと佇んでいた。

若者は一度玄関口から消えると、今度は背広の背中を前にしてうしろ向きに入ってきた。その突つ張った手の握り拳の中からもう一つずつ白い手が指の花弁を押し広げて生えていた。若者の背が通り過ぎると、硬直したナイエフの体と、その棒状の足を両手で釣った白髪まじりの男が姿をあらわした。母親は、無意識に自分の白いチャドルをはずして、控の間の床の上に敷いていた。若者の手によつてナイエフの頭がそつとそこに置かれ、腕の付け根がぎしぎしことて、万歳をしていた両手がむりやりに両脇に戻された。

「かわいそうに」

母親はそう叫ぶと、若者を押しのけるようにして、ナイエフの脇に膝を屈してすわりこんだ。天井の空がふたたび明るくなつて、斜めに射しこんだ日が、ナイエフの半開きになつたトルコ玉の色をした眼を光らせた。

「まあ、生きているよ、この子は。ナ、イ、エ、フ」

母親は猫なで声でそう呼ぶと、両手を伸ばしてナイエフの白いこめかみのあたりをはさみ、そのまま両頬の方にゆつくりとなでおろした。

「まあ、何て冷たい頬をしているんだろう、この子は。ナ、イ、エ、フ」

母親はもう一度その名を呼んだが、その声と両肩のあたりを激しい震えがおそいかつた。そして、声にならない慟哭が彼女の全身をゆすぶり始めた。

「ナイエフ君は、祖国パレスチナのために戦つて死にました。彼は、ぼくといつしょにガリラヤ地方に潜入して、あの地域の仲間たちと連絡を取り……」

若者がナイエフの血糊におおわれたシャツの胸に頬をこすりつけている母親の背に向つてふるえ声で語りかけると、母親は上半身をはね起こし、身をよじつて若者をにらみつけ、両眼から涙を散らして絶叫した。

「お黙り。死んで何が祖国だ、パレスチナだ。生きていれば帰る日もあるかも知れない。死んで、どこに帰るのさ。ナイエフを返しておくれ。ああ、ナイエフ」

第十六章 ガリラヤの湖^{うみ}

ナイエフの母のはりさけるような怒声を浴びて、若者は肩を落してうなだれた。それからおもむろに顔をあげた頬には光る筋がはつていた。

「お母さんのおっしゃるとおりです。死んだら故郷へ帰ることはできません。しかし、だれも死ななかつたら、生きている者は故郷へ帰ることができるでしようか。だれもがじつと根なし草の生活に耐えていれば、故郷に帰ることができるとどうか。たくさんの人々が、陸に打ち上げられた浮き草のようにしほんでいっています。お母さん、ぼくも、ナイエフ君も、乞食のような境遇におちぶれた百万の兄弟たちを、もう一度祖国へ連れもどすために戦わねばならないと考えたのです。それだけでなく、ナイエフ君はチベリアスで行方不明になつたお父さんを探し出そうとしたのです。そして、お父さんは見つかったのです」

こう若者が語気を強めて語つたとき、母親は半身を息子の固くなつた胸からはね起こし、瞳を一瞬光らせた。それは暗い森の沼に映つた日射しのようだつた。いつのまに帰つていたのか、戸口の壁に背中を貼りつけ、両拳をポケットに突つこんで若者の顔をにらみつけていたユーセフの瞳にも、その光は踊つた。

「えつ、父ちゃんが生きていたつて」

「そうだよ、君のお父さんは生きていたのだよ」

若者はユーセフの方をふりむいてゆつくりと微笑を上下してみせ、それからおもむろに語り出した。

……若者はズハイルと呼び、ガリラヤ湖の畔にあるカペナウムの出身の学生である。彼は、ナイエフと共にシリアル・イスラエル国境を深夜越えると、カペナウムに潜入して、町に残留していた知人と連絡をつけることができた。

カペナウムは、イエス・キリストが布教と数々の奇跡をおこなつた歴史的地方であり、町の人々がイエスの説教を受け入れなかつたために「ああ、カペナウムよ、汝は黄泉にまで落されるであろう」



トイエスが呪詛した町である。夜ひそかに知人の家に集まつたパレスチナ人たちの眉は、黄泉の国から出てきたと思われるほど暗かつた。食卓におかれた燭台の油が不気嫌につぶやいて出す焰の舌に顔半面をなぶらせながら、ズハイルは両手の拳を突き合わすようにして話した。その語氣で焰の舌がときおりはためいた。

「……人間は何でも失つて初めて、その失つた物の価値を知る。我々は失つて初めて、祖国を知つた。それがおやじの家であることを知つた。アラブの仲間たちは、火事で焼け出された人々を迎えるように我々にひさしを貸してくれている。しかし、我々が施しを受け、乞食のようにさまよつているかぎりは、彼らは、我々の家を建てなおしてやろうとは思はないだろう。我々は行動をしなければならない。おやじの家を建てなおすために、戦わねばならない」

人々は、唾を飲みこんだまま、声もあげずに聞き入つていた。そのくぼんだ眼窓の底には燈心のようなものがゆらめいていた。

カペナウムの人々は、マグダラ地方やチベリアスの町に連絡をとり、ズハイルとナイエフの訪れる先に有志の人々からなる小さな集会を準備してくれた。一人がカペナウムの有志の手引きでチベリアスの町に入つたのは、国境を突破してから七日目の夜だつた。ナイエフは、夜目にも故郷の町の肌ざわりを感じた。それは、ちょうど目をつむつて愛する女の顔をなでるようなあやしい感触だつた。中学生の頃、友だちといつしょに学校へ裸足で通いなれた道の石畳が彼の足裏をくすぐるような気がした。この道をもう少し家路へたどつた所の石塀には、いたずら者の弟のユーセフが描いた丸い人間の顔の落書きがあつたはずだ。しかし、そこへゆく手前の四つ角で一行は右に折れ、以前ここに住んでいたとき、研ぎ減つて三日月のようになつた剃刀でナイエフの頭をごしごしと剃つてくれた床屋の店先で、案内の男は足を止めた。男が、金網のよろい戸の下りた店の脇のくぐり戸を叩くと、しばらくして「だれかね」と中から低い返事がした。

「今晚は、仕立屋のフセインだよ。できあがつたからもつてきましたよ」

と、ことさらにのん気な口調で、案内の男が答えた。扉が内側に開いた。案内の男は背後の二人に顎をしゃくつて、自分はすばやく中に入った。

入つた所は、せつけん臭い闇だつた。奥の方にかすかにもれる薄明りで、先に立つ男の姿がくまどらされている。固い床を五、六歩進むと、奥の戸が開き、天井からぶら下がつた裸電球の下の机をかこて壁に押しつけられた父親は、

「おらあ、信じていた。アツラーのお力で必ずまた会えるつてな。必ずまた皆いつしょに暮らせるつてな」

と、頭のてっぺんに吹き抜けるような奇妙な声で言つた。

會議がすんだ後、ナイエフは、もう一度父親の節くれだつた両手を包み、笑いながら言つた。

「父つあん、母さんや、ユーセフたちがどんなに喜ぶか知れねえぞ。おれたちは、明日の朝早くダマスカスに向つてここを去つから、父つあんもいつしょに帰ろうよ」

それを聞くと、ナイエフの父親はめつきり白髪のふえた頭をねじつて、床に何かを探すような目つきをした。それからナイエフの鼻先に顔をもどして言つた。

「うんにや、ナイエフ、おらはここに留まるだ。いいか、ナイエフ、心得ちげえをしちゃなんねえぞ。帰つてくるのはおまえたちだ。ここへもどるのが、すなわち帰るつていうことだ。なあに、そんな先のことじやあるめえ。父ちゃんはここにいて、おまえたちが帰つても困らねえよう家をなしておくとすべえ」

こう父親にいわれてみると、ナイエフには、そのいちいちが反駁することのできないもつともなことに思われた。「ちげえね、父ちゃんのいうとおりだ」と、ナイエフは悲しげな光を目に浮かべて微笑んだ。それは、その瞬間を心に焼きつけようとする、こびりつくような目の色だつた。

明くる朝、まだ暗いうちに、ナイエフとズハイルは、山の尾根にそつて縦走するエリコ街道を北に向つて引き返した。ナイエフが肩にさげたズックの袋の中には、父親が徹夜で焼いてくれた丸パンと、羊の焼肉が新聞紙にくるんで入つていて、暖かみを腰に伝えた。一人の若者の羽の生えたような足は、途中まで送つてきたナイエフの父も、その背後のチベリアスの町並みも、つかのまに暁の闇の中に葬り去つた。街道が上りになると、右手に立ち並ぶオリーブやレバノン杉がしだいに斜面をくだつていつて、その底には、ガリラヤの海が鈍色の水で広々と歴史の墳墓をおおつていた。イエスと弟子たち

が小舟に乗つてカペナウムへ渡るとき、にわかに嵐が起つて波が荒れ騒ぎ、弟子たちが恐れおののいている。ひとりまどろんでいたイエスが目をさめし、風浪を叱つてそれを鎮めたといわれるが、ガリラヤの海はちょうどそのときのように怪しく静かで、湖面には白い薄い月とやがてくる明日の光に染まつたのか、あじさい色の煙のようなちぎれ雲が映つていた。

この地方における組織活動が順調に終つたせいか、ズハイルは歩きながら浮き浮きした調子でこんなことをナイエフにたずねた。

「ナイエフ、君のお父さんは、アツラーのお力でまた必ずいつしょに暮せるようになるといつていたけれど、君はアツラーを信じているかい？」

ナイエフは、とうとつな質問にまごついて、考えをしばり出すように唸つたが、いくら唸つてもうまい考えは出てこないとあきらめ、寝ぼけたような声で答えた。

「信じるか信じないかって、そんなこと考えたことがねえな。モスクへいけば自然にお祈りするしよ、今、ああやつて、湖の上の空が紫色からばら色に変つてきただろう。あれは、アツラーの意志で日が昇るからだつてことも疑つたことはねえな。アツラーの仕業じゃないといつたところで、じゃあ、いつたい日はなぜ昇るのかつて答えられるわけじゃねえしよ」

それを聞くと、ズハイルは「なるほどなあ」と感心したような声を放つた。

「ぼくら学生あがりは、簡単に宗教を否定するが、その否定したあとに何をはめこんでいいのか、わからないというところがある。そこにつも空洞みたいなものが残つて、隙間風がときおり吹くんだ。ところが君たちは、否定してもしようがないものは否定しないで、それを生かしている。ごまかされながら、相手の精を吸いとつてやる。思想とは、結局そういうものかも知れないな。ところでナイエフ、君は死後の世界を信じるかい？」

「それも同じことよ。あるかないか、死んでみなければわからねえし、ないと思うよりはあると思う方が気が楽だ。マホメットが若いとき敵に追われてよ、砂漠の中で水も食物もなくなつて死にそうになつたというじやねえか。そのとき、マホメットがたつた一人ついてきた家来に、おまえはこうやつてどこまで歩いていくんだつて聞いたら、はい、私は来世の扉まで歩いていきますつて答えた。そしたらよ、マホメットも、おれもそうしようつて、また歩き始めたつて、いつかおやじが話してくれたよ」

二人がそんなことを話し合いながら歩いているうちに、空の扉が開いてそこから無数の光の束がガリラヤの海に差しこみ、湖面は光のみで彫金されて、来世とでもいいたいように美しく燃え上つた。二人は、街道をときおり軍用自動車や、二輪車を引つぱつたらばが通うようになると、街道をはずれて山の斜面の林間に入り、このまがくれに街道を見下しながら幹を伝つて北上した。そして四日目の早朝まだ暗いうちに、イスラエルとシリアとレバノンの三国が丁字形の国境線で一点に会するメトウーラに着いたのである。二人は、イスラエル側からレバノンに越境し、それからシリアに入る計画だつた。それが一番安全度の高い道筋だつたのである。

国境の山腹には幅広い有刺鉄線の帯が這い、その所々に材木でやぐらを組んだ監視塔が建てられた。ナイエフとズハイルは、監視塔から比較的目的のどきにくい山ひだの斜面の草むらの中を肘でじりながら這い上がつていつた。そして、有刺鉄線を張りめぐらした杭の元にたどりつくと、二人は、腰に吊るしてきた携帯用スコップで鉄条網を縦にはつて進める深さの溝を掘り始めた。体力のまさるナイエフがもぐらのようにスコップで土をかき分けて進んだ。ズハイルは、その後からときおり首をのばして周囲をうかがいながら、溜まつた土塊をたぐり寄せ、後方に押しやつた。有刺鉄線の刺が一人の頭や背中をかきざいたが、そんな痛みは感じないほど彼らは掘ることに熱中していた。

……そしてついに鉄条網の彼方の地面にナイエフが首を出したとき、暗い紫色のあざみがその鼻先で細長い顔を振つて歓迎した。二人は溝を抜け出すと、そのまま草の上にあおむけになつて、放心したように空を眺めていた。ようやく明け放された空の一角ににじみ出た青さが、彼らの不眠と疲労に充血した目に点滴のように快くみた。

「さあ、もう安心だ。無事任務完了だ」

ズハイルはそう叫ぶと半身を起こし、寝てゐるナイエフの手を握りしめて振つた。二人は立ち上ると、おもしろがとれた厭みにふらつきながら歩き始めた。シリア国境の方から山の気をふくんだ風がゆるやかに流れて、泥にまみれた彼らの頬や、髪の毛を洗つた。ナイエフが頬をふくらませて、出まかせの口笛を吹いた。そのとき、行手の監視所のふもとのあたりで、「だれか」とアラビア語で誰何する声が聞こえた。

「撃つな。パレスチナ人だ。兄弟だ」

ナイエフが両手をあげておどるようなしぐさを見せ、アラビア語で陽気に叫び返した。いきなり、



第十七章 目には目、歯には歯を

ハーリスは、ユーセフの兄のナイエフの死をその母親から聞かされたとき、胸をナイフで突かれた
ような鋭い痛みを感じた。しかし、それだからといって、ナイエフの死の意味をどのように考えていい
のか、焦慮に似たとまどいをおぼえた。フエ・ダイーンがイスラエルに入つて軍事的な行動をとるた
びに、イスラエル軍も必ずその数倍、数十倍もの報復攻撃をおこなう。たとえば、一九五三年十月十
四日に起つたキビア事件もその一例である。

その前日、イスラエルのギリヤ・ヤフーデという所の、一軒の民家にいきなり一発の手榴弾が投げこまれ、その中にいた母親と二人の子供が死亡した。イスラエル軍は、犯人の足跡を追つて、これがヨルダン領に逃げこんだと断定するや、ただちにその翌日の夜、一箇中隊、約二百五十人から三百人の正規軍を投入して、ヨルダン領のキビア村を攻撃し、そこに住んでいたパレスチナ人難民をふくむ村民五十三名の老幼男女を殺戮し、十五名に負傷を負わせ、この村を徹底的に破壊した。そのとき、ヨルダン・イスラエル混合体戦委員会に軍事顧問として国連から派遣されていたE・H・ハツチソン米海軍中佐は、翌朝現場に急行して、現状調査をおこなつたが、そのときの模様を次のように物語っている。

……ここでおこなわれたいわれなき破壊を描写することは困難であった。私の心に鮮明に焼きついだ一つの光景は、瓦礫の山上にうずくまつているアラブ婦人の姿であつた。その瓦礫のここかしこの石の間からは、小さな手や、足が突き出していた。この婦人の目差しはぼんやりしていた。彼女の腰かけていた山の中には、その六人の子供が埋まつているのである。彼女の夫は、その前の埃まみれの路上に、弾に射抜かれ、うつぶせになつて横たわつていた。

一つの物語が何度も何度もくり返された。すなわち、弾の穴だらけの扉、敷居越しに大の字にのびた死体……これは自分の家が爆破されるまで、居住者が猛烈な射撃のために屋内にとどまるることをよぎなくされたことを示唆していた（注1）。

「何をする、パレスチナ人だぞつ」

ズハイルは、怒りに顔をひきつらせ、監視所をにらんで泣き声でわめいた。それをあざけるかのように、第一、第三の銃弾が足元で草の葉をちぎり、土を飛ばした。ズハイルはその銃声に確かに殺意がこもつてているのを感じた。そして、懐からコルト一を引き抜くと、得体の知れない彼方の敵に向つて三発づけて応射してから、

「ナイエフ、しつかりしろ。起きておれの肩につかまれ」とナイエフの片手を引っぱつて引き起こし、その胸の下に自分の肩を入れた。かつがれながら、ナイエフは破れた手風琴のような力ない声であえぎあえぎつぶやいた。

「ズハイル、おれはもうだめだ。君だけ逃げてくれ。そして、おやじが生きていたとお袋に知らせてくれ。しかし、なぜ、レバノン兵の奴、おれたちがパレスチナ人だと知りながら撃つたのだろう、なぜ……」

ズハイルの首筋にも暖かいものがこぼれ落ちた。ふりむくと、彼の肩にのせられたナイエフの顔と唇がその分だけ見るまに青ざめていった。ズハイルは、物的な重さだけになつたナイエフの体を背中にかづぐと、片方の手に拳銃をぎりしめ、シリア国境へ向つて、よろめきながら走つていった。そして、三角地点を越えて、シリアの国内に入つたとき、ナイエフ君の体はすでに冷たくなつていました」

ズハイルの首筋にも暖かいものがこぼれ落ちた。ふりむくと、彼の肩にのせられたナイエフの顔と唇がその分だけ見るまに青ざめていった。ズハイルは、物的な重さだけになつたナイエフの体を背中にかづぐと、片方の手に拳銃をにぎりしめ、シリア国境へ向つて、よろめきながら走つていった。『そして、三角地点を越えて、シリアの国内に入つたとき、ナイエフ君の体はすでに冷たくなつていました』

「何をする、ハレスチナ人だぞ」
ズハイルは、怒りに顔をひきつらせ、監視所をにらんで泣き声でわめいた。それをあざけるかのように、第一、第二、第三の銃弾が足元で草の葉をちぎり、土を飛ばした。ズハイルはその銃声に確かな殺意がこもつているのを感じた。そして、懐からコルトを引き抜くと、得体の知れない彼方の敵に向って三発づづけて応射してから、

「ナイエフ、しつかりしろ。起きておれの肩につかまれ」

監視所のふもとの草が光った。同時に銃声がひびいて、両手をあげたナイエフの体があおむけに膝を折つてどしんと倒れた。

一九五五年にも、ガリラヤの海で操業をしていたイスラエル漁船がシリアの国境監視哨と村を攻撃し、死者四十七名を出した。ここでは、目には目を歯には歯をの撻が忠実に守られていて、正義とか人道主義などという言葉は砂漠の蜃気楼に過ぎない。テロに対するテロという太古からくり返されてきた戦争の論理しか、ここでは通用しないのか。祖国喪失の末にハーリスが見つけ出した自由な個我も、結局は一握の砂にすぎないのでだろうか。

それともう一つ、ハーリスに解せないのは、パレスチナ人に對する他のアラブ諸国の、表向きは派手に同情して見せるその魂胆である。ナイエフは、イスラエルからレバノン国境に入つてから、「パレスチナ人だ」と叫んだのにレバノン兵によつて射殺されたという話である。ナイエフの屍をもち帰つた学生の話では、あとから帰つてきた他の仲間の話を考へ合わせると、イスラエル側がレバノン国境警備隊に通報して、ナイエフを殺させたと思われるふしがあるという。もちろん、同じアラブ人といつたところで、レバノン人のすべてがパレスチナ人の味方ではないことはわかつてた。ここに住むマロン派キリスト教徒とシーア派およびスンニ派のイスラム教徒は昔から仇敵の間柄にあつた。

一八六〇年、ドルーズ族の反乱でレバノン山脈のマロン派キリスト教徒が多数虐殺されたときも、彼らは十字軍以来この地の支配を狙いつづけて来たフランスと結びついてオスマン・トルコの支配から独立しようとした。「方イスラム教徒の方はヨーロッパの帝国主義に對抗しようとしてトルコを擁護するが、のちにはいわゆる「アラビアのローレンス」らを通じて英國と結びつく。……要するに、もろもろの宗教が発生し、数知れぬ國家が興亡し、異質の文明や、外国勢力が激突し合うここ東西の交叉点では、どんな動きも單細胞ではない。それは無数の触手をうごめかして、他の動きとからみ合つてゐる。

だから、ナイエフのレバノン国境警備兵による射殺のように、一つの事件の奥を探っていくと予期しない事態に遭遇することがある。たとえば、ヤーフアに近いサラファンド収容所で言語に絶する拷問を受けたのち、アンマンの「パレスチナ病院」に移された多数のパレスチナ人たちは、サラファンドでは、アラブ諸国、特に北アフリカ出身の警官たちから拷問を受けたと、異口同音に証言している。この収容所では、ゲーペーウーや、ゲシュタポや、アルジエリア戦争のときのOASが開発し、常用した拷問法がふんだんに採用されていた。頭髪の逆立つ電気ショック療法や、南アでおこなわれているミル・ニメールもそれを体験させられた。

アンマンの「パレスチナ病院」に入院しているファルーク・アラミーは、エルサレムにあつた彼の家にフェダイーンをかくまつたために家族もろとも逮捕された。拷問の過程で、彼の妻と兄弟は彼の眼前で殺された。モロッコ生まれの一士官は彼の右目に真赤な焼け火箸を突き刺し、その上、釘抜きで彼の歯を一本一本根こそぎに抜いていった。彼の片足は長い間「自白器」で締めつけられていたために、麻痺して足なえとなつてしまつた。そして、何よりも、彼はこれらの感覚の限界を突き破る恐怖と苦痛のために正氣を失なつてゐた（注2）。

そういう話を聞くとき、ハーリスは、憎しみより先に、心臓を握りしめられるような恐怖を感じた。自分がそうした拷問に耐えられる自信はなかつた。夜、夢の中で、トイレを探している。やつと見つけて小さな部屋の戸を開けると、タイルの床の上に汚物が沼底のようになつてあつた。そこもないほどである。彼は下腹部から胸の方にせり上がりつてくる嘔吐の圧力を感じながらあわててそこを抜け出し、他のトイレを探し回るが、やつとのことで探しあてたトイレはどこも泥濘のような汚物が床を埋めている。ついに意を決して、ぬらぬらと足をとどる汚物の中に足を踏み出そとすると、いきなり背後の戸が叩きつけられるように閉され、叫びにならない苦しいおめき声をあげる。その目覚めた瞬間の絶望感は、どんな悪夢にも負けないほどに重い。

彼はまた、同じアラブ人の雇われ警官や、自分たちのほとんど同胞にも近いと思つてゐたオリエンタル・ジュー、いわゆる東方系のユダヤ教徒がパレスチナ人の捕虜に対し特に残忍な行為に出るという話にも、救いのない嫌悪感というか、絶望感を味わつた。もちろん、それは主人に飼われている犬であり、犬は良心を飼い主にあずけているためによけい残忍になれるのであるとは思つてみるもの、やはり、生きたままその肉を噛み、骨をしゃぶることに快感を感じる犬にまで墮することのできる人間性というものに救いようのなさをおぼえるのである。同じアラブ人であるといふことも、

同じコーランの民であるといふことも、そこでは何の救いにもならないのである。

兄を失なつたユーセフは、ひんぱんに学校を休むようになつた。それは、主たる働き手を失なつた一家のために、まだ幼い身であちこちはんば仕事を手伝つて、より幼い弟妹たちの口に糊するための資を稼いでいるのことは想像がついた。ときたま学校に出てきても、授業中はほとんど顎を襟にうめて居眠りをしている。急に鼻の奥を鳴らしたかと思うと、額をしたたかに机に落して、あわてて上半身をはね起こし、周囲を意外そうな目で眺め回して、クラスの失笑を買うことがある。そんなある日の午後、ハーリスは、ユーセフを校庭に呼び出して、ちょうど鉄棒の前におきつ放しになっている平行棒の上に並んで腰かけた。校庭の辯ぎわの所々に立つていての姿のよい杏の木は、産毛の生えた白い花の蕾を一杯につけて、セピア色の土でおおわれた校庭中に香水をまき散らしている。その香を吸うと、鼻の奥にひやりとした早春を感じる。

「ユーセフ、お母さんは元気かい」

とハーリスがたずねると、ユーセフは両手をズボンのポケットに突っこみ、両肩を上げて首をその間に引っこめたまま、「まあね」と氣のない返事をした。

「よく学校を休むけど、何をして働いてるんだい」

とかさねて聞くと、

「いろんなことさ。死んだ兄ちゃんの棟領の所で使つてもうこともあれば、姉ちゃんの食堂で働くこともある」

ユーセフはあくびといつしょにそう答えて、まぶしそうに目を細め、校庭の彼方に麓をおぼろにして浮いている薄紫の山並みを眺めた。

「えらいなあ、ユーセフ。君がよく居眠りをこくのも、あたりまえだよなあ」

ハーリスがそういつて、ユーセフの向うの肩に背後から手をのせると、ユーセフは首をひねつて、いびつになつた目でハーリスを見すえて言つた。

「先生、えらいことなんかちつともねえさ。人間は、食えなきやあ、働くのがあたりまえだ。先生、おれは、この頃、人間、特にわれたちは、働く他にも、やらなければならないことがあるのがわかつたんだ」

「働く他についていと……」

ハーリスは思わずはつとして問い合わせ返すと、

「つまり、おれは、なぜ食えねえのかということを考えたんだ。そして、これはおれの考えじゃなくて、死んだ兄貴の友だちから教わつたんだけど、だれもが安心して食える社会を作らなければいけないってことがわかつたんだ。そして、おれたちにとつて、安心して食える社会を作るつていうことが、祖国を作るつてことと同じだつていうことを教わつたんだ」

と語ったユーセフは、これまで考えていて、つまりできの悪い、どこか表情の冴えないユーセフではなくて、殻を抜け出でしだいに羽を伸ばしてゆく新しい蟬のような新鮮な光をおびたユーセフだった。

ハーリスは、おどろいてその新鮮な光沢をおびたユーセフの目といくぶん憂いの影のある頬をみつめた。彼は、自分の頬が内側からほてつてくるのを感じた。だれもが食える新しい社会を作るつていうことが、自分の祖国を作ると同じだということは、何て簡単で、明確な答えなのだろう。それがなぜ今までの自分にわからぬとしていることがある。食えるということが、かえつて目を薄ぼんやりさせていることがある。ハーリスは、ユーセフから教わつたことを恥かしく思うよりも、悩みや、迷いをペツトのように胸中に飼つていた自分を恥かしく思つたのである。

飼つているといえば、この頃、やはりまだ幼なかつた、のちの有名な女コマンド、ライラ・ハレドは、避難先のレバノンのスールでサラーという黒い子猫を飼つていたそうである。ライラは、いつもサラーといつしょに海岸に散歩に行き、海水で体を洗つてやつては櫛でとかしてやり、その間中、ライラはその日学校で習つたことや、噂話をサラーに話して聞かせてやつたそ�である。ライラがなぜその子猫をそんなにかわいがつていたかといえば、それが生まれるとき、ライラは産婆の役を買って出、それ以後ずっと子供のようにめんどうをみてやつたからであった。サラーの姉妹の一匹が産後の育ちが悪くて夭折したときには、ライラは、裏庭に穴を掘つてその遺骸を埋め、小さな土まんじゅうを作つてやつた。

ある日、ライラがサラーを連れ、ポピーの花を片手にもつて墓参に行くと、大きな雄鶏がひづめとくちばしで土まんじゅうを掘りくずし、あまつさえとさかをふるつてその前日生けておいた花を食い散らしていた。それを見て、ライラはかーつとなり、やおらにその雄鶏の首をつかんでひねつてしま

つた。

やがて、サラームは主人公を追い越して成熟し、子をみごもる身となつた。ライラの母親は、もうこれ以上猫のことで悩まされるのはごめんと、サラームを袋に詰め、どこか遠くへいつて捨ててくるようにとその袋を叔父に手渡した。ライラがどんなに泣きわめいて抗議しても、今度は頑としているれなかつた。

それから一年過ぎたある春の日の午後、ライラが学校から帰つてくると、家の近くの堀の上を、一匹の黒猫が毛並を光らせて歩いていた。ライラは一目見て、それがサラームであることを感じた。

十才のライラは、その明くる日、学校で作文の時間にサラームのことを書いた。彼女は、サラームを「ノアの方舟」の鳩になぞらえた。つまり、パレスチナがシオニズムの洪水に見舞われて、一家は逃げ出した。そして、いつしよに方舟の中で暮らしていた鳩がある日姿を消したが、また一年目に戻つてきました。サラームは、いわばこの鳩で、シオニズムの洪水が引く前兆である、と書いたのである（注3）。先生は、ライラの着想をたいへん賞めたのち、しかし実際にシオニズムの洪水が引いて、祖国に帰るためににはどうしたらよいかを、科学的に考えるようにライラにすすめた。

注1 甲斐静馬著「中東戦争」昭和五十一年 三省堂刊

注2 板垣雄二編「アラブの解放」昭和五十年 平凡社刊

注3 ライラ・ハレド著「わが愛はパレスチナへ」昭和四十九年 番町書房刊

第十八章 矛盾の方程式

科学とまでいかなくとも、常識的な知恵は、富と貧困の不公平な偏在を是正し、地上から戦争をなくすためには、人類が民族国家の殻を破つて、地球人類に生まれかわらねばならないことを教えてくる。カール・マルクスは、あらゆるナショナリズムの壁を貫いて人類を横に結びつける関数は、いつさいの宗教を乗り越えた無神論と被搾取階級であると考えた。そこには、ユダヤ系住民に対する民族的な抑圧と迫害の歴史を、ユダヤ民族の両極にある国際的資本と被搾取労働者を結びつけることによつて、一挙に揚棄しようというユダヤ系住民の悲願がこめられていたかも知れない。それは、誠に天才的な発想であり、未来的な展望であった。しかし、地球は天才でなく、頑なに歴史家である。第一次世界大戦と第二次世界大戦を通じても、地球が人類に植えこんだ宗教の鞆帯と民族の甲殻は脱却できなかつた。矛盾が解決できないとき、人は矛盾が運動する方式を見出すとは、マルクス自身の言葉であるが、今や、人類は宗教と民族国家を一挙に揚棄することをあきらめ、複次的なそれらの関数が運動する方程式をそのつど見つけ出そうとしているかのようである。

それではパレスチナにおけるパレスチナ人とユダヤ移民の宗教と民族的利益が共存しながら運動していく形式とは何であるか。ユーセフは、だれもが安心して食える社会を作るつていうことが、祖国を作るつてことと同じだと語つていて、それはそのとおりだとしても、そういう社会もやはりどこかの地上に作り出さねばならないことは確かである。しかし、現在パレスチナを占領しているシオニストたちは、ユダヤの一神教と選ばれた民としてのユダヤ民族国家を頑なに主張していて、だれもが安心して食える社会というより高次元での解決の方向に目を向けようとしない。これは硬化した矛盾である。この矛盾を運動させるためにはどうしたらよいか。答は一つしかない。シオニズムと戦うことによってである。ハーリスは、解放された個我をもつて自由にこの戦いに参加する決心をした。

ある日の午後、ハーリスは電話をしたのち久しぶりにマアツリー先生をダマスカス大学の研究室に訪れた。先生は高校で心理学の講義をするかたわら、というよりは大学で教育心理学の講座をもつか



たわら、高校をも教えていたのである。夏でも一歩中に入るとひやりとした薄暗い空氣のこもつてゐる石造の大学本館の中に入つて、大理石の床をはう帶状の赤じゅうたんの上をしばらく進むと、電話で教えられたとおりに右手に鉤の手に曲がる、やはり大理石造りの階段があつた。それを登つて三階に到り、右に折れて、いくぶん明るくなつた廊下を渡つていくと、左側四つ目の部屋のドアの中央に「ドクター・マツリー教授」という銘の彫りこまれた真鍮の板が貼りつけてあつた。ハーリスがその部厚いドア板をノックすると、取つ手が中から回つて、黄ばんだ光の短冊の中にマツリー先生の姿があらわれた。

「ハーリスか。久しぶりだな。入りたまえ」

ひげと影のせいか、ほぼ真黒にひとしいその顔が、眩いでハーリスを中心へ招き入れた。部屋の正面にはドーム形の窓が左右にうがたれている。そこから差しこむ屋外の光は、ガラスが厚くて古いせいか半透明で、部屋全体が古い水槽のような感じがする。四方の壁には藻のように本がこびりついて、紙の臭いを漂わしていた。ハーリスは、部屋の真中にある皮張りのソファに腰かけ、低いテーブルをへだててすわった先生の対座した。先生は左手に握つた太いマドロスピープの口に卓上の丸い罐からきざみたばこをつまんで親指でつめながら、ハーリスの顔を微笑で撫でるような顔つきをした。

「ハーリス、君は今、噴火する直前の山のような顔をしているな。顔色は空のように青ざめているが、魂の地鳴りがわしの体に伝わつてくるよ」

そういつて、マツリー先生は、マッチをすつて、パイプの先に火を点じ、せわしなく一度二度息を吸いこんだ。そのつどパイプの口が赤く光つて、先生の焦茶色の口ひげに煙がまつわりついた。

「先生、ぼくは、いつか先生のお出しになつた作文がきっかけで、日常性を断ち切つて、慣習にしばられない自由な個我として生きようとし、そしてある程度それに成功したと思ひます。しかし、最近ぼくは、純粹に自由な個我は、一つの純粹な抽象にすぎないということを悟つたのです。やはり、それを今一度人間の関係の中においてこそ、充実した人間として、歴史の中に生きれる、いや、生きねばならないと思うようになつたのです」

ハーリスは、胸底から溶岩のようにこみあげてくるものを押えながら、つとめて冷静に、観念的な言葉で自分の考えを表現した。だから、言葉が不規則な運動とともになつて彼の口を離れた。マツリー先生は、丸く開けた唇から大きな煙の塊をゆつくり吐き出してうなずいた。

「君がいつかそう言つて、またわしをたずねてきてくれるだろうと、わしは期待していたよ。いや、信じていたよ。因習から解放された個我は、人間の解放のない手とならねばならないのだ。パレスチナ人の祖国の回復という問題も、実はその次元で考えられねばならないのだ」

それから、マツリー先生とハーリスは、たばこの煙が立ちこめてきて、そのほの甘いかおりと古本のかび臭いにおいのいりまじつた淀んだ空氣の中で、お互に会わなかつた期間の出来事や、考えたことなどを交々に話し合い、窓外のおどろえた光がお互いの像をぼんやりと疊らせるまで時の経つのを忘れていた。

「そこで、ハーリス、学ぶということ、現代に生きるということは決して背反することではない。わしらは、皆、学びながら生き、生きながら学ばねばならないのだ。それは、初めは迂遠のように見えても、そうしなければ学問も生活もわからない。それが、これらの学問さ。君は、君の能力を生かすためにぜひ大学に進むべきだ。来週の水曜日の夕方五時に、またわしの研究室に来たまえ。君に、見事に現代に生きているおもしろい若者たちを紹介しよう。来週、ちょうどそういうアラブ諸国の大學生たちの会合がもたれることになつてているのだ」

マツリー先生は、辞去しようとしてソファから腰を浮かしたハーリスに向つてそう言い、「はい、先生」とうなずいたハーリスの手を剛い毛の生えた手でしつかりと握つた。

翌週の水曜日の夕、ハーリスがマツリー先生の研究室を訪れると、たばこの煙がかすみとなつて幾重にもたなびいている室内に先生をふくめ四人の男と一人の女が、ソファと椅子に腰かけてたむろしていた。

「わしの高校の教え子のハーリス君だ。今、小学校で代用教員をしているが、将来のわれわれの有望な同志です」

と、マツリー先生がハーリスを紹介すると、一人一人が立ち上がり名乗りながらハーリスの手を握り、それが済むと、また一時中断された議論を再開した。フランスと名乗つた亞麻色の髪を断髪にした女が、巻たばこを指のつけ根にはさんだきやしやな掌を口から放して、向いの肘かけ椅子に股を開いて深々と腰かけている男にフランス語で言つた。

「ヤーセル・アラファートさん、私はあなたが想像していた色眼鏡のギャングのようなんじゃなくて、ほつとしましたわ。いえ、むしろ私たちフランス人の好む、物悲しいユーモアがあつて、昔ワル

シャワのゲットーにいたユダヤ教徒の風貌を思い出します。そう、何千年もじつとがまんして生きてきて、しかもいじけずに微笑をたたえている顔……」

「光榮ですよ、フランソワ嬢。第一、われわれパレスチナ人の中には、イスラエル人以上にヘブライの血が混じっているのですからね。第二に、ぼくがユダヤ教徒に顔つきが似ているとすればそれは、ぼくが人種的差別のないパレスチナということをほんとうに考へておられる何よりの証拠ですよ」

アラファートがこう言つて、ソファに腰かけて他の男たちをかえりみて頑丈な両手を広げて声を出して笑つた。しかし、フランソワという女の口元からは、いち早く微笑が消えて、どちらかといえば細長い、静かな目差しの中に冷嘲的な光がはやてのようひらめいた。

「しかし、私たち、非アラブ人は、もしかりにパレスチナに復帰すれば、数的優位性からいつても、ユダヤ教徒をやがては抑圧するにいたるのではないかと心配しているのですが」アラファートは、太い鼻柱を上下してうなずき、両手を膝の上で組んで、あらためた顔をして答えた。

「非宗派的・民主的パレスチナというわれわれのスローガンは単なる煽動のためのものではありません。パレスチナのシオニズムに対する闘争の唯一の解決策は、非宗派的民主的パレスチナへのパレスチナ人の帰還をおいてほかにありません。そこでは、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒が対等の市民として『一人一票』の原則に従つて生活するのです」

陰の部分に遠慮なく理知の光をあててゆくフランス人らしい俊敏さで、フランソワ嬢がさえぎつた。「しかし、人口の構成比では明らかにパレスチナ人がユダヤ教徒を圧倒的にしのいでいます。もし『一人一票』の原則でいけば、どうせん、パレスチナ人優位の国家が形成されユダヤ移民たちの宗教的政治的権利がおびやかされることになるのではありませんか」

アラファートは、温顔をうなずかせて答えた。

「私たちは、ユダヤ主義とシオニズムを明確に区別しています。つまり、植民地主義であるシオニズムに反対する一方、私たちは、ユダヤ教の信仰は尊重します。だからユダヤ教徒たちは少数派であるとはいえ、自分たちの信仰を維持しながら、イスラム教徒やキリスト教徒と同じ政治的権利行使

できるのです。これに対しても、シオニストたちは、パレスチナ人の土地を略奪し、パレスチナ人を追い出しました。彼らの憎しみは、私たちの土地のオリーブの木にまで向けられました。オリーブの木は私達の誇りのシンボルであり、その土地はパレスチナだということを思い出させる証人だつたのです。彼らはそれも破壊しようとしました。ゴルダー・マイヤーが『パレスチナの子供の中に、そしてパレスチナのオリーブの木の中に敵を見ているのです。一九四八年以後もパレスチナに残つたパレスチナ人たちは、現在自分の生まれた土地に避難民として存在しています。イスラエルの法律は彼らを二等市民として扱い、彼らは土地財産を取り上げられたのち、あらゆる種類の人種差別とテロリズムに直面しています。私たちは、こうしたシオニストたちの植民地主義と戦い、地上にだれもが安心して共存し、食べていける祖国を作るための革命を遂行しようとしているのです』

アラファートの言葉は、胸のレトルトの中でしだいに熱して唸りを生じ、それを吐く唇も、アラブ人にしては白いその頬も、レトルトの熱気に染まってきた。それに水をさすように、フランソワ嬢は、口の両端を釣り上げて、いたずらっぽい微笑をつくり、第二の矢を放つた。

「もし、あなた方がお作りになる共和国の大統領にユダヤ教徒がなつたとしたらどうなさいます」それを聞いて、アラファートだけではなく、マアツリー先生も、その他の若者たちも示し合わせたよう、大声で笑つた。そのため、一瞬、室内にこもつたたばこのかすみが揺れ動いたかのようだつた。

「外国の方はよくその質問をしますね。お答えしますよ。私たちは、大統領がモシエであろうがムハンマドであろうが、いつこうにかまいません。もし、その人が人種的差別国家の大統領ではなく、民主国家の大統領であるならばね」（注）

アラファートがそう答え、丸い目を落しそうなほど開いて、微笑んだ。ハーリスは、マアツリー先生の机の脇にある木の椅子に腰かけ、両方の拳を膝に固く突っぱつて、フランソワとアラファートの言葉のやりとりを聞いていたが、その明解な言葉に自分の胸中にとぐろを巻いていた難問が繩の一端を引っぱつてたぐられるように解けていくのを感じた。そして、思わず一同に釣られて、くつたくのない笑い声をあげた。彼は、この今自分の目の前にいる口ひげをたくわえた男が、後年のPLO議長となつて世界に勇名を馳せるようになるだろうとは、もちろん考へてもみなかつた。しかし、ちょっと見ると深海魚のようなユーモラスな顔をした男の、底抜けに好人物らしい、しかもどんな苦境にも

耐え抜いていくような頑丈な風貌に吸いこまれるような魅力を感じた。この男なら自分の行動を託してもよいと思つた。

どうやら、フランスのジャーナリストらしいフランソワ娘のアラファートに対する質疑応答は終ったようだつた。一同はお開きの形で自由に話し出した。「あなた方は、ユダヤ娘と恋愛し、結婚することはどう思うか。いや、結婚までいかなくてもフリー・セックスはどう思うか」とのいかにもフランス人らしい歯に衣着せぬ質問に対し、アラファートは、卑怯にも、ハーリスに「君はどう思いますか、ハーリス君」とほこ先をかわした。

ハーリスは、薄暗くなつた夕の空氣の中でもそれとわかるほどに顔を真赤にした。長い間、意識のひだの中にかくれていたハンヌの顔や、声が夜に匂うあんずの花のように彼の脳裡にひらめいた。

「ぼ、ぼくは……」彼はしばらく絶句したのち、先刻のアラファートの答を思い出して、まじめな表情で答えた。

「大統領さえユダヤ教徒でいいのですから、恋人や、妻がユダヤ人教徒であつて悪い訳は少しもないと思います。ただし、統師権を与える訳にはいきませんが」

注 アラファートの答は、昭和五十年現代史出版会刊『パレスチナ』と、同年平凡社刊『アラブの解放』の中のアラファートの言葉から収録した。

第十九章 星に叫ぶ

ハーリスは、マツリー先生の研究室でヤーセル・アラファートら、パレスチナ学生連合の指導者と知り合つたのち、みずからもその連合に身を投じて、大学入試のための受験勉強をするかたわら、アラブの民主的統一とパレスチナ回復のための宣伝活動を活発におこなつた。どちらかといえば理論家肌で、頑丈な体躯の持ち主とはいがたい彼には、そうした運動が適していたのだが、ここに図らずもフェダイーンに参加するめぐり合わせが彼を待つていた。

それまで勤めていた小学校の代用教員をやめ、無事にダマスカス大学の哲学科に入学してから二年たつた初秋のある午後のことである。ハーリスが二階の通りに面した窓ぎわの古机に向つて腰かけ、窓から見える溶岩におおわれた薄紫色の山をときおり大きな瞳に映しながら、その明くる日市内の交通労働者たちとの会合で話すことになつてゐる演説の草稿を練つてゐると、階下に父の呼ぶ声がした。返事をして階段を駆け降りてゆくと、店から、父がすっかり白くなつた頭を突き出して「おまえにお客様だよ」と告げた。父の背後から店に出て見ると、反物を積んだ店台の間に、小学校で教えていたユーセフの母親が、いつちようらの青いワンピースの上に白いチャドラーをかぶつて立つてゐた。天井から吊るされた螢光燈のせいか、多年の苦労に洗いさらされたその顔はどこか白痴のようにぼんやりとしていた。

「やあ、ユーセフ君のお母さん、どうもごぶさたしております。その後、ユーセフ君は元気でやつていますか」

と、ハーリスがたずねると、母親は「先生、そのユーセフのこと今日はお伺いしました」といつて、するような目付をした。

「ユーセフがどうかしましたか」

「いなくなりました。死んだ兄貴のナイエフにならつて、父親を連れてくるといつて、二月前にフェダイーンの人たちといつしょにチベリアスに向つたまま帰つてこないので。なんばとどても、



聞きました。それであの子ももしゃと思って、こうやつて毎日あつちこつち聞いて回つております

ユーセフの母親は、節くれだつたごわごわの手をかくすように両手を揉みあわせながら、そう来意を告げた。

それを聞いて、ハーリスは、母親を一目見たときに閃めいた予感が的中したと思った。いや、それは近頃のユーセフの姿にまつわりついていたせっぱつまつた予感だった。それでいて、いざそれが現実となると、やはりハーリスは、じつとしていられない焦燥に駆られた。

「さつそく、知人たちに当つて消息を聞いてみます」

彼はそういうて、二階に駆け上つてシャツを着かえると、大学近くの本屋の二階にある学生連合のアジトへ向つて家をとび出した。後に残されたユーセフの母に対し、ハーリスの母親は、どろりとしたトルココーヒー立てて馳走しながら「きっとアッラー様が守つてくださいますよ。息子さんはきっと帰つてきますよ」と、あまり慰めにならない言葉をうるみをおびた声で何度もくり返すのだった。

その夜、ハーリスはおそらくなつて帰宅した。彼のこそげ落ちた頬と重い足どりは、ユーセフの消息がつかめなかつたことを問わず語りに語つていた。彼は、二階の自室に上ると、着がえもせずにベッドの上にあおむけに身を投げ、目をつむつた。

初めて彼が代用教員としてクラスで紹介されたとき、腹話術を使つて「エジプトの木彫人形」と野次を飛ばし、校長に片耳つまんで吊り上げられたときのユーセフの顔が瞼に浮かんで思わず微笑んだ。靴を盗んだと疑われ、「この靴はおれのものだ。パレスチナがおれの故郷であるようにこの靴はおれのものだ」と机を叩いて叫んだユーセフの姿が脳裏にひらめいて、目頭が熱くなつた。……「センセエ」と呼ぶ声が枕の中からはつきりと聞こえて、思わずベッドの上に半身をね起した。

母でも消しておいてくれたのだろう、明りの消えた部屋の窓には、岩山が病める獣のようにうずくまり、金色の隻眼を光らしていた。ハーリスの声にならない声は、窓ガラスを素通りして、山肌にひびき渡つた。

「待つていろ、ユーセフ。必ず探し出してやるからな。おまえが、あの星の一つとなつて、故郷と百三十万人の流浪の同胞を眺めていようと、まだその中にいて地上を故郷を求めてさまよつていよう

と

明くる日、ハーリスは学生連合のアジトを訪れて、軍事組織と連絡をとり、近くガリラヤ付近に出撃するフェダイーンに加えてもらいたいと申し出た。最初、学生連合の指導部は、ハーリスが政治宣伝部門に適任なことと、ゲリラとしての軍事教練を受けていないことを理由に反対したが、ハーリスの固い決意に折れて、今回かぎりの条件でそれを許可した。

その夜、ハーリスが帰宅すると、居間でテーブルに向い銀縁の老眼鏡をかけて新聞を読んでいる父の向いに腰かけた。

「父さん」ハーリスが声をかけると、父は両手を下げて新聞を傾け、眼鏡の隙間から上目づかいにハーリスの湯気があたつたような目差しを見つめた。それは、子供の頃から何かを感じたときに見せる目差しだった。

「父さん、ぼくは一月ほどパレスチナの故郷に帰つてきます。直接の目的は、教え子ユーセフの消息を探り出すことです。それは目的の一部で、忘れかけている故郷の地を踏んで、もう一度自分の故郷を感じること、そして故郷の息づかいとそこに残されて苦しんでいる同胞たちの心を自分のこれから政治宣伝活動に吹きこむことがもう一つの目的です」

父はそれを聞いて、老眼鏡をはずして卓上におき、瞼と唇をしばるように閉じ合わした。ときおり目尻や、口元がひくひくとうごめくのは、何者かに向つて問い合わせをしているのだろう。やがて、しわ深い瞼を開き、ハーリスに向つて言った。

「息子よ、行くがいい。信じる者はアッラーのために戦わねばならない。アッラーのために戦う者は、たとえ殺されようと、エデンの園になつかしい我が家を与えられると約束されている。また、アッラーの許しがなければだれでも死ねるものではない。だから、ハーリスよ、安んじて故郷の地におもむくがよい。わしにはおまえを止める権利はないし、わしがもし若かつたら、やはりおまえと同じようにしただらう」

それから、父はハーリスの両手を自分の掌にしつかりと包みこみ、その顔を刻みつけようとするかのように、のみのような目付きでじつとにらんでいた。

終章 帰 国

ハーリスの加えられたフェダイーンの一隊は、総勢十三人である。レバノン国境からマグダラ地方に入り、そこに残留しているパレスチナ農民たちの中から選ばれた有志と合流して、ガリラヤ湖畔のエイラブン村附近にある水門を破壊する作戦であつた。これは、地に洪水を起そうとする破壊のための破壊が目的ではない。第一、ガリラヤにはその土地の半分をイスラエルに奪われたとは言え、まだ数万のパレスチナ人が住んでいて、麦や、煙草や、オリーブを栽培して生きている。問題は、イスラエルがキリスト教徒のものでありイスラム教徒のものもあるガリラヤ湖の貴重な水をネゲブ砂漠に引こうとしてパレスチナ人たちから取り上げた土地に用水路を開き、しかも、その水を近隣のパレスチナ農民に使わせないばかりか、水に手を触れたら、四百リラの罰金を取るというのだ。だから、これはそれに対する報復行為であり、いわば水争いにおける自己の権利の正当な主張である。

ハーリスは、生まれて初めてクラーシニコフという中国製のソ連式自動小銃を肩にぶら下げて歩いた。出発するほんの三日前にその撃ち方を習ったばかりであるが、百点満点のうち六十七点を取り、初めてにしては上出来であると軍事部の教官に賞められた。そのせいか、肩にかかる銃の重味と掌に触れる銃身の冷たさがまんざらでもない。

一行はレバノン国境を越えて一日目の夜に、サファードの町を見下すカナン山にさしかかった。あいにくと夜霧がたちこめていて、ハーリスにはなつかしい故郷の町を見ることができなかつた。しかし、彼はその柔かい産衣のような霧の下に眠つてゐる生れ故郷の安らかな寝息が聞こえてくるような気がした。もし無事に作戦が完了したら、一步でもいいからその土を踏み、オリーブの香の漂う大地に頬ずりをしたいと思った。しかし、一行はその反対側の山肌を降つて、ガリラヤ湖を見下す街道に出た。夜明けと共に霧は煙のように地を這つて流れ、そのちぎれた合間に紺色に朝の紅を溶かした湖面が見えかくれした。

「この街道をもう少し下つていった左手の部落に同志の家がある。われわれは、そこで昼間休息を

とつて、夜になつて村民有志と合流し、夜間作戦を開始する」

ベンベラという仇名の頬のふつくらとした三十がらみの隊長は、一行にそう伝えると、腰にぶらさげたビニールケース入りの地図に顔を近づけ、確かめるようにあたりを見回した。

「あの糸杉の森の右手の十字架を立てた教会が目印だ。あそこの牧師はわれわれパレスチナ人に同情的だから心配ない。同志の家についてたら、朝飯を食つてから、久しぶりでゆっくり眠ることにしよう」

ベンベラは、自動小銃の重さで肩をかしげて立つてゐるハーリスをかえり見て、励ますように白い歯を見せた。

糸杉の森と教会との間で街道は二叉に分かれ、細い方の道が海辺に下つてゐる。その中途に白壁の民家が木柵をめぐらして一軒立つてゐた。一行は、街道をはずれて糸杉の森へ入り、爪先下りにその家へ近づいていた。民家の柵ぎわには、二本のあんずの木が数間はなれて立つていて、枝から枝へ網がたるみをもつて張られており、しまい忘れたのか青いシャツが一枚袖を広げてかかつていて。木柵には羊も一頭つながれていて、頭を柵の杭にこすりつけている。朝を告げる教会の鐘が聞こえてきた。

「くるな、イスラエル兵がいるぞ」

男の叫び声がとどいた。と思う間もなく、板戸の奥に閃光がひらめいて、銃声の連打と共にその男が突き飛ばされ、前のめりにはじき倒され、羊が悲しげな鳴き声を震わせて前脚を折つてくずれた。

隊長のベンベラは、そう言うと糸杉の森を抜けて、切株がまばらに頭を出している空地を小走りに降り、木柵のしおり戸に手をかけた。そのときである、白壁の板戸が開いて、一人の男が大声でわめきながら両手を広げて飛び出してきた。

「くるな、イスラエル兵がいるぞ」

男の叫び声がとどいた。と思う間もなく、板戸の奥に閃光がひらめいて、銃声の連打と共にその男が突き飛ばされ、前のめりにはじき倒され、羊が悲しげな鳴き声を震わせて前脚を折つてくずれた。ベンベラは伏せた。しかし、伏せたその部厚い体を塵をはたくよう容赦なく数発の敵弾が貫いた。残されたフェダイーンの兵士たちは、切株の散らばる斜面に身を伏せて、応射した。ハーリスも、自動小銃の銃床を頬につけ、敵影の見える窓に向つて引き金を引いた。ガラスが碎け、窓枠の木がへし折れるのが見えた。彼は、引き金にかけた人差指に不思議な手応えを感じた。実際に窓の中に獸の



ような叫び声が聞こえた。しかし、白壁の裏手から庭や、木柵の外に向って、イスラエル兵の迷彩服がいつせいに散開するのが見えた。数学の得意なハーリスの頭は、瞬時にその数を二十数名と読んだ。

「包囲されるといかん。いいか、皆、応射しながら糸杉の森に後退しろ。あとは、おれが指示する」

隊長の次に年かさのゲバラという仇名の、それとよく似た口ひげを生やし、色眼鏡をかけた男が、

拳銃で応射する合間に一同に向つて叫んだ。

斜面を登つて後退するのは予想以上に困難だつた。敵に背を向けて少し姿勢を高くすると、敵弾はその背を狙い撃ちした。かといって、匍匐後退するのは不可能だつた。敵の銃弾は鋭い嘲りをあげて、

ハーリスの周囲に飛来し、土や、小石を碎いて、体をえぐるような身近さで地面に突き刺さつた。

「アツラーの許しがなければ人間は死ぬことはできない」

出発のみぎり、父の呟いたコーランの文句が銃声の合間に、ハーリスの頭上にはつきりと聞こえた。彼は、今、それを全身で信じた。彼は、立ち上ると四つ足で駆けるように前ごみになつて糸杉の森の中に走りこんだ。森の中にはすでに二名の味方がいた。一瞬おくれて、ゲバラを含む三人の味方が駆けこんできた。大男のヨシフは、左手にはバズーカ砲をしつかりと抱きかかえていた。しかし、先刻は確かにあつた右の利き腕から先がなかつた。

「まず街道へ出て、カペナウム方向に向つて全速で後退し、有力な敵に遭遇した場合は山に入り、バシオールのあたりからシリヤへ入るか、同胞の家にかくまつてもらおう」

ゲバラは、集結した五名の味方に向つてそう指示すると、ヨシフの傷ついた右腕を三角布でしばり上げ、みずから代つてバズーカ砲を肩にかつぎ木立の間を縫つて登つた。背後の銃声はやんでいたが、敵の迫る気配をハーリスは背中に痛いほど感じた。街道に出て、カペナウムの方に向つて五分間も走つただろうか。ハーリスは、無気味な地ひびきが足裏にひびくのを聞いた。

「戦車だ」

ゲバラが両手を広げて一行を制止した。その血走つた眼の視界に、灰色の鋼塊が行手の切り通しの陰から進入し、鎌首をもたげた。背後には、数名の歩兵が見えかくれしている。

「よし、やろう」すでに土氣色に青ざめている大男のヨシフがそう言つて、街道の真中にあぐらをかいてすわりこんだ。ゲバラが、ヨシフの背後からその三角布を吊つた右肩にバズーカ砲をのせて狙いをつけた。バズーカ砲がスパートンという打上げ花火を上げるような音を立てた。その瞬間に戦車

の砲塔も火花を吹いた。

何が起きたのかわからなかつた。ハーリスのかたわらに両手で腹を押えたゲバラがあおむけに倒れていた。そして、その両手の間からは鮮血と共に腸管があふれ出し、地をはい回つていた。ヨシフの体は、大男の面影を止めることなく飛び散つていた。戦車も砲塔のあたりから黒煙を放つて停止している。ハーリスは右手にもつた自動小銃を撃とうとして、左手を伸ばそうとしたが、左手は赤く濡れてだらしなく垂れ、言うことを聞かなかつた。

ハーリスは、左側の灌木のゆるやかな斜面を駆け登つた。銃弾が彼を追つて、山肌をうがつた。右手で木の幹につかり、草をつかみして、どのくらい走つたのかわからぬ。銃声が背後に聞こえなくなつたとき、あたりを見回すと、彼は一人で、下りになつた山の斜面に立つていた。

左肩に焼きつくような劇痛を感じて、見ると、そのあたりのシャツが真赤に濡れて、腕の付け根の破れた部分からまだ血が流れ出ていた。ハーリスは、ポケットからハンカチを取り出して、血を吹き出している穴に指でつめながら、英軍によつて穴をうがたれた父の肩にサブリ叔叔がハンカチをつめたという、幼い日に父から聞いた赤い金曜日の一場面を思い出していた。彼は、ハンカチを右手で押えて、ゆるやかな斜面をよろめきながら降り出した。

彼は、今、自分の足が、故郷の町、サファードへの道をひとりでにたどつていてことを知つていた。そこは、幼い頃、よく父に手を引かれて散歩したオリーブ畠の広がるカナン山の山裾だったのである。オリーブの樹々は、白っぽい葉裏をひるがえして、幼い頃から聞いたコーランの文句をささやいていた。

「アツラーのため命を失なう者は、エデンの園になつかしい我が家を得ん」

彼は、なぜか數え子のユーセフも今同じ文句をつぶやきながら、そのあたりをさまよつてゐるよくな気がした。

オリーブ畠を降りると、ぶどう畠が谷間をおおつてゐる。いつのまに、日は高く登つてしまつたのだろう。ぶどうの葉は、空から降り注ぐ日差しを浴びて湖面のように波立つてゐた。ハーリスは、その中にもぐつて熟しかけたぶどうの一房をもぎつて口の中へ入れた。甘美な汁が口一杯にあふれ、渴いた喉を流れ落ちた。

彼は、幾房かを食べ終ると、小川に沿うココア色の道を歩いていつた。

さわさわさわ 命はさわに生まれても

命は 乾いた砂のよう さらさらさらさら とこぼれゆく

人のえにしは 花のよう はらはらはらうと

風に散る

さわさわさわ

さらさらさわ

それは、もう何年も前、ユダヤの少女ハンヌといつしょにたどつた道だつた。やがて、左手のせり上つてゆくオリーブの樹林の合間に白壁の我が家が見えた。ハーリスは、樹々の幹につかりながら、丘を登つていった。そして、我が家を見下ろす丘のオリーブの樹の下にすわつた。

土壙でかこわれた広い庭の中央には、白亜の二階家が立つていて、二階の上には丸い塔が伏せてあるので、ちょっとしたお城のように見える。庭の周囲には、あんずとオレンジの木立が涼しげな陰をつくり、その陰のとどくかとどかないあたりにばらの花壇があつて、今も昔もかわらずに色とりどりの花を咲かせていた。

家の陰からクリーム色のワンピースを着た女が、両手に手桶を下げてあらわれ、一つの桶をおくと、もう一つの手桶の中から掌で水をすくつてばらの花にふりかけ始めた。それはまぎれもなくハーリスの母だつた。

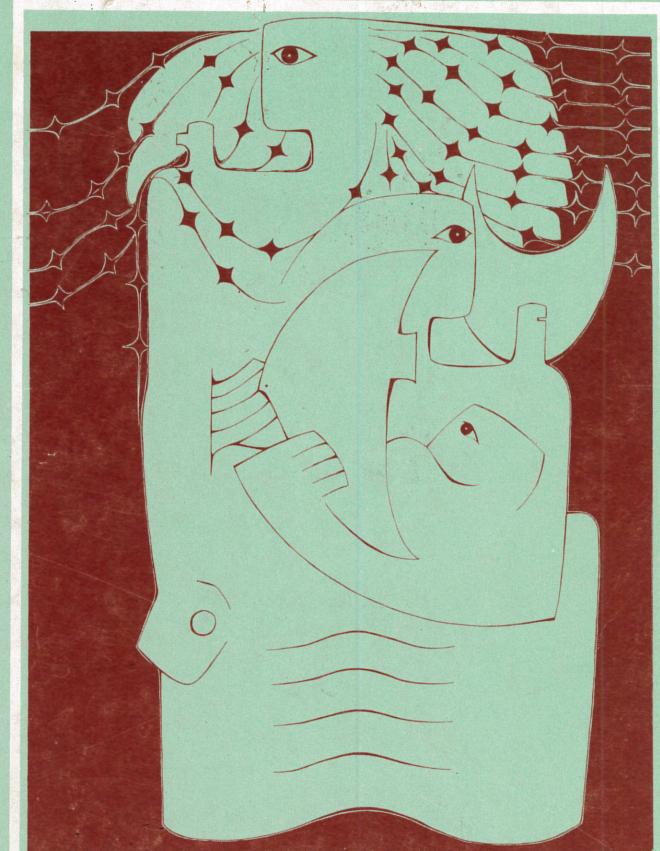
「お母さん」ハーリスは、青ざめた唇でそう叫んだ。その声が聞こえたのか、女は水をまく手を休めて、腰を伸ばし、ハーリスのすわつている丘の方を振り仰いだ。それはいつのまにか昔のままのハンヌに変つていた。

ハーリスは、あおむけに丘の上に寝て、眼を閉じた。涙が閉された瞼からふくれ上つて頬を伝つた。ハーリスは、幼い頃、父といつしょにもうでた赤壁のモスクのミヒラーヴに映つた金色の日射しを見たときのような喜悦を感じた。「今、自分はエデンの園にいるのだ」と、ハーリスは直感した。

カナン山の頂きに落ちかかつた夕日を浴びて、オリーブの樹は燃えていた。

(終)

終章 帰国



モナ・サウディ

「フィラステイン・びらーでい」特別号 1981年2月20日発行

編集発行人／ファヒ・アブドルハミード

発行所／PLO駐日代表事務所

〒153 東京都目黒区青葉台1-4-8 Tel. (03)463-2840

印刷所／株式会社 大平印刷

定価600円

FILASTIN BILADI JAN 1981 No. 14

Edited & Published by Fathi Abdul-Hamid, Director

PLO Office, Japan; TELEX:J27524 FATHI

14-8 Aobadai, Meguro-ku, TOKYO, Japan, 153